



斐川町文化財調査報告15

後谷V遺跡

1996年3月

丁教育委員会

うしろ だに 5

後谷 V 遺跡



島根県斐川町の位置

1996年3月

斐川町教育委員会



1 区 建物 遺構 全景



3 区 建物 遺構 全景

序

斐川町南部の丘陵地には、200を越える多くの遺跡・古墳が存在しています。そのうち、奈良～平安・鎌倉時代の遺跡・遺物散布地は48%で、ほとんど全域に分布しています。後谷V遺跡もこうした遺跡の密集地にあります。

本遺跡発見のきっかけは、平成3年に県道拡幅工事に伴う事前調査で大量の炭化米とともに大きな礎石が検出されたことがあります。翌4年度以降、文化庁および島根県教育委員会から補助金を得て本格的な範囲確認のための調査を行ってきました。4次にわたる調査の結果、奈良～平安時代に営まれた正倉跡であることが確認されました。しかも同一場所で掘立柱から礎石へ高床倉庫が変遷したことが明らかとなり、長期間にわたって正倉が管理されていたことがわかつてきました。733年に制定された『出雲國風土記』の記載によれば、本遺跡の所在する地域は出雲郡出雲郷に属し、出雲郡家はこの出雲郷内に置かれていたことが知られています。本遺跡の正倉跡はまさに出雲郡家の一施設ではないかとして注目されました。

正倉跡の調査は、今年度で一定の区切りといたします。今後は予想される郡庁の所在地や郡家諸施設の実態を調査することによって、律令社会における郡家の具体的姿を解明することができると考えています。

本書が風土記研究の一助になりますとともに、教育のために活用されることで、広く埋蔵文化財に対する関心と理解が高まりますことを期待するものであります。

最後に、調査・保存にあたりご協力いただいた土地所有者・奈良国立文化財研究所・島根県教育委員会・島根県埋蔵文化財調査センター・島根県出雲土木建築事務所並びにご指導いただいた調査指導の先生方に厚く御礼申し上げる次第であります。

1996年3月

斐川町教育委員会教育長 杉 谷 光 昭

例　　言

1. 本書は、斐川町教育委員会が平成4年度（第1次）から平成7年度（第4次）にかけて国庫補助事業として実施した後谷V遺跡発掘調査報告書である。

2. 調査年度と調査次、調査区、地番、地目は、以下のとおりである。

平成4年度	第1次	1区～4区	斐川町大字出西2049番地1外	田
平成5年度	第2次	5区	斐川町大字出西2055番地	畠
平成6年度	第3次	6区・7区	斐川町大字山西2120番地外	田
平成7年度	第4次	8区	斐川町大字出西2023番地	田

3. 調査組織は、次のとおりである。

【調査指導】

山本　清	(島根大学名誉教授、平成4～平成7年度)
田中義昭	(島根大学法文学部教授、平成4～平成7年度)
山中敏史	(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長、 平成4～平成7年度)
勝部　昭	(島根県埋蔵文化財調査センター長、平成4～平成6年度)
池田敏雄	(斐川町文化財保護審議会委員、平成4～平成7年度)
角田徳幸	(島根県教育委員会文化課主事、平成4年度)
足立克己	(島根県教育委員会文化課文化財保護主事、平成5年度)
広江耕史	(島根県教育委員会文化課主事、平成6年度、 文化財課文化財保護主事、平成7年度)

【事務局】

富岡俊夫	(斐川町教育委員会文化課長、平成4～平成7年度)
山根信夫	(斐川町教育委員会文化課係長、平成4、5年度)
錦織　勉	(斐川町教育委員会文化課係長、平成6、7年度)
昌子裕江	(斐川町教育委員会文化課主任、平成7年度)

【調査員】

金築　基	(斐川町教育委員会文化課主事、平成4年度)
四方田（北脇）三己	(斐川町教育委員会文化課主事、平成4年度)
宍道年弘	(斐川町教育委員会文化課主事、平成5～平成7年度)
陰山真樹	(斐川町教育委員会文化課主事、平成6年度)

【事務補助・遺物整理・報告書作製】

梅由子、内田久美子、青木由美、大田晴美（以上、斐川町教育委員会文化課臨時職員）

4. 本書を作製するにあたり、下記の方々より玉稿を賜った。

関　和彦（共立女子第二中・高等学校）、池田敏雄、和佐野喜久生（佐賀大学農学部）、柴田せつ子・川野瑛子（以上、大阪府立大学先端科学研究所アイソトープ総合研究センター）、浜崎

晃（株式会社日本海技術コンサルタンツ）、平石 充（島根県埋蔵文化財調査センター）

5. 自然科学・物理学、地質学的な調査・分析は、次の方々にお世話になった。

炭化米分析：和佐野芳久生、「¹⁴C年代測定：柴田せつ子・川野瑛子、樹種鑑定：光谷拓実（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）、電気探査：浜崎 晃、地質分析：中村唯史（島根大学地質学教室）

6. 本書の執筆・編集は企築の助言を得て、宍道が行った。遺物の実測・採拓は青木、トレースは大田、淨書は内田が補助し、宍道がこれを行った。遺物の写真撮影は桧山清記氏（フォトショップヒヤマ）の協力を頂いた。

7. 本書に掲載した第7図「後谷V遺跡と周辺の遺跡」は平成3年修正の建設省国土地理院発行の1:50,000「今市」、第8図「後谷V遺跡周辺的主要遺跡」は平成元年撮影・測図の島根県斐川町発行の1:5,000「斐川町基本図5」をそれぞれ使用した。

8. 本調査によって得られた資料（出土遺物、実測図、写真）は、斐川町教育委員会で保管している。

9. 本書で 表記した遺構は、下記の略号を使用している。

S A……棚列 S D……溝状遺構 S……礎石

S B……掘立柱建物 S K……土坑 P……ピット（柱穴）

10. 地形図、遺構図に表記した方位は、すべて国上座標に従ったものである。従って、北の方位は座標北である。

11. 第1次から第3次までは『出雲国出雲郡家正倉跡（後谷V遺跡発掘調査概報）』、『出雲国出雲郡家正倉跡II（後谷V遺跡第2次発掘調査概報）』、『出雲国出雲郡家正倉跡III（後谷V遺跡第3次発掘調査概報）』で既に概要を報告しているが、内容・記述についてはすべて本報告で統一した。

12. 第1次から第4次の調査にあたり、下記の方々に協力して頂いた。（順不同・敬称略）

【指導・助言】

池田満雄、伊藤瑞章、井上寛司、上原真人、内田律雄、大賀靖浩、恩田 清、亀田修一、川上 稔、瀧音能之、昌子寛光、巽淳一郎、常松幹夫、徳岡隆夫、西尾克己、西村 康、野坂俊之、林 健亮、原 俊二、原田昌幸、原 裕司、平川 南、平野邦雄、松下正司、松村恵司、松本 堅吾、松山智弘、三宅博士、水野正好、三原一将、森 公章、柳浦俊一

【地元協力】

西 富市、多々納彰一、西 一雄、青木 明、青木秀子

【発掘作業】

・地元

青木知子、青山 保、小豆沢敏子、小豆沢正人、飯塚弘子、池田 良、遠藤繁義、岡 真義、岡トシ子、陰山慶子、陰山トミエ、陰山百合子、陰山律雄、梶谷松代、川内幸子、黒田幸一、黒田友彦、佐藤倭和子、島田邦久、鷲田澄江、島田富美子、呂子健二郎、昌子流市、高木長一、高橋重雄、多々納恵子、梅 真一、梅 富子、長谷川恒太郎、浜下奈津子、樋野喜久、日野吉正、村上花子、持田繁義、元井清二、矢野政子、山根作夫

・学生

田島夕美子、中本八穂（以上、奈良大学院生）、高雄由起子（奈良大学学生）、富田 修（青山学院大学学生）、飯塚賢治（駒沢大学学生）、島山幹也（岡山商科大学学生）

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次・表目次・図版目次

I 調査に至る経緯と経過	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	2
(1) 第1次調査（平成4年度）	2
(2) 第2次調査（平成5年度）	5
(3) 第3次調査（平成6年度）	5
(4) 第4次調査（平成7年度）	5
II 位置と環境	6
1. 遺跡の位置と周辺の歴史的環境	6
2. 周辺の神話・地名伝承	(池田敏雄) 10
(1) 神話による地名伝承	10
(2) 遺跡と関わりのありそうな地名伝承	11
(3) むすび	12
III 調査の概要	13
1. 1 区 の 調 査	13
(1) 検出遺構	13
(2) 出土遺物	21
2. 2 区 の 調 査	30
(1) 検出遺構	30
(2) 出土遺物	32
3. 3 区 の 調 査	32
(1) 検出遺構	32
(2) 出土遺物	38
4. 4 区 の 調 査	38
(1) 出土遺物	38
5. 5 区 の 調 査	39

(1) 検出遺構	39
(2) 出土遺物	41
6. 6 区の調査	42
(1) 検出遺構	43
(2) 出土遺物	44
7. 7 区の調査	46
(1) 検出遺構	47
(2) 出土遺物	48
8. 8 区の調査	54
(1) 検出遺構	54
(2) 出土遺物	57
 IV 自然科学・物理学的調査 68	
1. 後谷V遺跡の炭化米特性と稻作起源 (和佐野喜久生) 68	
(1) 材料及び方法	68
(2) 結果及び考察	69
① 北部九州及び韓国の古代稻の粒特性と分類法	69
② 後谷V遺跡の古代稻の粒特性	70
(3) 要約	72
2. 出土炭化米の ¹⁴ C年代測定結果について (柴田せつ子・川野瑛子) 78	
(1) 測定試料	78
(2) 測定原理及び測定方法	78
(3) 試料調整	78
(4) 年代測定結果	78
(5) 歴年代(校正年代)	78
3. 後谷V遺跡発掘調査にかかる電気探査 (浜崎 晃) 80	
(1) はじめに	80
(2) 高密度電気探査	80
(3) 調査結果と解釈	80
(4) まとめ	84
 V 出雲国風土記の正倉 (関 和彦) 85	
1. はじめに	85
2. 『出雲国風土記』の正倉記事	85
3. 『陰奥国風土記』逸文の正倉	88

4. 正倉記事の検討 — 「即ち」考 —	89
5. 交通路と正倉 — 個別的研究 —	90
6. 意宇郡・神門郡の正倉	91
7. おわりに	93
VI まとめ	95
1. 遺物の検討	95
(1) 遺構に伴う遺物	95
(2) 遺構に伴わない遺物	95
(3) 墨書き器について	(平石 充) 97
2. 遺構の検討	99
3. 後谷V遺跡の性格と今後の課題	101

挿 図 目 次

巻頭挿図 烏根県斐川町の位置

第1図 グリッド調査区配置図	2
第2図 グリッド調査風景	2
第3図 調査区全体配置図	3
第4図 建物遺構配置図	4
第5図 発掘調査風景	5
第6図 福城遺跡出土軒丸瓦	7
第7図 後谷V遺跡と周辺の遺跡	8
第8図 後谷V遺跡周辺の主要遺跡	8
第9図 後谷V遺跡周辺の伝承地名図	11
第10図 1区遺構平面図	15~16
第11図 SB 0 1 実測図 (1:80)	17
第12図 SB 0 3 実測図 (1:80)	18
第13図 SB 0 2、SB 0 4 実測図 (1:80)	19~20
第14図 1区SB 0 4-P ₅ 出土遺物実測図 (1:3)	21
第15図 1区出土遺物実測図 (1:3) ①	22
第16図 1区出土遺物実測図 (1:3) ②	26

第17図	1区出土遺物実測図（1：3）③	27
第18図	1区出土遺物実測図（1：3）④	28
第19図	1区出土遺物実測図（1：3）⑤	29
第20図	2区遺構実測図（1：40）	30
第21図	2区出土遺物実測図（1：3）①	31
第22図	2区出土遺物実測図（1：3）②	31
第23図	3区遺構平面図	33～34
第24図	3区S B 0 5 実測図（1：80）	35～36
第25図	3区出土遺物実測図（1：3）	37
第26図	4区出土遺物実測図（1：3）	39
第27図	5区遺構平面図（1：100）	40
第28図	S B 0 6 実測図（1：80）	41
第29図	柱穴（△）実測図（1：40）	42
第30図	5区出土遺物実測図（1：3）	42
第31図	6区平面図（1：200）	43
第32図	6区南壁上層図	43
第33図	6区杭列実測図（1：40）	44
第34図	6区出土遺物実測図（1：3）①	45
第35図	6区出土遺物実測図（1：3）②	46
第36図	S D 0 5（1）、S K 0 1（2）、S K 0 3（3）出土遺物実測図（1：3）	48
第37図	7区遺構平面図（1：100）	49～50
第38図	S D 0 5 実測図（1：40）	51
第39図	S A 0 1 実測図（1：40）	51
第40図	S K 0 1 実測図（1：40）	52
第41図	S K 0 2 実測図（1：40）	52
第42図	S K 0 3 実測図（1：40）	52
第43図	7区出土遺物実測図（1：3）①	53
第44図	7区出土遺物実測図（1：3）②	54
第45図	8区遺構平面図（1：100）	55
第46図	S D 0 6 実測図（1：40）	56
第47図	S D 0 7・S D 0 8 実測図（1：40）	56
第48図	8区出土遺物実測図（1：3）①	57
第49図	8区出土遺物実測図（1：3）②	57
第50図-1	遺構V-1、2、5の炭化米粒写真	76
第50図-2	遺構V-7、10の炭化米粒写真	77

第51図	79
第52図	79
第53図 測定結果の表示	81
第54図 調査地平面図	81
第55図 A - 1 比抵抗図	82
第56図 B - 1 比抵抗図	82
第57図 C - 3 比抵抗図	83
第58図 D - 1 比抵抗図	83
第59図 墨書き土器	97
第60図 I 期建物群の配置	102
第61図 II 期建物群の配置	102

表 目 次

表1 周辺の遺跡一覧表	9
表2 磚石計測表(1)	58
表3 磚石計測表(2)	59
表4 柱穴計測表	59
表5 山上遺物観察表(1)	60
表6 出土遺物観察表(2)	61
表7 山上遺物観察表(3)	62
表8 出土遺物観察表(4)	63
表9 出土遺物観察表(5)	64
表10 出土遺物観察表(6)	65
表11 出土遺物観察表(7)	66
表12 石器一覧表	67
表13 稲粒（米、穀）特性の指標、指標別階級値及び特性の表現法（和佐野、1995）	73
表14 稲粒（米、穀）の粒長・粒幅指標による粒型分類（和佐野、1995）	73
表15 北部九州及び韓国の比較・対照遺跡の炭化米粒特性（和佐野、1995）	73
表16 北部九州及び韓国の比較・対照遺跡の炭化米粒の粒型分布表（和佐野、1995）	74
表17 後谷V遺跡の炭化米粒特性表	74
表18 後谷V遺跡の炭化米の粒型分布表	75
表19	79
表20 「倉」関係墨書き土器の出土遺跡	98

表21 建物遺構の時期	100
表22 建物遺構計測表	101

図 版 目 次

巻頭図版 1区建物遺構全景、3区建物遺構全景

- 図版1 後谷V遺跡周辺航空写真（1995年撮影）
- 図版2 1区・2区全景、1区SB01
- 図版3 1区SB02、1区SB03
- 図版4 1区SB02-S₁₉、1区SB03-P₆、1区SB04-P₃
- 図版5 3区SB05（北東から）、3区SB05（東から）、3区SB05（北から）
- 図版6 3区SB05-S₄、3区SB05石列、3区SB05とSD04（南から）
- 図版7 5区全景
- 図版8 4区全景（東から）、5区SB06（南から）、5区SB06（東から）、5区柱穴（A）
- 図版9 6区杭列検出状況、6区杭列（東から）、6区弥生土器出土状況
- 図版10 7区全景、8区全景
- 図版11 7区礎石（A）、7区礎石（B）、7区SD05（東から）
- 図版12 7区SA01検出状況（東から）、7区SK01（南東から）、7区SK03（東から）
- 図版13 7区打製石斧出土状況、8区SD06（西から）、8区SD07（西から）
- 図版14 1区SB04-P₅出土須恵器、1区出土墨書き土器
- 図版15 1区出土縄文土器、1区出土須恵器
- 図版16 1区出土土師質土器
- 図版17 1区出土土師質土器
- 図版18 1区出土土師質土器
- 図版19 1区出土白磁・青磁、1区出土石器
- 図版20 1区出土縄文土器・須恵器・土師質土器、2区出土石器
- 図版21 3区出土弥生土器・須恵器・土師質土器
- 図版22 4区出土縄文土器・弥生土器、5区出土弥生土器・須恵器・土師質土器
- 図版23 6区出土弥生土器
- 図版24 6区出土弥生土器・須恵器、7区SD05出土土師器、7区SK01出土須恵器、7区SK03出土須恵器
- 図版25 7区出土縄文土器・土師器・須恵器・土師質土器
- 図版26 7区出土石器、8区出土縄文土器・土師質土器、8区出土石器

I 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

平成2年度、島根県出雲土木建築事務所は斐川町大字出西地内において一般県道本次直江停車場線緊急道路整備事業を計画していた。事業の施行面積は9,200m²（総延長920m×平均幅10m）にもおよび、この範囲内に既に小野遺跡（斐川町遺跡地図191号）、後谷Ⅰ遺跡（同96号）、後谷Ⅱ遺跡（同97号）が知られていた。斐川町教育委員会は計画地内にほかにも遺跡が存在する可能性があるとして県出雲土木建築事務所と協議の上、平成2・3年度に現地踏査を行うとともに、36ヶ所のグリッドを設定して遺跡の確認調査を実施することとした（第1図）。

踏査の結果、上記の遺跡以外に後谷V遺跡、稻城遺跡、水室Ⅲ遺跡を発見し、結局、事業計画地内には6つの遺跡が全域にわたって存在していることがわかった。また、グリッド調査によって後谷V遺跡、小野遺跡、稻城遺跡からは土器類が多量に発見され重要な遺跡であることを予感させた。

後谷V遺跡のグリッド調査は平成3年度に実施した。調査グリッドはNo.6、No.7、No.8、No.8-1、No.9、No.10グリッドの6ヶ所で、3×3mのグリッドを設定して調査を行った。そのうちNo.7からは水田下2.1mより多数の上師質土器とともに径1mの大礎石が数点、No.8からは水田下1.9mより多数の須恵器や土師質土器、No.8-1からは水田下2.3mより繩文土器、No.10からは水田下1mより礎石列と炭化米が出土した。とくにNo.7とNo.10から出土した礎石の時期は出土土器から奈良～平安時代とみられ、官衙または寺院に関する遺構の一部の可能性が考えられた。この調査の結果、後谷V遺跡にかかる事業計画地内はすべて遺跡が存在することがわかったため、平成4年度において町教育委員会と県出雲土木建築事務所とは事前に発掘調査を行うことについての協議がもたれた。そして、町教育委員会は4年度に後谷V遺跡1～4区の第1次調査を実施することとなった。この結果、1区においては礎石建物1棟、掘立柱建物2棟を新たに検出することができた。いずれも総柱の構造であることや大量に炭化米を伴うことから、穀物を収納した倉庫が焼失した建物であろうと考えられた。3区においても大量の炭化米とともに中小の石列を配した珍しい基礎構造をもつ大型の礎石建物が検出された。このように、1・3区でみられた倉庫群は、建物の配置、規模、年代、『出雲國風土記』の記述からみて出雲郡家の諸施設のうちの正倉跡である可能性が高くなってきた。

一方、町教育委員会は文化省、島根県教育委員会と協議して道路部分だけでは遺跡の全容がわからないとして、周辺の民有地を含めた本格的な範囲確認調査を補助事業として実施することにした。平成5年6月1日に町教育委員会は、「一般県道本次直江停車場線緊急地方道路整備事業に伴う遺跡の取り扱い」について県教育委員会と協議を行い、同年6月18日付けて町、町教育委員会、県教育委員会の3者で覚書がかわされた。即ち、①「出雲郡家」にかかる遺跡が存在する可能性があり全容が解明された時点において、②町は遺跡を保存整備するとともに保存すべき域内の路線の付け替えについて責任をもつ、という覚書の内容であった。これによって、平成5年度以降も補助事業として後谷V遺跡の全容解明のために継続かつ計画的な調査がなされることとなった。

これらの協議に基づいて、平成5年度（第2次）は5区、6年度（第3次）は6区と7区、7年度（第4次）は8区の調査を実施した（第3図）。



第1図 グリッド調査区配置図



No.7 完掘状況



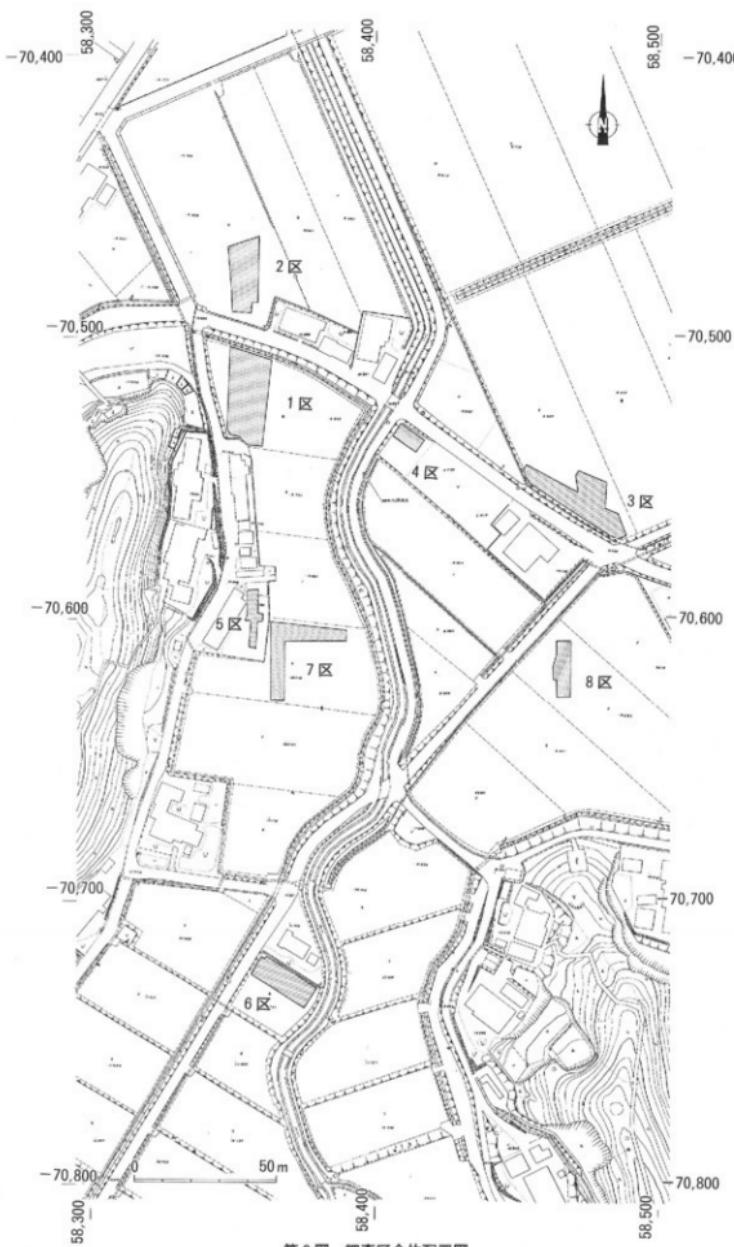
No.10 完掘状況

第2図 グリッド調査風景

2. 調査の経過

(1) 第1次調査（平成4年度）

平成4年度に第1次調査として1区420m²、2区240m²、3区550m²、4区50m²の調査を平成4年7月から平成5年3月にかけて行った。1区は平成3年度に道路敷地部分の調査が終了した後、4年度に民有地を含めて調査を行った。道路部分では礎石建物（SB01）が1棟検出され、これが北側（旧道路下）へ延びるものと考えられた。4年度の調査では、新たに設定した調査区南



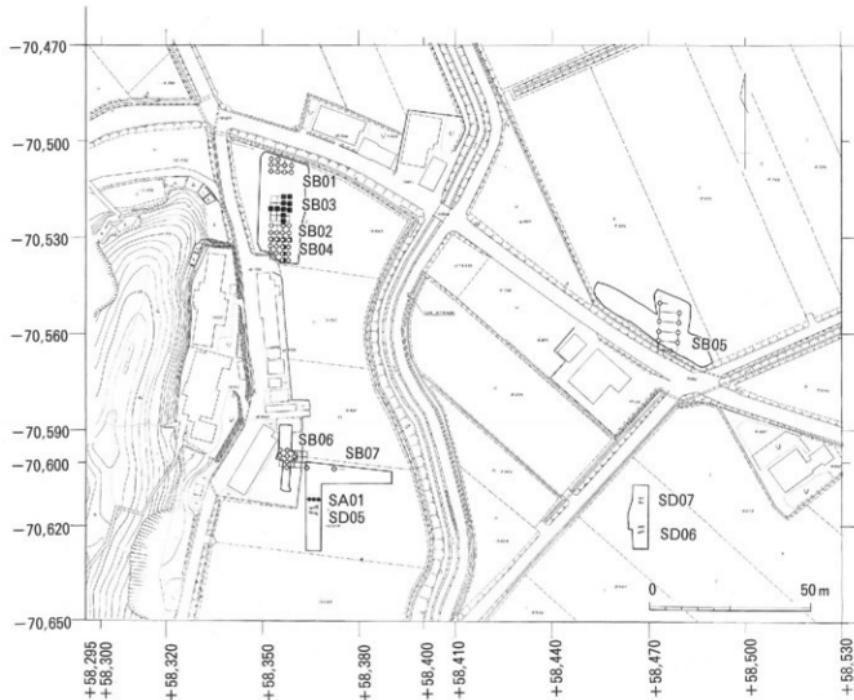
第3図 調査区全体配置図

寄りで礎石建物1棟(SB02)を確認することができた。さらに、SB02の東側から2列目の礎石列に沿って南北方向にサブトレンチをあけ下層の堆積状況を調べたところ、SB02の北側で掘立柱建物(SB03)とSB02の真下で掘立柱建物(SB04)を検出することができた。SB04は上層断面での確認にとどめた。また、SB01の南側とSB02の西側で溝状遺構が検出され、大量の炭化米が出土した。

3区も道路敷地部分の調査で確認された中小の石を多数伴った礎石建物が検出された。建物が北側へつづく可能性があったため、北側の民有地へ調査区を拡張して行った。結局、総柱ではないものの特異な基礎構造をもつ礎石建物(SB05)であることがわかった。建物の西側では溝状遺構が検出された。ここでも大量の炭化米が確認されたが、出土した土器の数は少量であった。

なお、2区および4区は、奈良～平安時代の明確な遺構は検出できず、出土遺物も少なかった。

第1次調査では1～4区周辺の地形測量を1:500の縮尺で行うとともに、1区と3区ではラジコンヘリによる遺構の空中写真撮影を行った。また、1区と3区の南北ラインで電気探査を行い次年度調査の資料に資することとした。



第4図 建物遺構配置図

(2) 第2次調査（平成5年度）

平成5年度は第2次調査として5区60m²の調査を平成5年12月から平成6年3月にかけて行った。ここに調査区を設定した目的は、1区で確認された礎石建物群が南側へどこまで続くのかを確認するために行った。設定にあたっては電気探査のデータをもとに1区の南48mの地点に調査区を設けた。調査の結果、4×3間の東西棟の総柱礎石建物（SB06）1棟を検出することができた。炭化米は多く検出されたが、遺物は少量であった。

第2次調査では5区周辺の地形測量、遺構の空中写真撮影、5区より東側の電気探査を行った。

(3) 第3次調査（平成6年度）

平成6年度は第3次調査として6区175m²、7区290m²の調査を平成6年7月から平成7年3月にかけて行った。6区は後谷公民館の南側（谷奥側）に防火用水槽が設置されることになり、事前に調査を行ったものである。5区でみられた建物群から南へ200mの距離にあたり、関連を調べる目的で行った。結果、奈良～平安時代の遺構・遺物はほとんど検出できなかったが、杭列遺構や多数の弥生土器を検出することができた。

7区は5区のすぐ東隣の水田部にL字状の調査区を設定した。5区で得られた成果を基に東西と南北方向に電気探査を行ったところ、東西ライン（基点より東へ4～15m）で高い抵抗値を示すデータが得られた。これを基に5区の東側水田部に東西26m、南北4～7mのトレチを設定し、新たな遺構の確認に努めた。また、1区で確認された建物群の南限を確認する目的で東西トレチの西端から南側へ南北28m、東西5mのトレチを設定した。結果、SB06の南東隅の礎石と新たにSB07の礎石、溝状遺構、柵列等を検出することができた。

このほか第3次調査では6区と7区周辺の地形測量、7区の遺構の空中写真撮影を行った。

(4) 第4次調査（平成7年度）

平成7年度に第4次調査として8区100m²の調査を平成7年10月から平成8年1月にかけて行った。ここは、7区の調査で東西に走る溝状遺構が検出されたのをうけ、この溝が東側でどのように検出できるのか、即ち建物群の南東部を画する施設なのかどうかを確認する目的で行った。結果的に溝状遺構2条を検出することができた。

第4次調査では8区の遺構の空中写真撮影を行った。



第1次調査（3区）作業風景



第3次調査（7区）作業風景

第5図 発掘調査風景

II 位置と環境

1. 遺跡の位置と周辺の歴史的環境

後谷V遺跡の所在する島根県簸川郡斐川町は宍道湖の西岸に位置し、中国山地に源を発する斐伊川の下流域に形成された沖積平野（簸川平野）と標高300級の仏経山や大黒山を中心とする山々から成り立っている。

後谷V遺跡は斐川町の南西部に位置する仏経山頂（標高366m）から西へ2.4km、斐伊川の右岸から1.5kmの低丘陵に挟まれた「後谷」の出口あたりに立地している。斐伊川は近世以降、大量の土砂を平野にもたらすが、遺跡のあるあたりは古代においてはその影響をあまり受けていなかったところのようである。

斐川町内で遺跡の密集地といえばやはり南部の丘陵地と谷あいである。これまでに縄文時代から中世までの貴重な遺跡が200カ所以上知られている。とくに、昭和59年・60年に銅劍358本、銅矛16本、銅鐸6個が発見され全国的に有名になった荒神谷遺跡（国指定史跡）は、弥生時代の山陰のイメージを大きく変えた。以下に後谷V遺跡周辺の代表的な遺跡の概要を述べることにする。

斐伊川鉄橋遺跡

昭和37年、国鉄山陰本線の斐伊川鉄橋かけかえ工事中に多数の弥生式土器が発見された。これらの土器は10ヶ所の新橋脚のうち東側堤防から1、2、3番目の脚柱穴と、西側から3番目の脚柱穴の深さ7m前後の粘土層から発見された。

出土した土器に完形品はないが、少量の弥生時代後期の壺や甕、器台と複合口縁を有する壺など多くの古式土器が発見された。

長者原古墳群

後谷V遺跡の南東0.5km、標高70mの丘陵上に位置する。南北に長く延びる丘陵の中ほどに9基近くの円墳がある。中でも竪端に近い1基は帆立貝状の前方後円墳を思わせる。いずれも径7~8mで、墳丘は高い。周辺に石片が散在しているが、明治末年に土地の老人が掘ったところ石室があり、刀やカワラケが出たという伝えがある。

周辺の丘陵上をみると、円墳3基からなる押屋古墳群や円墳1基、方墳3基からなる後谷丘陵古墳群が存在するなど小規模古墳群が集中する地域である。

出西小丸古墳群

後谷V遺跡の南西1.3km、標高20mの丘陵の西側斜面に3基の円墳状古墳が存在する。1号墳（旧名・丸子古墳）は径10m、高さ2.5mの円墳で横穴式石室が西に開口する。玄室は長方形プランで玄室と羨道との境は一枚の切石で閉塞し、閉塞石には宍道湖周辺に6例がみられる門状の陽刻が施されている。昭和27年の調査の際、羨道部に陥入した土中から須恵器の脚付子持壺の破片が2個体分出土して、現在は県立出雲高校に保管されている。

2号墳（旧名・栖雲寺山古墳）は、1号墳のすぐ上方にある円墳で、羨道部より前面は失われ、西に開口する横穴式石室である。玄室は大型切石を使用し、ほぼ正方形プランに造られる。

3号墳は円墳と思われるが未掘である。

古墳時代後期における在地首長層の動向を知る上で重要な古墳群といえる。

稲城遺跡

県道（本次直江停車場線）の拡幅工事に伴う事前調査によって平成4年度に発掘された。後谷V遺跡の東側に隣接する遺跡である。遺構は明確ではないが、これまでに多数の須恵器、土師器、土師質土器のはかに呪符木簡や軒丸瓦（第6図）も出土した。

呪符木簡は「(符籙)如律令」という呪句が読みとれ、平安時代の庶民の切実な思いがうかがわれる。軒丸瓦は1点だけで、安来市教吳寺I b類軒丸瓦と同類瓦である。

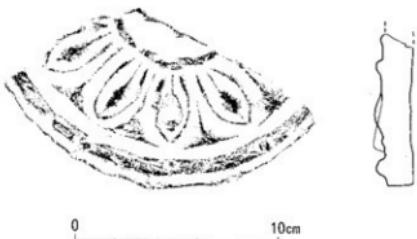
小野遺跡

稲城遺跡同様、県道の拡幅工事に伴って平成5年度に発掘された。後谷V遺跡から東へ0.5kmの位置になる。1～8区までの調査が行われ、1～4区では中世の掘立柱建物跡3～4棟、小ピット多数、溝状遺構2条、石列等が検出された。出土遺物には弥生土器、古式土師器、須恵器、土師器、土師質土器、陶磁器、瓦類がある。なかでも瓦類は特徴的である。種類としては軒丸瓦、丸瓦、平瓦、鷲尾がある。軒丸瓦は単弁と複弁の2種があり、単弁のものは安来市教吳寺I b類軒丸瓦と同類瓦、複弁のものは簡素な水切りをもつもので、文様は出雲市神門寺境内廃寺の軒丸瓦と類似している。

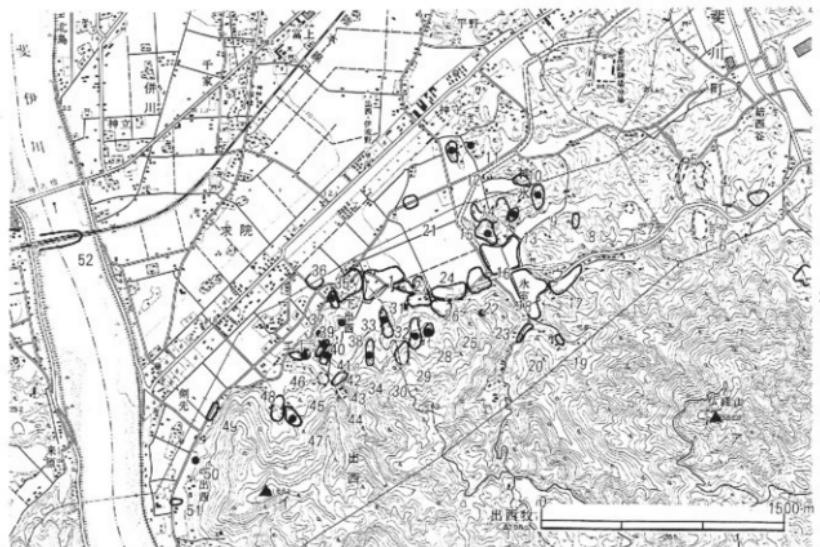
5～6区は奈良～平安時代の掘立柱建物跡5棟以上と溝状遺構2条が検出された。2×2間の総柱、3×2間以上の総柱、3×2間、2×2間以上の掘立柱建物跡が確認できる。出土遺物としては須恵器、土師器、土師質土器の他に、円面鏡、土馬、丹塗土器、漆塗木器がある。円面鏡は径14.3cmで透かし高台をもつ、土馬は体長9.8cmで頭、尾尻、四肢を欠き胴部に飾りをつけた痕跡が認められる。7～8区では、溝状遺構2条、小ピット多数がある。須恵器、土師器、土師質土器の他に墨書き土器、丹塗土器、漆塗土器が出土した。墨書き土器は輪状つまみ付きの蓋でつまみ内面に「大」に似た文字がみえる。以上のように多くの遺構、遺物が出土した小野遺跡は、奈良～平安時代において何らかの公的な施設あるいは在地有力者の住まいがあったのではないかと想像される。また、教吳寺系や神門寺境内廃寺系の瓦が出土したことは、当町の仏教文化の導入期を考える上で貴重な資料を残すこととなった。

参考文献

- 斐川町教育委員会『斐川町史』1972年
- 斐川町教育委員会『遺跡分布調査報告書』1992年
- 斐川町教育委員会『出雲国出雲郡家正倉跡』1993年



第6図 稲城遺跡出土軒丸瓦



第7図 後谷V遺跡と周辺の遺跡



第8図 後谷V遺跡周辺の主要遺跡

表1 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	台帳番号	概要
1	後谷V遺跡	斐川町出西	官衙跡	197	獨立柱建物跡、斜穴住居跡、攤文・弥生土器、須恵器、土師質土器、石器、磨石工具、他
2	紙園原遺跡	斐川町直江	散布地	187	須恵器、陶磁器
3	結本谷I遺跡	斐川町直江	散布地	67	須恵器
4	結西谷III遺跡	斐川町直江	散布地	151	須恵器、土師質土器、黒曜石
5	結西谷II遺跡	斐川町直江	散布地	60	須恵器、磁器
6	直江石楠I遺跡	斐川町直江	住居跡	61	燒土土壤、須恵器、土師器、石器、他
7	有間谷遺跡	斐川町神水	散布地	166	須恵器
8	有間谷II遺跡	斐川町神水	集落跡	167	柱穴、須恵器、土師器、他
9	神水古墳群	斐川町神水	古墳群	84	5基・1・5号(円墳)、2~4号(方墳)
10	神守Ⅱ遺跡	斐川町神水	散布地	89	
11	神守古墳群	斐川町神水	古墳群	81	円墳2基
12	神守城跡	斐川町神水	城跡	174	山城
13	城山東古墳群	斐川町神水	古墳群	87	方墳4基以上
14	城山城跡	斐川町神水	城跡	159	山城
15	城山古墳群	斐川町神水	古墳群	54	15基・1~7号(方墳)、11、12号(円墳)、出土埴形不明、2号(剣片、砥石、他)
16	水室I遺跡	斐川町神水	散布地	82	須恵器
17	水室II遺跡	斐川町神水	散布地	83	須恵器
18	水室IV遺跡	斐川町神水	散布地	143	弥生土器、須恵器、土師器
19	和西II遺跡	斐川町神水	散布地	190	土師質土器、陶磁器
20	和西I遺跡	斐川町神水	散布地	86	土師器、須恵器
21	神守I遺跡	斐川町神水	散布地	85	土師器
22	水室III遺跡	斐川町神水	集落跡	116	土師器、須恵器
23	新在古墳	斐川町神水	古墳	90	
24	小野遺跡	斐川町神水	集落跡	91	獨立柱建物跡、溝状遺構、弥生土器、須恵器、土師質土器、円筒形、土器、瓦類、他
25	外ヶ市古墳	斐川町神水	古墳	12	横穴式石室、須恵器、他
26	外ヶ市II古墳	斐川町神水	散布地	88	土師器、須恵器
27	後谷I遺跡	斐川町出西	集落跡	96	須恵器
28	押原古墳群	斐川町出西	古墳群	199	円墳3基
29	長ノ原古墳群	斐川町出西	古墳群	91	9基・帆立貝状1基、他は円墳
30	郡家(長者原)推定地	斐川町出西	古墳	195	須恵器、土師質土器、砥石、他
31	稻城遺跡	斐川町出西	集落跡	198	須恵器、土師質土器、尻荷木盤、瓦、他
32	後谷古墳	斐川町出西	古墳	44	円墳
33	稻城丘陵古墳群	斐川町出西	古墳群	158	
34	後谷東古墳群	斐川町出西	古墳群	49	円墳2基
35	後谷II遺跡	斐川町出西	散布地	97	須恵器、磁器
36	沢田I遺跡	斐川町出西	散布地	103	土師質土器、青磁
37	沢田横穴群	斐川町出西	横穴墓	33	
38	後谷町通塙古墳	斐川町出西	古墳	107	横穴式石室
39	八幡宮横穴墓	斐川町出西	横穴墓	18	
40	後谷丘陵古墳群	斐川町出西	古墳	193	円墳1・方墳3
41	後谷横穴墓	斐川町出西	横穴墓	95	3穴
42	後谷Ⅲ遺跡	斐川町出西	散布地	98	須恵器
43	後谷IV遺跡	斐川町出西	散布地	99	土師器、須恵器
44	稻城古墳群	斐川町出西	古墳群	15	
45	登道古墳	斐川町出西	古墳	45	円墳
46	出西小丸古墳群	斐川町出西	古墳群	13	3基・1号(横穴式石室、閉塞石に凹状の施削跡、子持窓)、2号(横穴式石室)
47	山ノ奥横穴群	斐川町出西	横穴墓	16	23穴以上
48	山ノ奥I遺跡	斐川町出西	散布地	102	土師器、須恵器
49	中出西I遺跡	斐川町出西	散布地	101	土師器、土師質土器
50	剣先横穴群	斐川町出西	横穴墓	94	2穴以上
51	中出西II遺跡	斐川町出西	散布地	194	土師質土器、陶磁器
52	斐伊川鉄橋遺跡	斐伊川鉄橋・山雲市	散布地	119	弥生土器、古式土師器
ア	仏経山	斐川町出西・神水			神名火山(風土記)
イ	三本松山	斐川町出西			お立て山(國引き神話)
ウ	曾根能夜神社	斐川町神水			曾夜乃夜社(風土記)
エ	久武神社	斐川町出西			久牟社(風土記)

2. 周辺の神話・地名伝承

平成3年度より4次にわたって発掘調査が実施された後谷V遺跡は、『出雲国風土記』の出雲郡出雲郷の条「即属郡家」に相当することの蓋然性を高めた⁽¹⁾。たまたまこの地や周辺には、それと関わりのありそうな神話・地名伝承が多くあるので記すことにする（第9図）。

（1）神話による地名伝承

① 稲城（いなぎ）

その昔、須佐之男命が高天が原からこの地に天下りになると、奥地の川あいからもむくむくと幾重にも流れ出る雲に驚かれ、こんな雲の多いところに人が住んでいるだろうかと思われながら、ふと海辺に流れ出る大川に目をされると「箸」が流れて来ました。

「人が住んでいる」と喜んで川上に足を運ばれると、「おきな・おみな」が「おとめ」を中心にして泣いていました。

～ ここから、古事記に記されている須佐之男命の八俣大蛇退治になる。

さて、須佐之男命が大蛇退治に出発されるにあたって、稻田姫命の身を深く案じられ、稲藁で七重八重に垣を巡らした城を作つてそこにかくまわれた。つまり稲城をつくられたのである。

「稲城」の地名がここにあるのは、このような神話伝承によるからである⁽²⁾。

② 雲社（くものやしろ）

須佐之男命が大蛇退治を終えてお帰りになり、稻田姫命がお待ちになつてゐる稲城にお入りになると、それをめでるかのようにそこかしこから雲が湧き出るようにして充満し城を包みました。

大変お喜びになった須佐之男命は満面笑みて「八雲立つ 出雲八重垣 妻隠みに 八重垣作る その八重垣を」とお歌いになりました。

その稲城の跡にこの二神をお祀りした「雲社」があったそうですが、幾度かの遷座によりそのあとかたが消失、現在は久武社（くわのやしろ）として同地域内の他の場所に祀られている⁽³⁾。

③ 朝妻里（あさつまのこざと）

須佐之男命が毎夜稻田姫命を妻問い合わせて、毎朝お帰りになった里（さと）ということから、この地域の地名となつたといわれている。

稻田姫命の館跡といわれている場所には、現在姫神を祀る稻田明神があり、遺跡に隣接している。なお、この明神社の西南約300mの山麓には、御崎荒神といつて須佐之男命を祀る祠があり、そこが須佐之男命の館があつたところと伝えられている⁽⁴⁾。

正倉院文書『出雲国大税賄給歷名帳⁽⁵⁾』の出雲郷にこの朝妻里名があるが、上記の伝承によつたものと思われる。

なお、この『歷名帳』の朝妻里に「寡」（か→老独女）として稲置（城）部が記されていることも意義あるように思われる。また、この朝妻里から「魏志倭人伝」に記されている投馬国を想定することも考えられる。

(2) 遺跡と関わりのありそうな地名伝承

① 長者原（ちょうじゃばら）

『山雲風土記考』^⑯は、ここを郡家に比定しているが、やや不便な丘陵地なうえに狭小でもあり妥当性に欠ける。

伝承では、その昔、学問の好きな大変立派な長者（大和時代の首で稻置であったとも考えられる）が住んでおり、朝鮮半島渡米の学者である畠（秦）氏が仕えていたと伝えられている。その畠氏は江戸時代中期ごろまで豪農としてこの地で栄えていたが、その後裔がふるわざ今は絶家となっている。

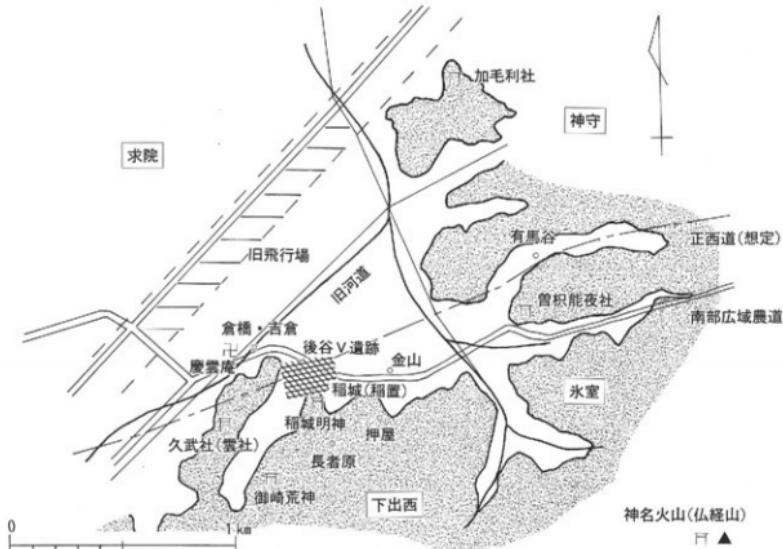
② 慶雲庵（けいうんあん）

平成4年発掘の正倉跡の隣接地にこの庵があった。『雲陽誌』^⑰によれば、上記畠氏の建立とするが、なぜ704～707年に使われた年号を用いたのであろうか。同時代の郡家との関わりを想量したくなる。（現在は慶雲庵觀音堂として筆者の宅地内にある）

③ 押屋（おしや）

稻城（この地名を屋号にしていた家がこの地にあったが江戸時代末絶家となる）の地に隣接して「押屋」の地名がある。そしてこの地にある民家の屋号にもなっている。

「おさのや→おさや→おしや」の音韻変化が考えられ、郡司（郷長）の館跡ではなかったかと思われる。



第9図 後谷V遺跡周辺の伝承地名図

④ 有馬谷（ありまだに）

遺跡の東方約500mの地にある緩やかな谷間をいう。この地は『出雲國風土記』にいう正西道（まにしのみち）が通っていたと考えられる場所で、郡庁舎（郡家）の一部で厩牧令にいう厩家が置かれた所ではないかと思われる。

⑤ 倉橋・占倉（くらはし・よしくら）

正倉跡との距離約50m北側の旧川（平成2年川跡発掘）に架っていた橋の名を「倉橋」といっていた。また、その近くには「吉倉」という地名があったと言われている。現在は両地名ともその近くの家の屋号となっている。

⑥ 神名火山（かむなびやま）

『出雲國風土記』に4山が記されている。そしてこの神山にもっとも近い郷に郡家がある。ちなみに、意宇郡（おうのこほり）は神名樋野→郡家約1.8km。秋鹿郡（あきかのこほり）は神名火山→郡家約4.8km。楯縫郡（たてぬひのこほり）は神名樋山→郡家約3.5km。出雲郡は神名火山→郡家約1.8kmである。

山にこもれる神が、春から秋にかけて野辺に下って、農作物の豊穣をねがう民を見守る。という神山を郡家の背後にもつことの意義が考えられる。このように思量すると、発掘された（1区～8区）正倉跡に隣接して出雲郡家があったことが想定される。

⑦ その他

全国的に郡家（郡衙）遺跡の態様をみると、郡庁の外に種々の付属施設や仏教・祭祀関係の施設がみられる。

ここ後谷V遺跡の周辺には、前述したように厩家らしき地名があり、また、平坦地には「金山」という地名があって、金属生産工房があったではないかと想像される。

この遺跡の東方約200mの地から同時代と思われる寺院瓦の出土や前述した慶雲庵の存在、前述の各社等を思量すると、全国なみの郡家（郡衙）遺跡の存在が想定される。

なお、横枕、京田、大田、坪の内等条里制にかかる地名がこの地にあることも見逃すことはできない。

(3) むすび

「郡家の所在地は比処」という前提で、後谷V遺跡周辺の神話・地名伝承を限りなく取り上げたつもりである。しかしこれは、郡家遺跡の発掘があつてこそ確かな伝承といえる。

今後も継続的な調査で郡家の全容を解明されることが待たれる。

池田敏雄（斐川町文化財保護審議会委員）

註

- (1) 斐川町教育委員会『出雲国出雲郡家正倉跡』1993年
II・1994年、III・1995年
- (2) 長瀬定市氏のご教示による。
- (3) 池田敏雄『久武神社遷宮記念誌』1994年
- (4) 池田敏雄『斐川の地名散歩』斐川町1987年
- (5) 島根県『新修島根県史』臨川書店1968年
- (6) 横山永福『出雲國風土記考』1963年
- (7) 『雲陽誌』島根県内務部1910年

III 調査の概要

1. 1区の調査

道路敷地部分で礎石が検出されたため調査区域を南側に拡張して調査を行った。調査地の現況は水田で、標高は9.6mを測り、北に向かって次第に低くなる地形となっている。調査区の南側は「後谷」の谷奥、北と東側は水田が広がるが、西側はわずか5mほどで後谷丘陵の裾野に達し、切迫した印象を受けるところである。

基本的な層序は、上から耕作土（I）、灰色砂質土（II）、暗オリーブ灰色土（III）、暗オリーブ褐色土（IV）、オリーブ黒色土（V）、黒色土（VI）、黒褐色土（VII）の順に堆積している。とくに、VI層からは多量の炭化米や多数の土師質土器、若干の須恵器、白磁が出土した。礎石を検出したのもVI層中である。このVI層は水田下1.3m、20cmの厚さで均一に堆積し、標高は上面で8.2mを測る。

検出された主な遺構は、礎石建物跡2、掘立柱建物跡2、溝状遺構2、小ピット少數である。

(1) 検出遺構（第10図～第13図）

S B 0 1 (礎石建物)

1区の北寄りで検出された総柱構造の礎石建物跡である。平成3年度の調査で既に南北2間、東西3間（全長6.24m）の礎石列が確認されていたものであるが、礎石の大きさや間隔からみて、桁行は南北方向で2間以上は確実にあるものとみられる。従って、建物の北側はさらに道路下に続くものと考えられる。このようにみると建物の主軸は南北方向にあり、柱間寸法は桁行193cm（6.5尺）等間、梁行208cm（7尺）等間を測り、主軸方向はN 1°Eとなるであろう。

礎石は径65～135cmのもの10個が検出された。角のとれた丸味のある楕円形の石が多い。礎石は若干動いているのかほとんどの石が上面を平坦としていない。礎石の周間に径10～40cm大の根石を多く据えているもの（S₂、S₃、S₇、S₁₀）とほとんど無いもの（S₁）がある。礎石の標高は8.11～8.30mを測る。

S B 0 1 の地下構造を土層断面でみると、まず東西長8.5m以上にわたって建物より広い範囲で地面を深さ60～80cmに掘り下げ、次に底にオリーブ黒色土（V）を固く敷いて叩き締め、その上に根石、礎石を据え周囲に黒褐色土（VII・整地層）を敷きつめた地業を行っていることがわかる。根石や礎石を据える際に掘り方を掘る作業は行わなかったようである。

建物の南側には南辺の礎石より南へ1mのところで、S D 0 1（溝状遺構）が検出された。検出状況からみて、S B 0 1と同時期の遺構と考えられる。

S B 0 2 (礎石建物)

1区の南半で検出された総柱構造の礎石建物跡である。建物の南側は調査区外へ続く可能性もあるが、ここで検出されたのは桁行5間（全長11.90m）、梁行3間（5.34m）の南北棟である。柱間寸法は桁行238cm（8尺）等間、梁行178cm（6尺）等間である。床面積は63.5m²を測り、主軸方向はN 1°Eとなる。S B 0 2の東辺礎石列とS B 0 1のそれとは南北に一直線上に並ぶことから、東

側の柱筋を揃えて建てられていることがわかる。なお、SB 0 1との空間距離は15mを測る。

礎石は径40~80cmの小形のもの4個(S₁₁、S₁₂、S₁₅、S₁₇)とそれ以外の径148cm以下の大形のもの13個があり、根石だけ残存しているもの4ヶ所、全く残存しないもの1ヶ所がある。礎石の表面に火を受けたように変色した部分が認められる(S₁₅、S₂₀、S₂₁)。礎石の標高は8.90~9.07mを測る。この建物は、後述するSB 0 4(掘立柱建物)廃止後、土地を整地し、根石や礎石をそのまま据え、周囲に黒褐色土(Ⅷ・整地層)を敷きつめるという地下構造が考えられ、SB 0 1と似た構造となっている。この黒褐色土層から少量の炭化米とともに須恵器(皿・高环・樂器土器・転用鏡など)、土師質土器がわずかに出土した。

SB 0 2の西辺の礎石から1.5mの位置で南北に走るSD 0 2(溝状遺構)が検出された。SB 0 2と同時期の遺構と考えられる。

なお、建物の北西側で径25cm前後を測る16個の小ピットが集中して検出された。この内12個は建物の外側に位置することから建築時の補助的な役割を果たす足場穴とも考えられる。しかし、ピットの並びが不規則で、径も小さいため断定することは難しいであろう。

SB 0 3(掘立柱建物)

1区の中央で検出された総柱構造の掘立柱建物跡である。SB 0 2の北側の黒褐色土(Ⅷ・整地層)を取り除いた下層・黑色土面で検出された。検出面の標高は7.67~8.11mを測る。検出された建物は桁行4間(7.72m)、梁行3間(5.79m)の南北棟である。柱間寸法は桁行、梁行ともに193cm(6.5尺)等間である。床面積は44.7m²を測り、主軸方向はN1.5°Eとなる。

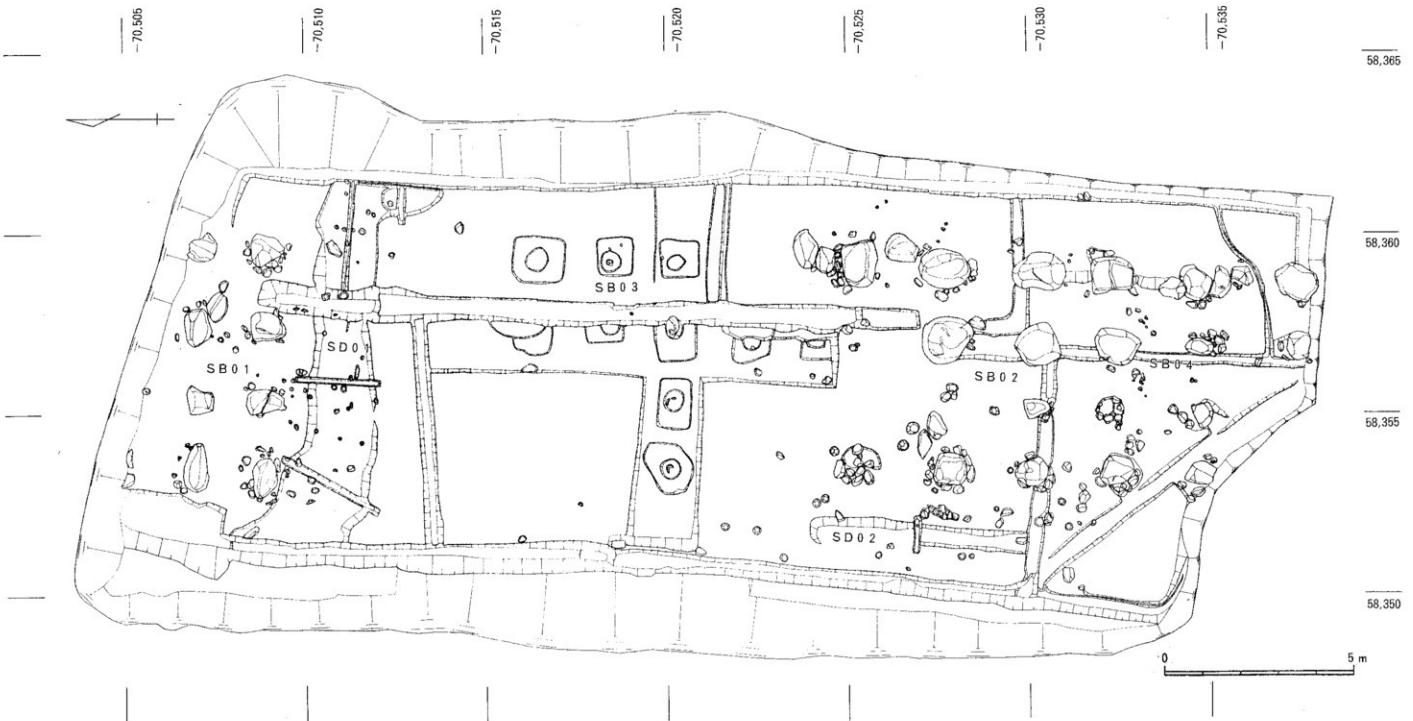
検出された柱穴は10個で、大半が方形の掘り方をもち、一部に長方形や不整形のものもある。柱穴の一辺は93~146cm、深さは49~71cmを測る。P₂、P₆、P₉、P₁₀は柱根が遺存している。P₆の柱根は長さ72cm、径30~40cmを測り、自らの重みのせいか底部が柱穴底にくい込む状態になっている。柱穴に抜き取り穴がみられないこと、いずれの柱根も頂部が腐植していることからマサカリのようなもので切断した可能性が考えられる⁽¹⁾。P₇、P₈の柱根上部は土砂で埋められていた。P₅の柱根は樹種鑑定をした結果、カヤであった。平城京などではヒノキを使うのが一般的であるが、その代用品として別の木を使ったのではないかとする見方がある⁽²⁾。

なお、SB 0 3は後述するSB 0 4とともに全面的に遺構を検出すれば、上層遺構(SB 0 2など)が破壊されることになるため、今回は遺構保存の観点から最小限の調査にとどめた。

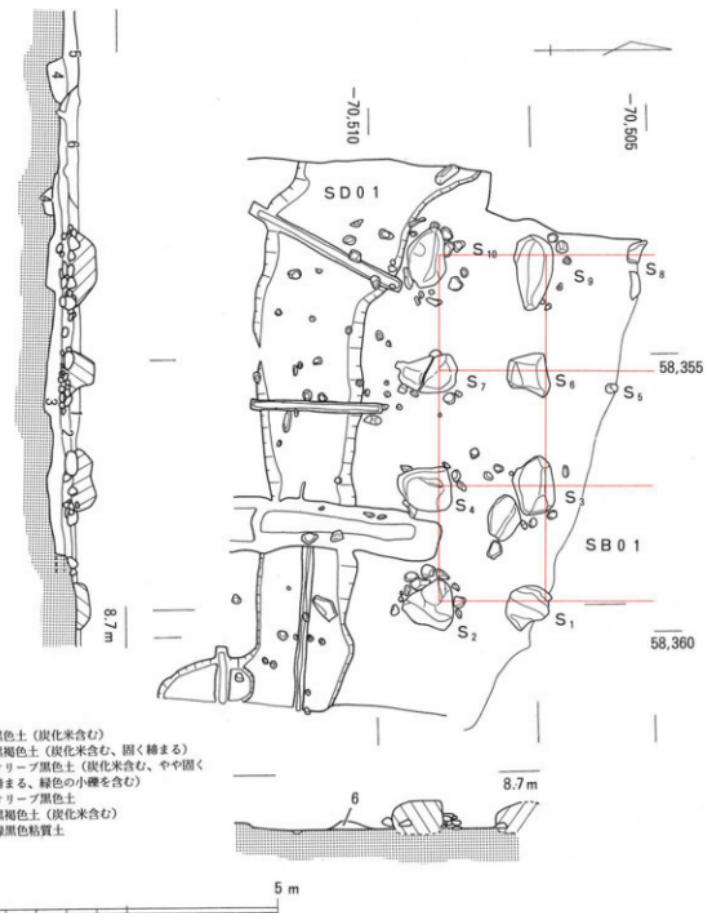
SB 0 4(掘立柱建物)

1区の南寄りで検出された総柱構造の掘立柱建物跡である。SB 0 2の東辺から2列目(南北方向に4穴、東西方向に3穴であるが、南側の調査区外に延びることを考慮にいれると、桁行は南北方向にあると思われる。従って、桁行3間以上、梁行3間(5.79m)と想定される。柱間寸法は桁行、梁行ともに193cm(6.5尺)等間を測る。主軸方向はN2°Eとなり、東辺柱穴列はSB 0 3のそれと柱筋を揃えて建てられている。SB 0 3との空間距離は4.7mを測る)。

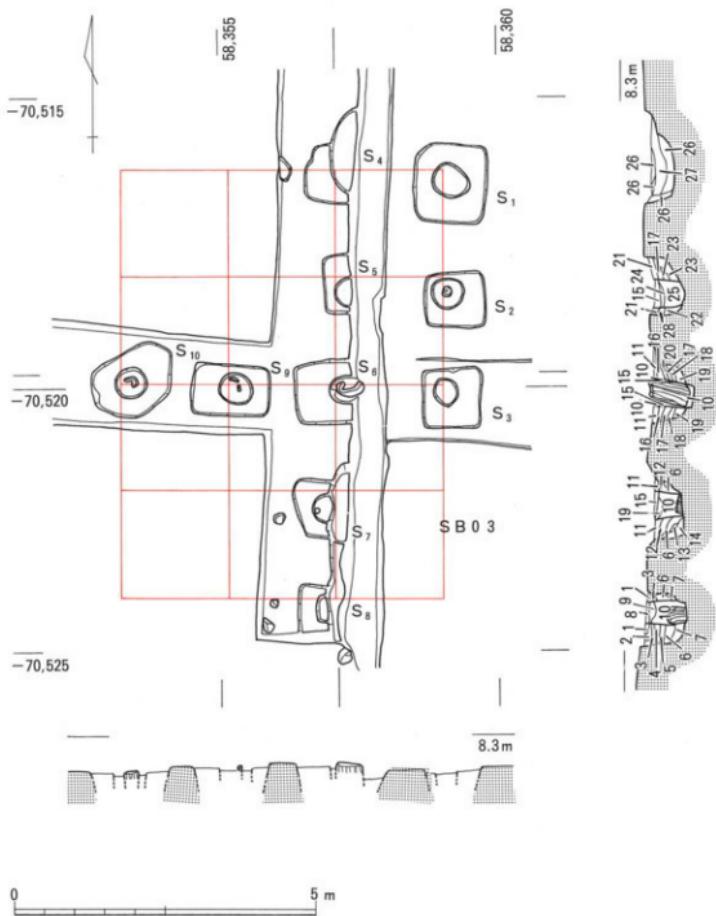
検出された7つの柱穴は一辺116~153cm、深さは66~80cmを測り、P₃とP₅で柱根が遺存している。



第10図 1区遺構平面図 (1 : 100)

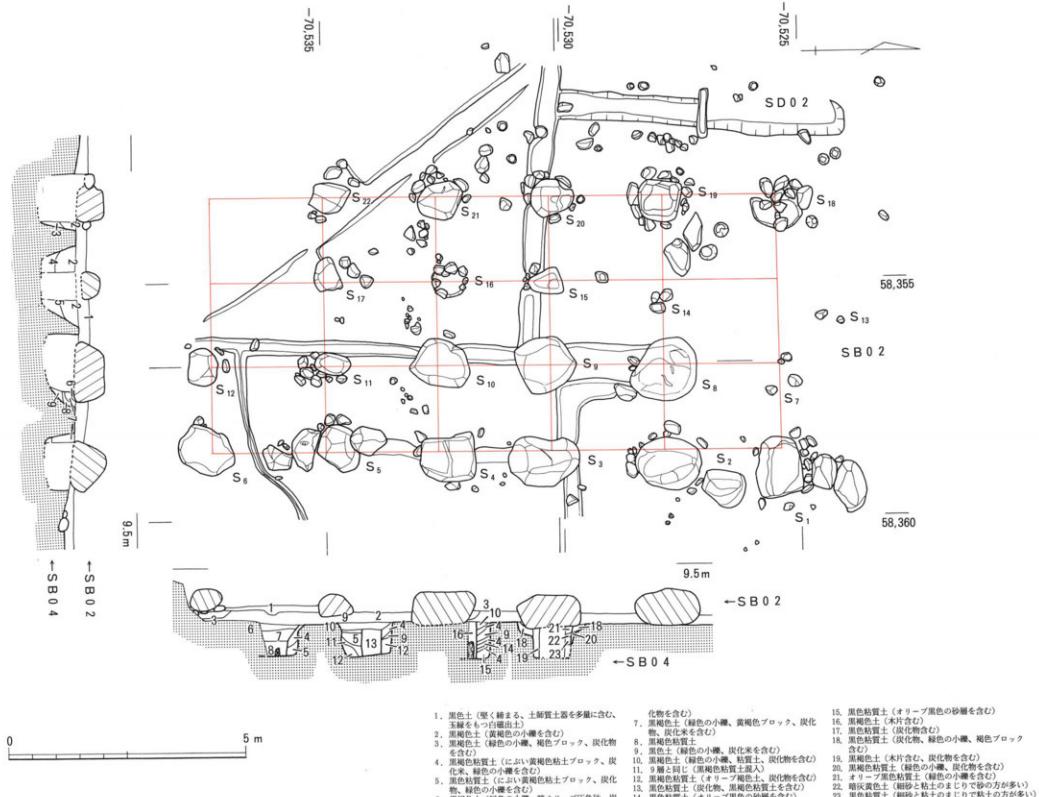


第11図 SB 01 実測図 (1 : 80)



1. 黒褐色土（緑色の小塊を少量含む）
2. 黒褐色土（緑色の小塊をわずか含む）
3. 黒褐色土（緑色の小塊を含む）
4. 黒褐色土（緑色の小塊を含む）
5. 黒褐色土（緑色の小塊を含む）
6. 黒褐色土（緑色の小塊を含む）
7. 黒褐色土（緑色の小塊を含む）
8. 黒褐色土（緑色の小塊を含む）
9. 黒褐色土（緑色の小塊を含む）
10. 黒褐色土（緑色の小塊を含む）
11. オリーブ黒褐色土（緑色の小塊を含む）
12. 黒褐色土（緑色の小塊を含む）
13. 黒褐色土（緑色の小塊を含む）
14. オリーブ黒褐色土（緑色の小塊を含む）
15. 黒褐色土（緑色の小塊を含む）
16. 黒褐色土（緑色の小塊を含む）
17. 黒褐色土（緑色の小塊を含む）
18. オリーブ黒褐色土（緑色の小塊を含む）
19. 黒褐色土（緑色の小塊を含む）
20. 黒褐色土（炭化物を含む）
21. 黒褐色土（炭化物、緑色の小塊を含む）
22. 黒褐色土（炭化物、緑色の小塊を含む）
23. 黒褐色土（炭化物、緑色の塊、暗褐色粘質土のブロック）
24. 黒褐色土（炭化物、緑色の塊を含む）
25. 黒褐色粘質土（炭化物、炭化物を含む）
26. 黒褐色粘質土（炭化物、炭化物を含む）
27. 黒褐色土（緑色の小塊、炭化物、炭化物を含む）

第12図 SB 03 実測図 (1 : 80)



第13図 SB 0 2 実測図、SB 0 4 断面図 (1 : 80)

P_3 、 $P_6 \sim P_8$ の掘り方内から炭化物や炭化米、 P_1 、 P_4 、 P_5 の掘り方内から炭化物、 P_5 の掘り方内から須恵器壺の底部（第14図）が出土した。SB04-P4 が検出された面は SB03 と同一面のため同時期の建物と考えられる。

SD01（溝状遺構）

1区の北寄りで SB01 の南辺に沿って東西方向に検出された溝状遺構である。溝の西側では北向きに、東側では南向きに方向をかえ、幅も広くなりつつある。検出された溝の長さは 9.8m、幅は中央で 1.1m、西側端で 3.3m、東側端で 3.1m を測る。溝の深さは 15cm を測り、断面は浅い U 字状を呈している。溝内からは炭化米が多量に検出された。位置関係からみて、SB01 が火災にあって、南側へ倒壊したために多量の炭化米が堆積した可能性を考えられる。

SD02（溝状遺構）

1区の南西寄りで SB02 の西辺に沿って南北方向に検出された溝状遺構である。検出された溝の長さ 6m、幅 0.6m を測るが、溝の南側の続きは検出できなかった。深さは 7cm と浅く、断面 U 字状を呈している。溝内より炭化米が多量に検出された。SB02 の雨落ち溝であろうか。

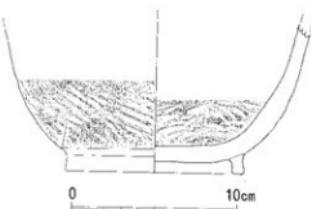
(2) 出土遺物（第15図～第19図）

1区から出土した遺物は SB04 の P_5 から出土した須恵器の壺片 1 点を除くと、他はすべて堆積上またはサブレンチから出土したものである。しかし、厳密にどの層から出土したものか十分に把握することができなかつたが、概ね次のようなことがいえそうである。

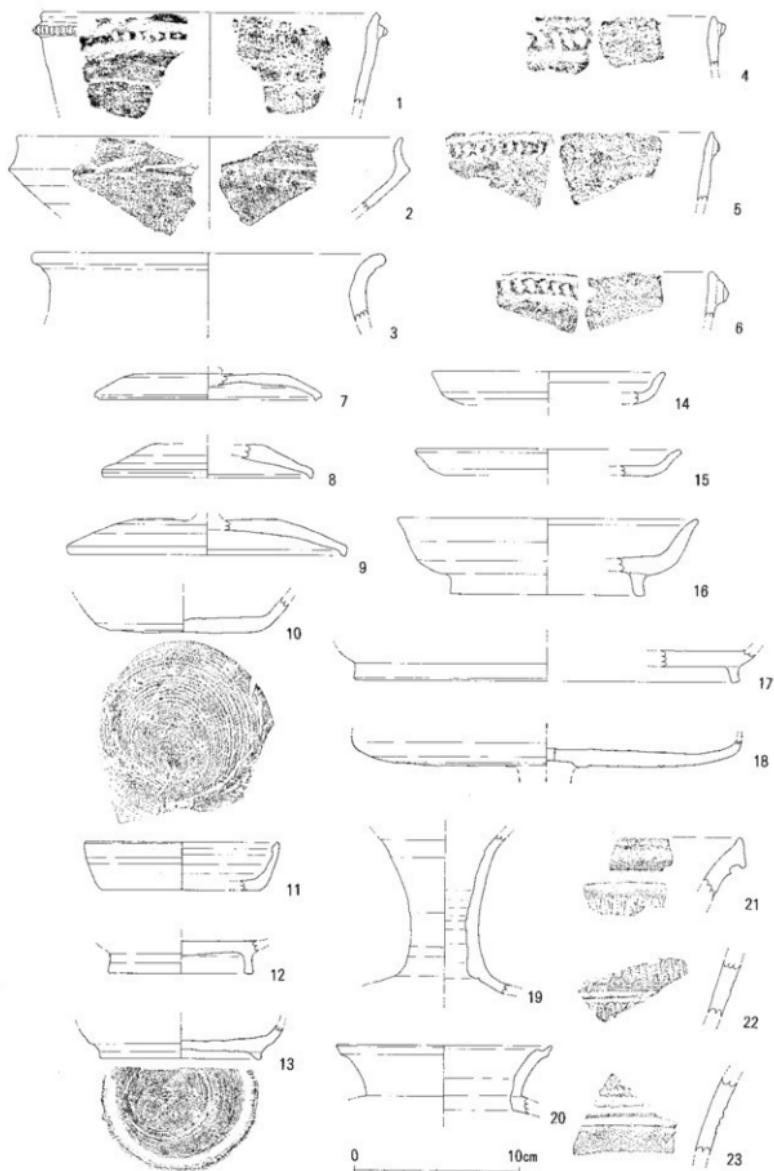
- ・繩文土器 ————— 黒褐色土層（VII・整地層）およびサブレンチ掘削時に出土
- ・須恵器 ————— SB02 の黒褐色土層（VII・整地層）および黑色土層（VI）から出土
- ・土師質土器と陶磁器 —— SB01 および SB02 の黒色土層（VI）から出土

出土した遺物の量はコンテナにして 35 箱になるが、大半が破片のため実測し得たのは一部であった。第15図 1～6 は繩文土器である。1、4～6 は晩期に属する突帯文土器の深鉢で、頸部は直立ないしやや外反し、口唇部は先細りを呈するが、1 は外にやや肥厚する。尖帯は 1、5 がやや鋭く、4、6 は蒲ぼこ形を呈する。突帯の貼り付け位置は 1 が口唇部から 5mm 下った位置で、4～6 は口唇部近くにある。突帯上の刻目は 5 以外は深く刻まれている。調整は 1 の外面に条痕が認められる。胎土はいずれも 1～3mm 大の白色細砂粒を多く含み、4 と 5 以外は褐色を呈する。2 は浅鉢で、口唇部は内湾し、体部との境は明瞭である。頸部はミガキ、胴部はケズリの後、ミガキ調整を施す。3 は S 字状にゆるく外反する口縁部をもつ鉢であろうか。突帯文土器とともに後述する打製石斧が出土する類例として松江市石台遺跡が⁽³⁾注目される。

7～23 は古墳時代後期末～平安時代の須恵器である。7～9 は蓋である。7 は平らな天井部におそらく擬宝珠つまみをつけたものであろう。口縁部は口径 14.8cm を測り、わずかにかえりを残し、天井



第14図 SB04-P5 出土遺物実測図（1:3）



第15図 1区出土遺物実測図 (1:3) ①

部は回転ナデ調整を施す。7世紀後半か。8、9の口縁端部は低く垂下する。8は厚めの天井部、9はつまみが剥離している。10、11は高台の付かない壺である。10は底部と体部との境は明瞭でなく、底部に回転糸切りが残る。11は口径12.6cm、器高3.1cmを測り、体部が直線的にのび、口縁端部は内面に肥厚する。12、13は高台を有する壺で、12の高台は高くまっすぐ下にのび、底部は回転糸切り後、ナデ調整している。13は底径10.4cmを測り、低い高台で体部は内湾気味に立ち上る。底部は回転糸切りである。外面に「[]倉」が墨書きされている。14、15は高台の付かない皿である。14の体部は短く逆「ハ」の字状に開き、15は短く斜め外方に開く。15の底部は回転糸切りである。16は高台を有する皿で、器壁は厚く、太くしっかりした高台である。体部は斜め上方にのび、端部はすぼまる。焼成はやや不良で、黄灰色を呈する。17は高台を有する盤である。底径25cmと大形で、底部は回転糸切り後、回転ナデ調整している。外面に墨が付着し転用器であろうか。8～17はいずれも奈良時代後半から平安時代に属するものであろう。18は高壺の壺部で人形品である。口縁端部は若干つまみ上るタイプと思われる。焼成はやや不良で重ね焼きしたと思われる中心部は灰白色、周囲は灰色を呈する。19は長頸壺で細身の頸部から上方に向けて逆「ハ」の字状に開く。20、21は甕の口縁部である。20は短い頸部で口縁部を外反させ、端部を上方につまみ上げる。穴道町小松古窯跡群⁽⁴⁾から類似する口縁部が出土している。21は外反する口縁端部を上下につまみ出し、外面に波状文を施す。22、23は甕の胸部である。

第16図～第18図14～18は上師質土器である。破片も含め大量に出土したが、ここでは高台のないもの、脚付きのもの、高台の付くものに分け、さらに高台のないものは皿形、壺形、椀形に、脚付きのものは皿形、壺形に高台の付くものは皿形、壺形、椀形に分類して記すことにする。

上師質土器はすべてロクロ成形で、焼成は良好であるが、色調は白色を呈するものと褐色を呈するものがある。高台のないものと脚付きのものはほとんど回転糸切りが認められる。これらの上師質土器は、形態的特徴や脚付きが出現することから平安時代末から鎌倉時代初期のものとみられる。

（高台のないもの）

・皿形土器（第16図1～23）

口径の大きさよりI類（5cm）、II類（6.0～8.85cm）、III類（8.2～9.2cm）、IV類（11.0～11.2cm）に分け、さらに形態的特徴からII類はa：体部がうすく内湾するもの、b：体部が厚く内湾し、端部が丸くおさまるもの、c：体部が逆「ハ」の字状になるもの、d：体部が逆「ハ」の字状になり端部がやや外反するものに細分化した。

I類（1） 口径5cm、器高11.5cmを測り、皿を倭小化した形である。底部はうすく、体部は短く外傾し、端部は丸くおさまる。

II a類（2～5） 口径7.8cm、器高1.7～2.1cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、底部は厚めのもの（2、3）と薄めのもの（4、5）とがある。

b類（6、7） 口径7.7～8.4cm、器高2.1～2.6cmを測る。体部、底部ともa類より厚めで、口縁端部は丸くなる。a類より器高が高い。

c類（8～13） 口径7.6～8.85cm、器高2.2～2.45cmを測る。体部は逆「ハ」の字状に立ち上

がり、底部は厚めである。器高は b 類より高い。

d 類 (14~18) 口径7.6~8.8cm、器高1.75~2.3cmを測る。体部は逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁部はやや外反する。底部は厚めである。

III類 (19~21) 口径8.2~9.2cm、器高1.75~2.5cmを測る。体部は逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁端部は鋭り気味のもの(19、20)と丸くなるもの(21)がある。20、21の底部は擬高台状を呈す。

IV類 (22、23) 口径11~11.2cm、器高2.6~2.7cmを測る。体部は逆「ハ」の字状に立ち上がるものの(22)と内湾気味になるもの(23)とがある。22の口縁端部は平ら気味になる。

・底部 (第16図24~27) II類か III類の底部になるものと思われる。

・环形土器 (第17図1~3)

口径の大きさより I 類と II 類に分類した。

I 類 (1) 口径12.4cm、器高5.4cmを測る。体部は逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁端部はやや鋭る。体部と底部の境は明瞭である。器高の高い坏である。

II 類 (2、3) 口径16cmを測る。2 の体部はやや内湾気味に立ち上がり、3 は逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁端部に丸みがある。

・椀形土器 (第17図4~7)

口径の大きさより I 類と II 類に分類した。

I 類 (4) 口径6.7cm、器高4.2cmを測る。体部、底部ともに厚く、口縁端部は強く外反する。小形の碗である。

II 類 (5) 口径11.6cm、器高4.5cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部で外反する。底部は薄くつくられる。

III 類 (7、8) 口径17.4~17.8cmを測る。体部は内湾して立ち上がり口縁部は外反する。

・底部 (第14図6、9~12) 6、9 は体部と底部の境はあまり明瞭ではなく、11、12 は高台化した底部をもつ。

〈脚付きのもの〉

皿形、环形とともに脚部の形態によって a、b 類に分類した。

皿形土器 (第17図13~20)

a 類 (13) 口径 8 cm、底径3.6cm、器高2.8cmを測る。皿部はやや深いが脚部は直立気味で、端部は少し内傾する。

b 類 (14~16) 口径7.6~8.4cm、底径3.6~4.7cm、器高2.0~2.9cmを測る。脚部はやや「ハ」の字形に開くもので、脚部高は高いもの(15)と低いもの(14)とがある。皿部は極端に浅いもの(15)がある。

・环形土器 (第17図17~20)

a 類 (17) 底径4.2cmを測る。脚部は直立気味で、端部はやや内傾する。

b 類 (18~20) 口径7.4cm、底径4.9~5.35cm、器高4.4cmを測る。脚部はやや「ハ」の字状に開

くもの（18、19）と大きく「ハ」の字状に開くもの（20）がある。

〈高台付きのもの〉

口径の大きさより皿形はI類とII類、壺形はI類～IV類、楕形はI類とII類に分けた。さらに壺形II類は形態の特徴からa、b類に細分化した。

・皿形土器（第18図1～4）

I類（1） 口径8.6cmを測り、浅い皿部をもつ。

II類（2～4） 口径9.7～11cm、高台径6～6.3cm、器高3.1～3.2cmを測る。皿部は「ハ」の字状に開き、高台は外方にふんばる。皿底部は薄いもの（2）と厚いもの（3、4）がある。

・壺形土器（5～14）

I類（5） 口径7.9cmを測る。壺部は深く、体部は内湾して立ち上がる。

IIa類（6、7） 口径7.8～8.2cm、高台径4.8～5.4cm、器高2.9～3.5cmを測る。壺部は内湾して、短く外方へ立ち上がる。高台は短いもの（6）と長いもの（7）がある。

b類（8、9） 口径8.7～9cm、高台径5～6.8cm、器高2.5cmを測る。壺部は内湾して、外方へ立ち上がる。

III類（10、11） 口径10.2～11.6cm、高台径6.8cm、器高3.7cmを測る。壺部は内湾して立ち上がり、高台は大きくふんばる。

IV類（12、13） 口径1.5～15.4cm、高台径6.5cm、器高5.6cmを測る。壺部は大きく逆「ハ」の字形に開くもの（13）と、やや内湾して立ち上がるもの（12）がある。高台は壺部に比べて低くて、短い。

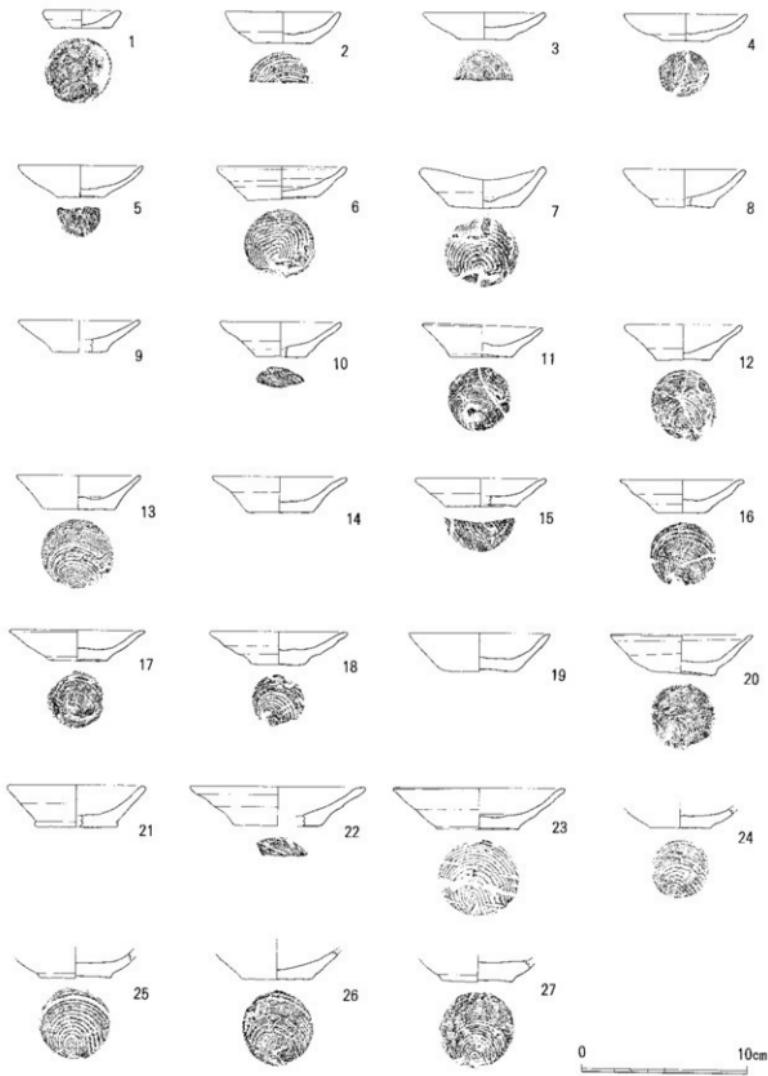
・楕形土器（15～17）

I類（15） 口径11.2cm、高台径8.2cm、器高7.3cmを測る。壺部は深く、内湾して立ち上がり、端部はやや鋭る。高台は薄く、「ハ」の字状に開く。

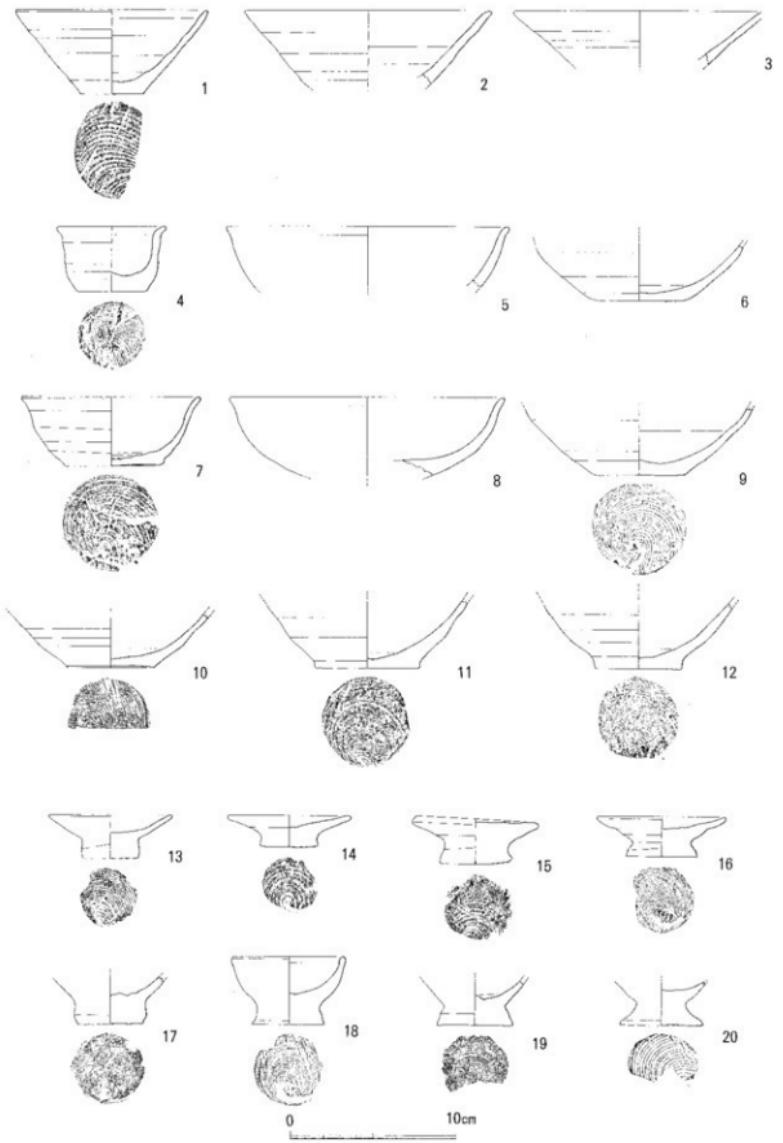
II類（16、17） 口径13cmを測る。壺部は内湾して立ち上がり、端部は外反する。壺底部は厚くつくられる。

・底部（第18図18、19） 高台径6.1～6.7cmを測り、高台は「ハ」の字状に開くが、（19）は太くて短い。

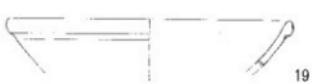
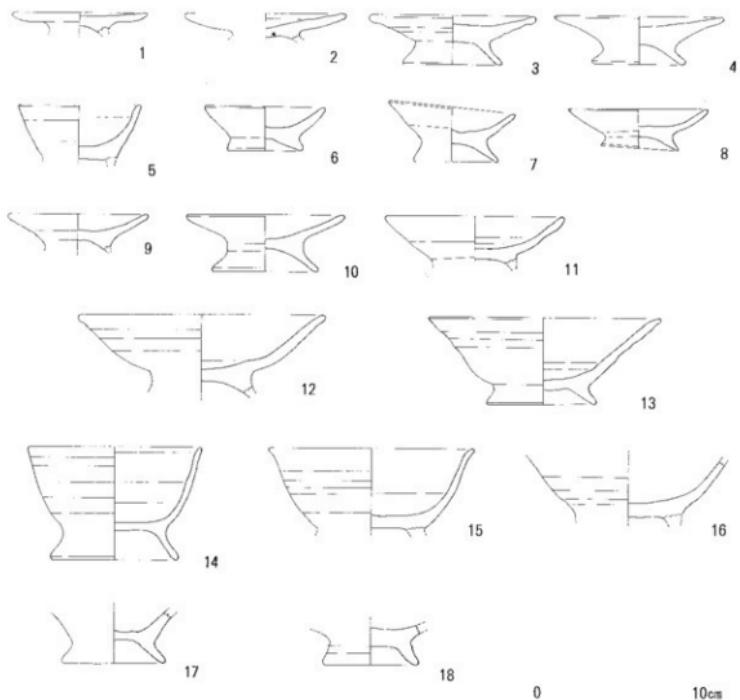
第18図20～25は白磁、26は青磁である。20～22は口縁部を玉縁にする白磁碗である。20はやや小さめの玉縁で、黄色味を帯びている。21、22は灰白色の胎土で、釉調は乳白色を呈する。釉には若干の貫入がみられる。大宰府分類のIV類に相当するであろう。23、24も楕IV類の底部と思われる。いずれも幅広の低い高台がつき、白色の胎土中に黒い細粒が入っている。23は見込みに段を行し、器内は厚い。釉調は乳白色を呈する。25は器肉が薄く、黄色味がかっている。25は白磁皿で、わずかに削り出した高台を有する。見込みに沈線を入れ、内底にヘラによる草花文様が施されている。外底は焼成前に釉をカキ取ったものと思われる。大宰府分類の皿V類と思われる。26は同安窯系の青磁皿である。内面見込みにヘラによる片彫りと櫛描によるジグザグ文様を施している。外底は施釉されない。大宰府分類I類に相当する。27は楕の底部で、幅狭だがしっかりとした高台をもつ。胎土は灰色、釉調は



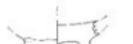
第16図 1区出土遺物実測図（1:3）②



第17図 1区出土遺物実測図 (1:3) ③



24

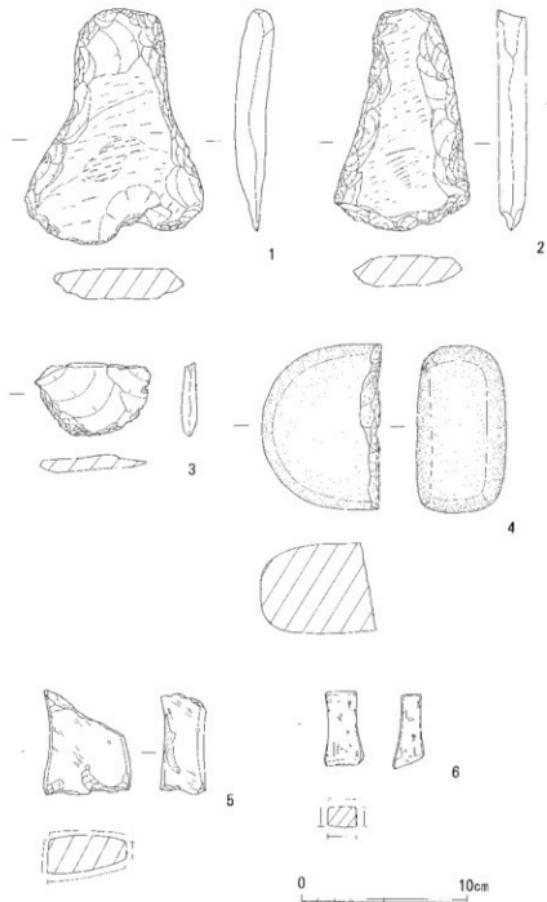


25

第18図 1区出土遺物実測図 (1:3) ④

青味が付いている。これらの時期について大宰府跡出土の輸入陶器の編年⁽⁵⁾によると、白磁碗IV類、皿VII類は11世紀中葉から12世紀初頭、同安窯系青磁皿が12世紀中葉から13世紀初頭に位置づけられている。

第19図1～6は石器類である。1～3は流紋岩製の打製石斧⁽⁶⁾である。1は長さ15.8cm、重さ400gの完形品で、刃部中央がくぼんでいる。2も完形品で、バチ形を呈している。3は小形で薄い石斧で、刃が欠損している。4は玄武岩製の磨石である。欠損のため半円形を呈し、91gと重い。5、6は微粒の流紋岩製で、いずれも全面を砥石として使用している。5は擦痕が斜方向に入り、6は縱方



第19図 1区出土遺物実測図 (1:3) (5)

向に入る。

2. 2区の調査

1区の北10m、道路をはさんだ水田に調査地はある。水田の標高は9.97mを測る。水田下2.8mまで掘り下げ、土層の堆積状況をみた。水田下2.2mまでは褐色砂土、暗灰黄色砂質土などの砂層が堆積し、その下に黒褐色粘質土（I）、オリーブ黑色シルト層（II）、オリーブ黑色粘質土（III）、黒色粘質土（IV）が堆積している。I層～IV層中に炭化米が少量含まれていた。IV層の下面で溝状遺構や小ピット群が検出された。

遺物の出土量は少なく、繩文土器、須恵器、土師質土器がわずかに出土している。

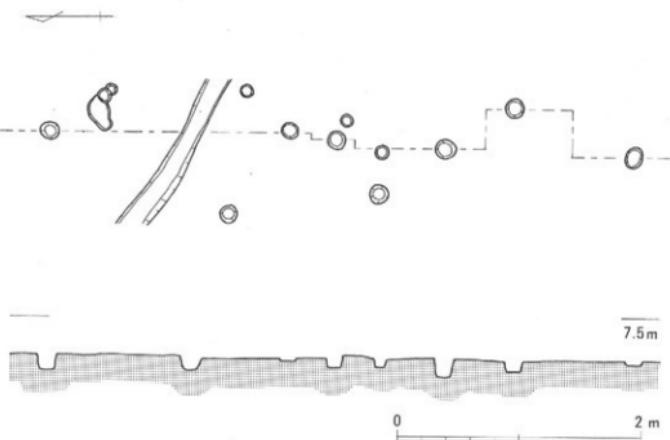
(1) 検出遺構（第20図）

S D 0 3 (溝状遺構)

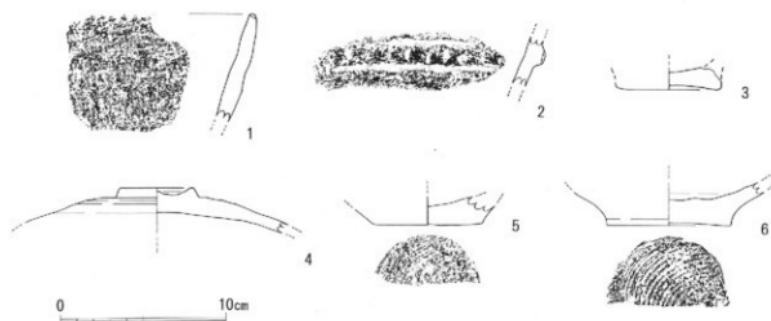
2区の北寄りで南東から北西方向にかけて検出された溝状遺構である。溝はほぼ直線的で、長さ1.35m、幅0.18m、深さ11cmを測り、断面U字状を呈している。溝の主軸方向はN 60°Wを測る。溝内から遺物等は検出されなかった。

小ピット群

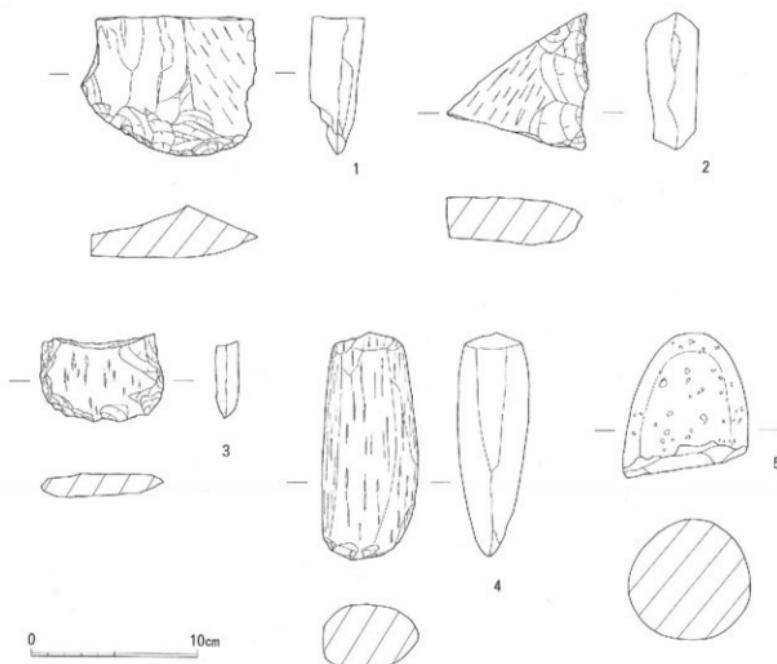
検出された小ピットの数は14穴で、平面形は不整形な1穴を除き、他は円形を呈している。



第20図 2区遺構実測図 (1:40)



第21図 2区出土遺物実測図（1:3）①



第22図 2区出土遺物実測図（1:3）②

ピットの径は上端で10~17cm、下端で7~10cm、深さ2~15cmを測り、断面はU字形を呈している。ピットの配置が不規則なため建物や柵列などの遺構を確認することはできなかった。

(2) 出土遺物（第21図～第22図）

第21図1～3は繩文土器である。1は外傾する頸部をもつ浅鉢で、口唇部は先細りを呈し、端部に刻目を施す。2は突帯文土器の深鉢で、突带上に浅い刻目を施し、断面は舟型を呈する。3は鉢の底部であろうか。いずれも胎土は1~2mmの大粒の白色細砂粒を含み、暗褐色を呈する。晚期であろう。4は中央がわずかに隆起する輪状つまみをもつ須恵器の蓋である。天井部はヘラケヅリ後、回転ナデが施される。7世紀後半から8世紀前半であろうか。5、6は上師質土器の底部である。いずれも底部に回転糸切りが認められる。

第22図1～3は打製石斧である。いずれも流紋岩製で、1は刃部のみ、2は側部の破片、3は小形品で刃部のみの破片である。4、5も流紋岩製で、4は完形の磨製石斧、5は敲石の欠損品である。

3. 3区の調査

1区同様、道路敷地部分で大きな礎石やぎっしりと敷きつめられた中小の石が検出されたため、調査区域を一部北側へ拡張して調査を行った。調査地は1区の東方120m地点の水田で、標高は8.6mを測る。

基本的な層序は、耕作土（I）、黄灰色土（II）、灰オリーブ色土（III）、オリーブ灰色土（IV）、褐灰色土（V）、灰色土（VI）、黑色土（VII）の順に堆積している。礎石といっしょに多量の炭化米がVII層から検出された。VII層は水田下1.1m、厚さ20cmで均一に堆積し、標高は上面で7.6mを測る。出土遺物は調査面積が広いわりには少なく、須恵器や土師質土器などが出土している。

検出された遺構は、礎石建物跡1、溝状遺構1である。

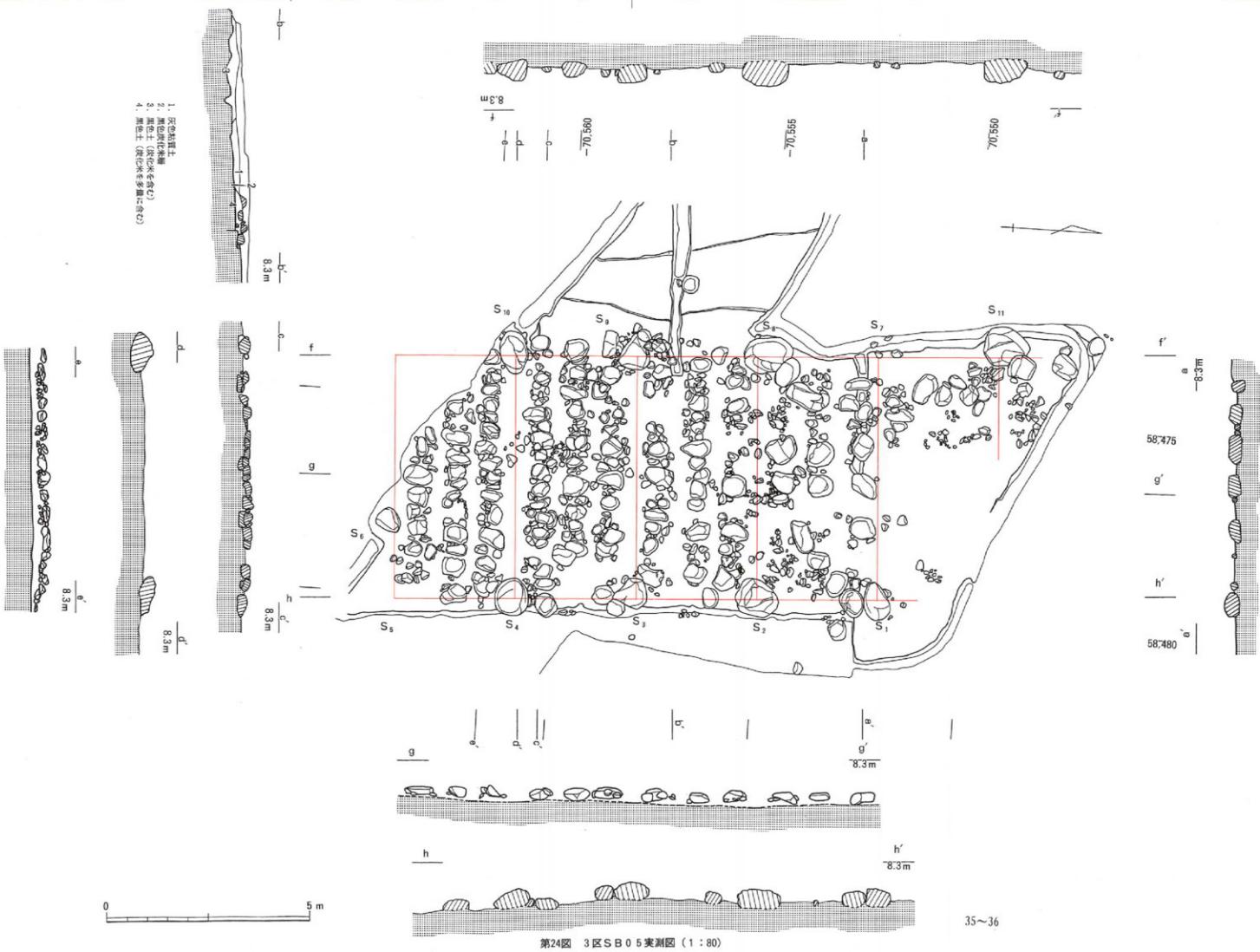
(1) 検出遺構（第23図～第24図）

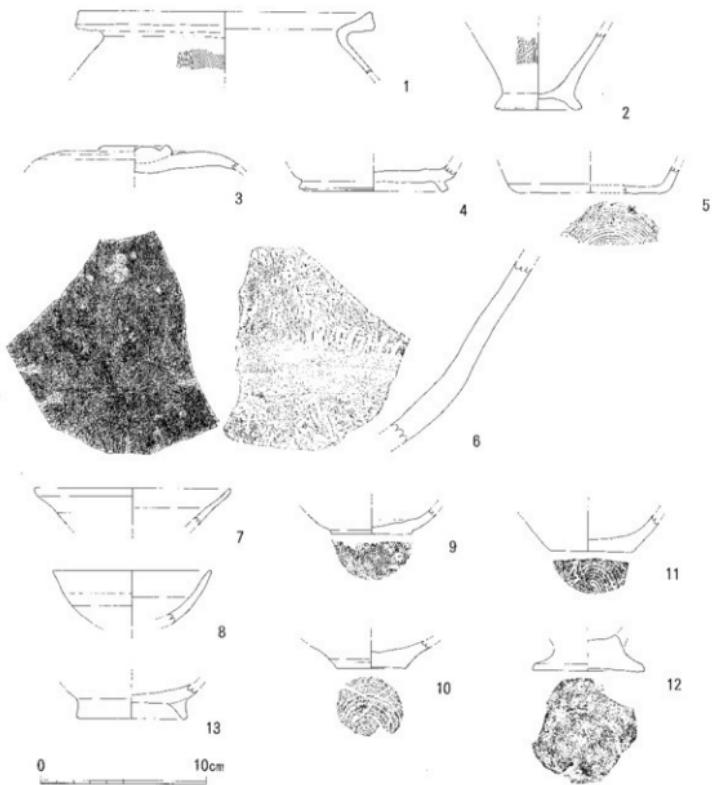
S B 0 5 (礎石建物)

3区の中央部で検出された桁行4間以上(11.88m)、梁行3間(5.94m)の南北に細長い礎石建物跡である。北西隅の礎石が失われているが、さらに北側をみると等間隔の位置に大きな礎石があり、周囲にも中小の石がみられることから、北側へは5間ないし6間に及ぶことも考えられる。しかし、別棟の建物の可能性もあるのでここでは一応桁行4間として捉えておきたい。柱間寸法は桁行297cm(10尺)等間、梁行は南辺礎石列で208cm(7尺)、178cm(6尺)、208cm(7尺)である。床面積は88.2m²を測り、主軸方向はN 4°Wとなる。1区で検出された建物の方向とは5°近く異なるが、誤差の範囲内と捉えてもよいと思われる。礎石は径55~121cmのもの8個と礎石の可能性のあるもの1個(S₁₄)が検出された。礎石が失われているものは2ヶ所(S₅、S₁₀)、未検出の礎石3ヶ所(S₆、S₈、S₉)である。礎石はほとんどが円形か梢円形を呈し、隅丸三角形状のものも



第23図 3区造橋平面図 (1 : 100)





第25図 3区出土遺物実測図 (1:3)

2個ある。礎石の標高は7.43~7.76mを測る。

この建物は総柱構造ではなく側柱のみの建物であるが、一見してわかるように、その礎石間にもあり行列に沿って、小は径10cm前後、大は径50cm前後の石を直線的に敷並べていることが大きな特徴である。右列は3列ずつ12列あり、中小の石をうまく組み合わせて置かれている。石列の間隔は北から45-30-60（礎石ライン）-40-46-50（礎石ライン）-16-30-70（礎石ライン）-35-38cmとなり、礎石ラインだけはやや広く開いている。ほとんどの石は礎石より浮いた位置にあり、覆土中に炭化米が多量に検出された。このような造構は全国的に例がないため建物構造を具体的に知ることができないが、炭化米が多量に出土することから穀物を貯蔵した建物であることは間違いないところである。

建物の西側には西辺礎石列から西へ1mのところでSD04（溝状遺構）が検出された。SB0

5と同時期と考えられる。

S D 0 4 (溝状遺構)

3区の中央で S B 0 5 の西辺に沿って南北方向に検出された溝状遺構である。北側が広く、南に向かって少しづつ狭まる形状を呈している。検出された溝の長さは 5m、幅は 1.1~1.9m を測り、深さは 15cm と浅く断面 U 字状を呈している。溝内から多量の炭化米、炭化物が検出された。土層断面からみて、S B 0 5 に関係ある溝と考えてもよいであろう。

(2) 出土遺物 (第25図)

調査区が広いわりには出土した遺物は非常に少ない。その中で図示し得た土器を以下に示す。

第25図 1、2 は弥生土器である。1 は中期の壺で、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部はやや肥厚する。調整は外間にハケメが施される。2 は底部で、外縁はハケメ、内縁はナデ調整である。3~6 は須恵器である。3 は輪状つまみをもつ蓋。5 は高台の付かない壺で、底部に円転糸切りを残す。4 は低く外傾する高台を有する壺である。6 は壺の胴部で、外縁は上からタテ方向のタキ、ヨコ方向のタキ、不定方向のタキが施される。須恵器は古墳時代後半から奈良時代に属すであろう。7~13 は土師質土器である。7、8 は壺ないし瓶の口縁部、9~11 は皿あるいは壺の底部、12 は脚付き、13 は高台を有する壺の底部である。12 は底径 7.4cm を測り、裾部がかなり広がる形態である。平安時代末から鎌倉時代初期のころの土師質土器であろう。

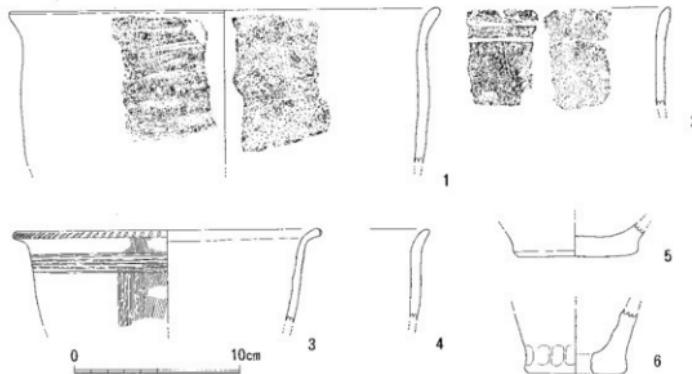
4. 4 区の調査

1 区の東 45m、後谷川をはさんだ畑地に調査地はある。調査地は道路敷地部分で、畑地の標高 10 m を測る。表土下 3 m まで掘り下げたが、明確な遺構を検出することはできなかった。

基本的な層序は、耕作土 (I)、明黄褐色土 (II)、黄褐色土 (III)、明褐色土 (IV)、黄橙色土 (V)、暗オリーブ灰色土 (VI)、オリーブ褐色土 (VII)、暗オリーブ灰色砂質土 (VIII)、オリーブ黒色土 (IX)、暗緑灰色土 (X)、オリーブ黒色土 (XI) が順に堆積している。IX 層から炭化米、炭化物がわずかに出土した。XI 層から土師器、XII 層から繩文土器が出土した。

(1) 出土遺物 (第26図)

第26図 1、2、5 は繩文土器である。1 は晩期の深鉢で口縁部はゆるく反外し、端部はまるい。2 は深鉢で、外縁の口縁部近くにヘラによる沈線が 2 条入る。5 は底部である。いずれも 1 mm 前後の白色細砂粒を含み、暗褐色を呈する。3、4、6 は弥生土器である。3 は前期の壺で、口縁部は強く外反する。端部に刻目が施される。外縁はハケメ調整の後、口縁部近くにヘラによる沈線が 6 条施される。4 も壺と思われるが、調整は不明である。6 は底部である。いずれも 3 mm 大の白色砂粒を含み、淡褐色を呈する。



第26図 4区出土遺物実測図 (1:3)

5. 5区の調査

調査区は1区の南方48mの地点の畠地にあり、標高10.4mを測る。西側は後谷丘陵のすぐ裾野に達する。ここは第1次調査（1区の調査）で電気探査を行ったところ、高い抵抗値を示すデータが得られたところである。

基本的な層序は、耕作上（I）、灰色土（II）、暗青灰色土（III）、暗オリーブ灰色土（IV）、暗緑灰色土（V・VI）、暗灰色土（VII）、灰色土（VIII）、茶褐色（IX）の順に堆積している。VII層からは少量の炭化米と礫石が検出され、柱穴や小ピットがIX層から検出された。IX層より下は流木まじりの砂疊層にあたり、かつては氾濫源であったことを窺わせる。遺物の出土量は少なく、弥生土器、須恵器、土師質土器が若干出土した。

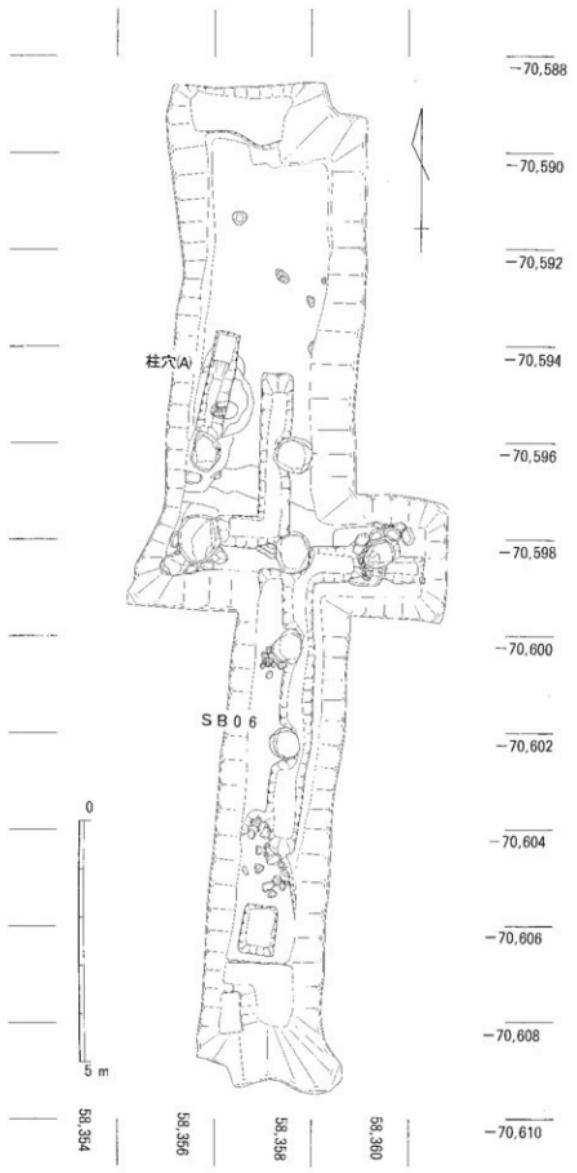
検出された遺構は、礎石建物跡1、柱穴1、小ピット2である。

(1) 検出遺構（第27図～第29図）

S B 0 6 (礎石建物)

5区の中央で検出された総柱構造の礎石建物跡である。検出された礎石は7個であるが、簡易貫入試験によって周囲の未調査地も礎石の有無を確認した。さらに後述する7区検出の礎石（A）を確認したことによって、桁行4間（7.72m）、梁行3間（6.24m）の東西棟であることが判明した。柱間寸法は桁行193cm（6.5尺）、梁行208cm（7尺）である。床面積は48.2cmを測り、主軸方向はN 45°Eとなる。

礎石は径53～100cmで大半は円または椭円形を呈している。ほとんどの礎石は上面を平らにするが、S₁、S₄、S₅は東側に傾いた状態で検出された。S₁、S₇は多くの根石をめぐらすが、S₂、S₃、S₅は全く根石はなかった。周囲から炭化米が多く出土したが、礎石が焼けた痕跡は認められなかった。



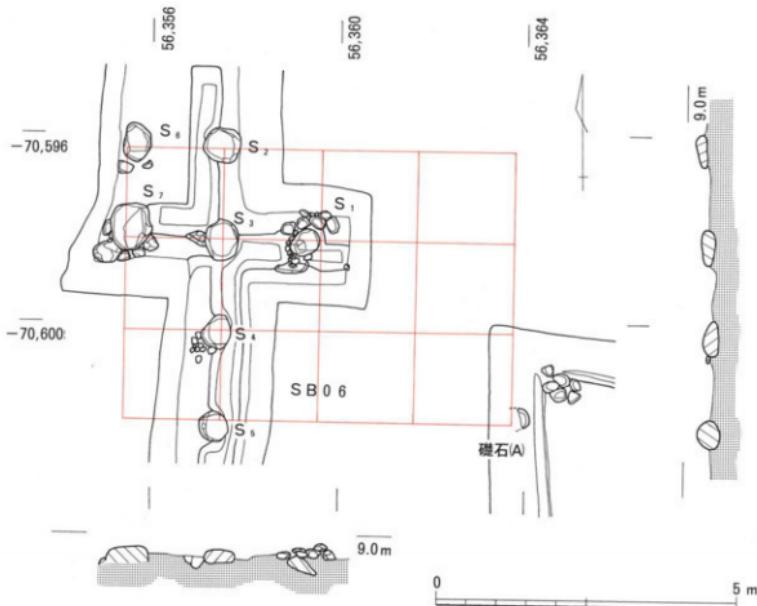
第27図 5区遺構平面図 (1 : 100)

柱穴 (A)

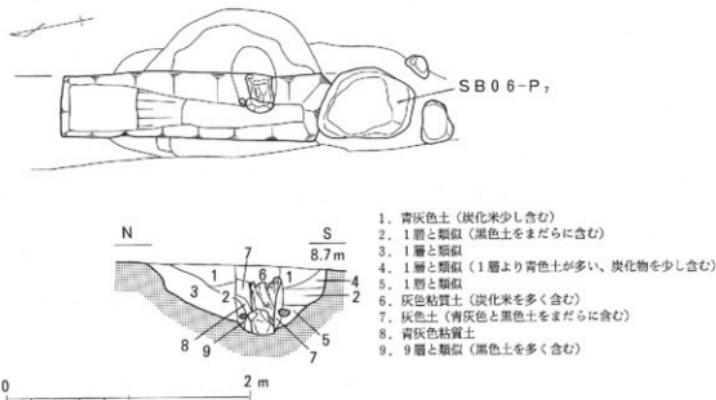
S B 0 6 の S₆ の北側に接して径150cmの掘り方をもつ柱穴（A）を検出した。掘り方の中で長さ45cm、径20cmの柱根が検出され、柱根の上部には灰色粘質土が堆積し、この中に多くの炭化米が出土した。掘り方内の埋土は炭化米を含んだ青灰色土や、黒色土を少し含んだ青灰色土がすり鉢状に堆積していた。柱根の底には径20cmの石が敷かれていた。この柱穴は他に対応するものが検出されていないが、掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられる。

(2) 出土遺物（第30図）

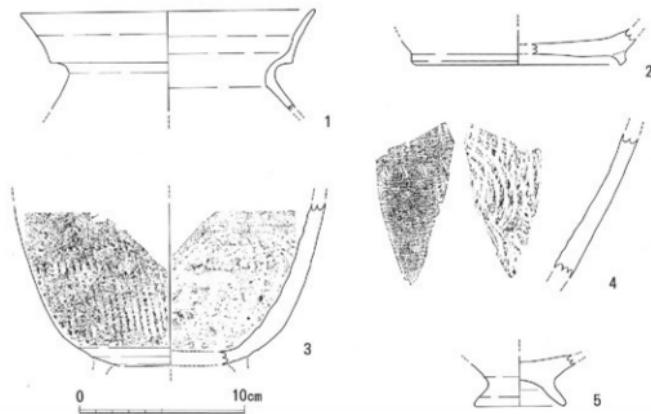
第30図1は弥生時代終末期の甕である。複合口縁の端部は鋭り気味である。2～4は須恵器である。2は高台を有する壺で、高台は低くやや外傾する。3は壺の胴部であろうか、胴下半部の外面にタタキが、内面に同心円当具痕が認められる。底部には高台がつく。2、3は奈良時代前半に属するであろう。4は甕胴部の破片であろうか、外面に刺突文が1条入る。5は土師質土器の高台を有する壺で、高台は「ハ」の字状に開く。



第28図 SB 0 6 実測図 (1 : 80)



第29図 桂穴（A）実測図（1:40）



第30図 5区出土遺物実測図 (1:3)

6. 6区の調査

調査地は後谷公民館南側の標高10.7mの水田に位置し、5区の南方90mの距離にある。このあたりは「後谷」の中央部に位置し、谷筋が南東方向と南西方向に分かれる分岐点にある。

土層の堆積状況をみると、耕作土（I-①, ②）、攤乱土（II-③）、土地改良土（III-④, ⑤, ⑥）、自然堆積層（粘質土層）（IV-⑦, ⑧, ⑨, ⑩, ⑪, ⑫, ⑬）、自然堆積層（IV-⑭層より下層）（V-⑭, ⑮）、溝状の浅い落ち込み（VI-⑯, ⑰, ⑱）、溝状の落ち込み（VII-⑲, ⑳）、礫層

の上層（VII-②, ③）、礫層（短期間）（IX-②, ④）、遺構面下層（X-②, ⑤、⑦, ⑧）となっている。とくにIV-⑦層より下層は上砂くずれや洪水による氾濫などによる自然堆積層が幾層も重なり合っている。こうした中でI-②、III-⑤層から須恵器、IV-⑦、⑨、X-②, ⑦から弥生土器が出上した。IV-⑦層の上面

の標高は10m、V-②層の上面の標高は9.5mを測る。

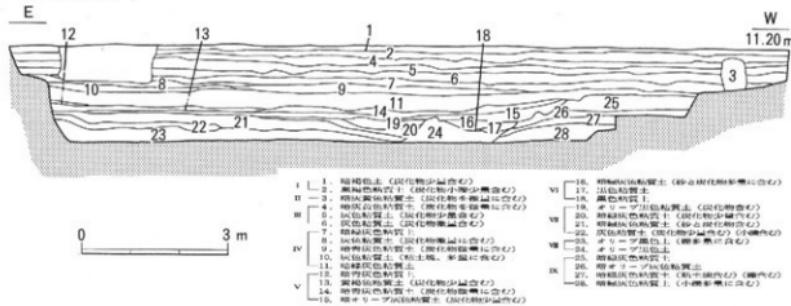
旧地形は調査区の西端から東へ4m寄ったところで、60cm以上の段差をもって東側が低く落ち込む地形となっている。この段の上端部で杭列遺構が南北方向に検出された。

(1) 検出遺構（第31図～第33図）

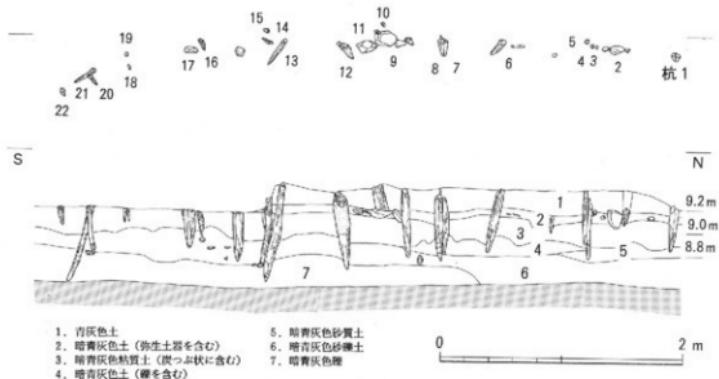
杭列遺構

杭列は調査区の西寄りで、地形が段状に高くなる部分の端で南北方向に向かって20本が検出された。おそらく南北方向にさらに杭列が延びるものと思われる。杭は丸杭と角杭で構成され、樹皮が付いたものもある。杭の長さは11～86cm、太さは2～12cmを測り上部が欠損したものもある。杭先はほとんどが尖らしており、杭頭の標高は9.13～9.41m、杭先は8.56～9.17mを測る。杭列は青灰色土層から打ち込まれたものと思われ、この層と上層から多くの弥生土器が出上した。

杭の樹種は鑑定の結果、杭7はスダジイ、杭9、12、18はサクラ属、杭22はミズキ属であることがわかった⁽⁷⁾。



第31図 6区平面図（網かけ部は杭列検出位置）（1：200）

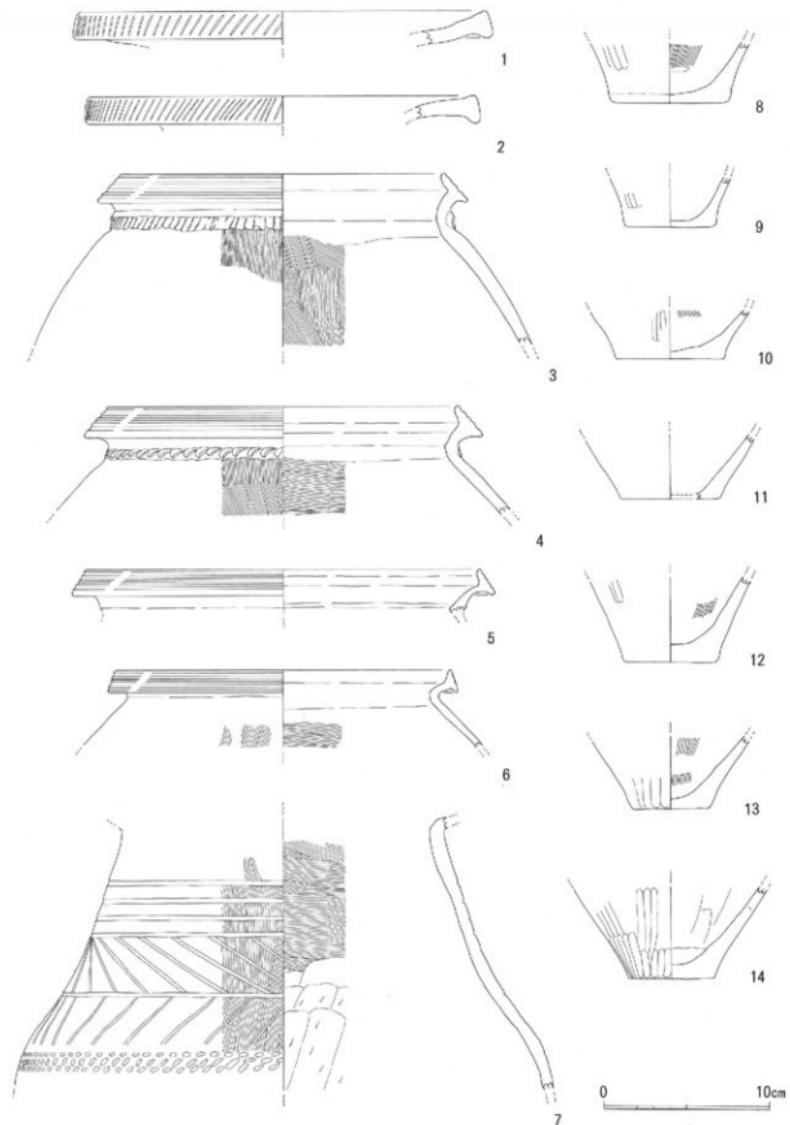


第33図 杭列遺構実測図（1：40）

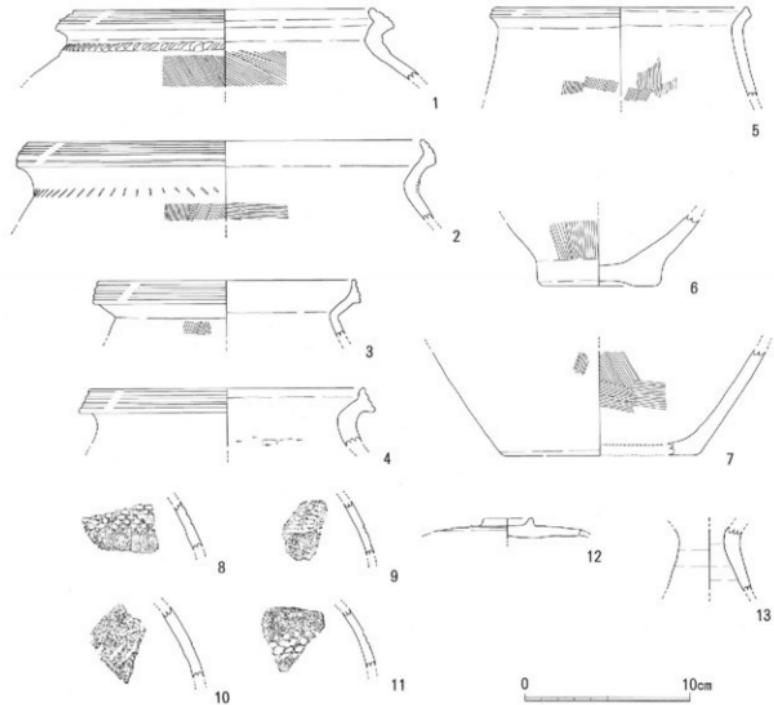
(2) 山土遺物（第34図～第35図）

第34図・第35図1～11は弥生土器である。第34図1、2は壺形土器の口縁部である。逆「ハ」の字状に開く口縁部で、端部はやや肥厚する。口縁部外面にヘラによる斜行文が施される。第34図3～6、第35図1～5は壺形土器の口縁部から肩部にかけてのものである。第34図3～6の口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部が上下に拡張するので、外面に4条の凹線文が施される。3、4の頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯文をめぐらす。調整は内外面ともハケメが施される。第32図1～3はゆるく外反する頸部をもち、口縁端部は主として上方に拡張する。外面には3～4条の凹線文があり、頸部には指頭圧痕を施すもの（1）と刺突文が施されるもの（2）がある。調整は内外面ともハケメが施される。3、4は屈曲する口縁部がやや拡張し、外面に凹線文が3条施される。4は内面にケズリが施される。5の口縁部はゆるく外反し、端部は拡張せず、逆に器壁がやや薄めになる。外面に1条の深い凹線文が入る。内外面ともハケメ調整が施される。第35図8～11は壺形土器か、壺形土器の胴部である。8は外面に6段以上の粒状の刺突文が施され、内外面はハケメ調整が施される。9は外面に6段の刺突文が施される。10の外面は刺突文が斜行状に施され、内外面にハケメが施される。11は外面にD字状の刺突文が4段入るものである。7は壺形土器の頸部から胴部にかけてのものである。頸部はやや内傾気味に長く立ち上がり、そこへ凹線文が5条入る。最下段の凹線を軸として上下に羽状文様に斜めに凹線が入る。胴部との境あたりに米粒状の刺突文を3段入れる。調整は外側がハケメ、内側の頸部はハケメ、胴部はケズリが施される。第34図8～14、第35図6、7は底部である。8～14は壺の底部と考えられる。外側はヘラミガキ、内側はハケメ（8、10、12、13）、ケズリ（14）が認められる。6は大形器種の底部で内外面ハケメが施される。7は上げ底気味の壺底部であろうか。弥生土器はいずれも中期末から後期初頭に入るものと思われる。

第35図12、13は須恵器である。12は輪状つまみを有する蓋、13は高環の筒部である。



第34図 6区出土遺物実測図 (1:3) ①



第35図 6区出土遺物実測図 (1:3) ②

7. 7区の調査

調査地は5区の東側に隣接する標高10mの水田である。ここは第2次調査（5区の調査）で電気探査を行い、東西方向に高い抵抗値を示す部分があったところである。

基本的な層序は、耕作土（I）、灰色粘質土（II）【①砂少量含む（床土）、②砂少量含む（イ、粒荒い、ロ、粒細かい、ハ、ロより少量、ニ、炭化物少量含む）、③やや粘質、④白いつぶ状のものブロック状に入る、⑤炭化米少量含む】、緑灰色粘質土（III）の順に堆積し、II-⑤層から礎石が検出された。II-⑤層は水田下1.3m、15cmの厚さで均一に堆積する。標高は上面で8.7mを測る。調査面積が広いため出土した遺物はかなり多く、縄文土器、土師器、須恵器、石器、柱根1（カヤ）等がある。

検出された遺構は、礎石2、溝状遺構1、土坑3、柵列1、小ピット多数である。

(1) 検出遺構（第37図～第42図）

礎石（A）

L字状の調査区のちょうど角、北西隅の西壁面で検出された。礎石は径40cm、上面の標高8.7mを測り、根石はなく丸みのある礎石である。5区で検出されたSB06は簡易貫入試験によって、4×3間の東西棟であることが確認されたが、本礎石は位置関係からみてSB06の南東隅の礎石にあたるものと考えられる。

礎石（B）

L字状の調査区の北壁沿いで多くの根石とともに検出された。礎石は径60cm、標高8.6mを測る。上面は平坦で比較的角ばった礎石である。

これ以外にも礎石になりそうな石が多く検出されたが、すべて堆積土中に浮いた状態であったため、定位置と考えられる礎石はないかと判断した。従って、本礎石は新たに存在すると思われるSB07の南西隅にあたる礎石ではないかと考えられる。SB06とSB07との空間距離は7.8mを測る。

SD05（溝状遺構）

SB06の南東隅にあたる礎石（A）から南へ12mの位置で東西方に向て走る溝状遺構が検出された。溝の長さは2.83m、幅は1.85m、下端幅は0.82m、深さは76cmを測り、断面U字状を呈する深い溝である。溝は後述するSA01（柵列）と同じ青灰色砂質土から掘り込まれ、溝内には暗緑灰色粘質土、灰色粘質土などが互層となって堆積している。ほとんどの層に小礫が多数含まれている。埋土の上方で炭化米が少し、中ほどで土師器片（第36図1）が出土した。主軸方向はN 0°Eとなる。

SA01（柵列）

SD05の北2.7mの位置で検出された柵列である。柱穴は東西方に向て3穴（2間分）が検出された。掘り方は径48～60cmを測り、柱間寸法は135cm（4.5尺）等間を測る。1列のみの検出で対応する柱列が認められないため柵列とみられる。主軸方向はN 2°Eを測る。

SK01（土坑）

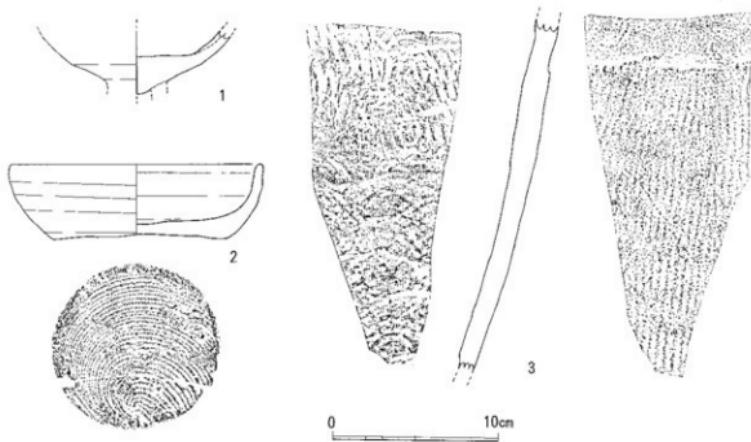
SD05の南3.8mの位置で検出された土坑である。北北東から南南西方向に長く延びるが、北側の端は不明である。土坑の長さは205cm、幅は38cmを測り、深さ10cmと浅い土坑である。溝内にはこぶし大の礫がぎっしり敷かれ、須恵器の完形の坏（第36図2）が1点出土した。

SK02（土坑）

SK01の北に近接して検出された土坑である。やはり北北東から南南西方向へ延びるが、中央部で「く」の字状に曲がり、南側はやや狭くなる。土坑の長さは140cm、幅は20～35cmを測り、深さ10cmと浅い土坑である。遺物は出土していない。

SK03（土坑）

SB07の礎石（B）の南西で検出された土坑である。径1.7～2.4m、深さ31cmのやや椭円形を呈する。土坑内には暗緑灰色粘質土の上に暗オリーブ灰色粘質土が堆積し、この層の中に炭化米と炭化物が多量に含まれていた。溝底で須恵器の甕片（第36図3）が1点出土した。



第36図 SD 0 5(1)、SK 0 1(2)、SK 0 3(3)出土遺物実測図(1:3)

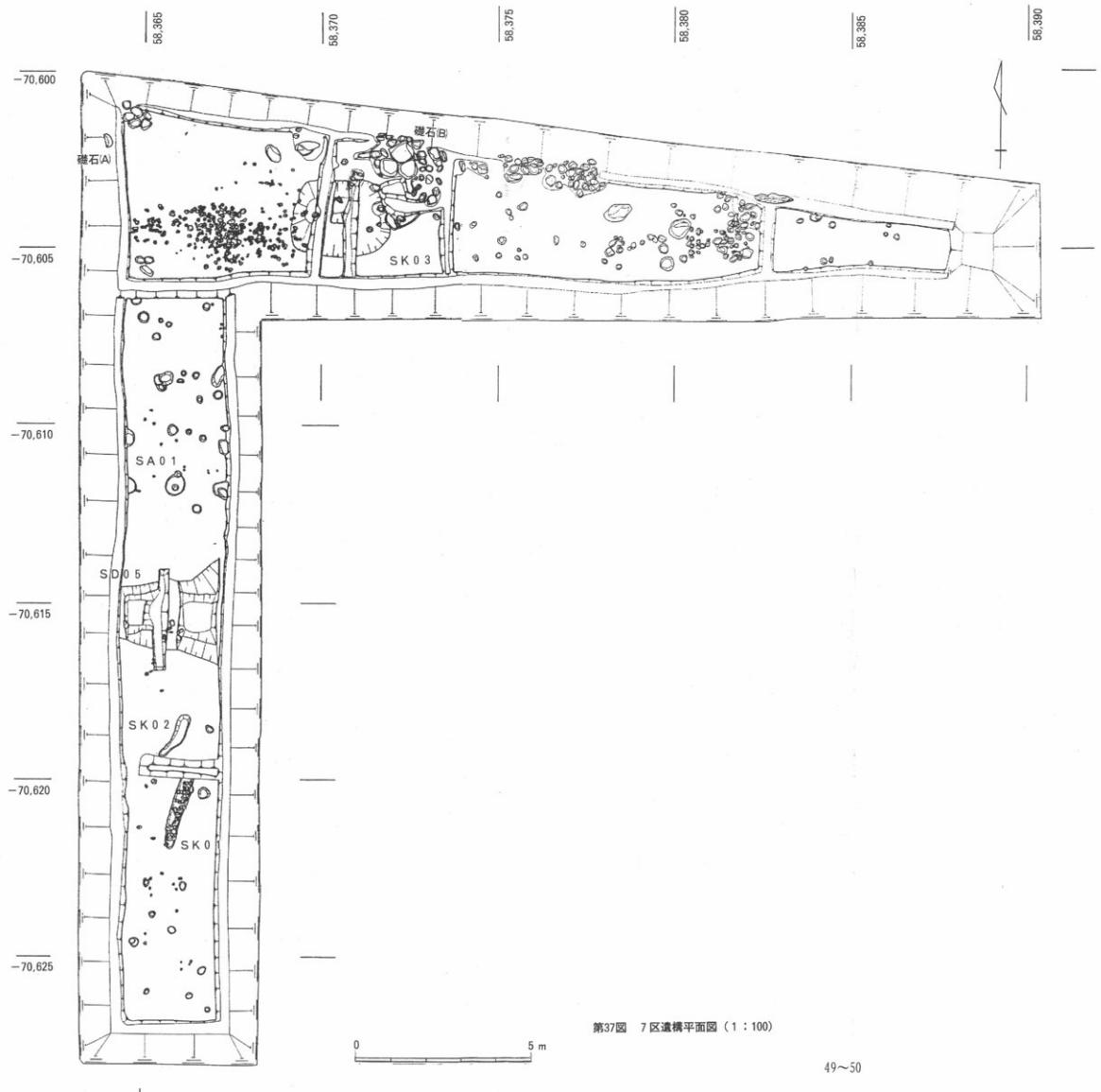
(2) 出土遺物(第43図～第44図)

7区は多くの遺物が出土したが、遺構から出土したSD 0 5出土の土師器片、SK 0 1出土の須恵器坏、SK 0 3出土の須恵器壺片以外は、堆積土中から出土した遺物である。

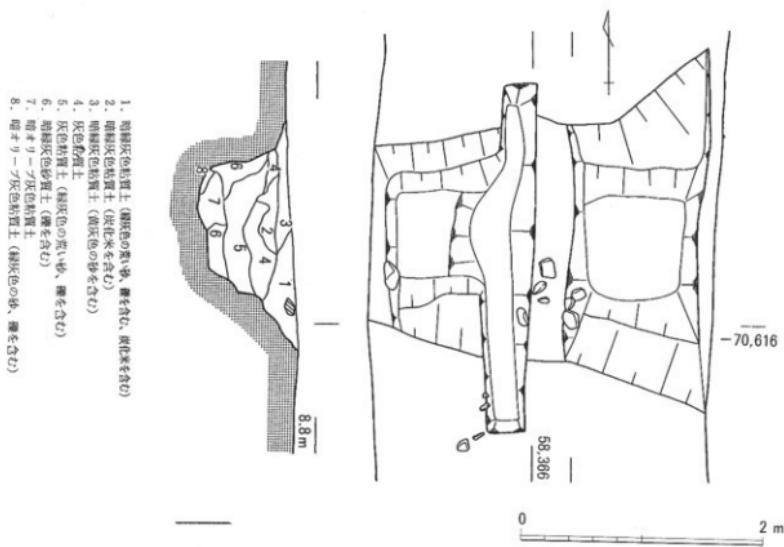
第43図1は绳文時代晚期の突帯文上器で、口縁部は先細りを呈し、直下に突帯が貼り付く。突帯上に浅い刻目があり、断面は蒲ぼこ形を呈する。2～5は弥生土器である。2は前期の壺で、口縁部近くで強く外反し、端部は丸い。内外面ともにハケメ調整が施される。3は中期の壺で、口縁部が逆「ハ」の字状に開き、端部は平坦をなす。外面に2条の平行沈線文が入る。4、5は底部である。

6、7は古墳時代中期の土師器である。6は高坏、7は低脚坏である。8～21は古墳時代後期末から平安時代の須恵器である。8～12は蓋である。8は天井部から口縁部にかけて丸みを帯び、境に浅く凹線を入れる。後期の後半であろう。9は輪状つまみをつけた蓋で、口縁端部は垂下する。10は低い輪状つまみがつく。11、12は平らな天井部のつまみは失われ、口縁端部はあまり垂下しない。奈良時代後半から平安時代前半頃であろう。13～15は回転糸切りを残す皿である。13の口縁部は短く外傾する14は13より外方に口縁部が開く。16は低い高台を有する坏、17は低い高台を有する皿である。13～17は奈良時代後半に属するものであろう。18は壺の底部と考えられる。19は「く」の字状の口縁をもつ壺で、頸部に浅い沈線が入る。肩部外面にヘラ描きがある。20、21は壺の破片で、20は上から沈線文2条、波状文9条、沈線文3条、21は沈線文2条、波状文6条、沈線文3条が施される。

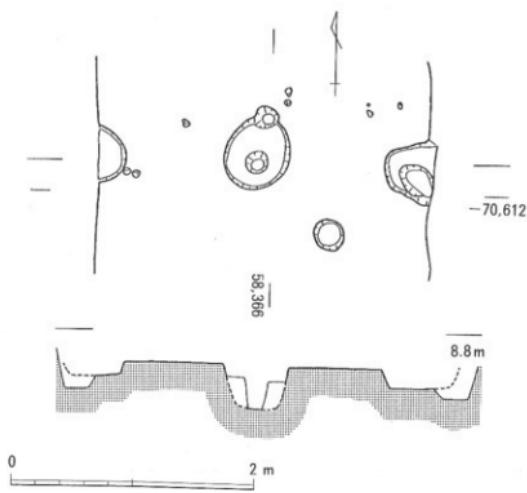
22～25は土師質土器の底部である。22～24は皿あるいは坏、25は「ハ」の字状の高台を有する坏



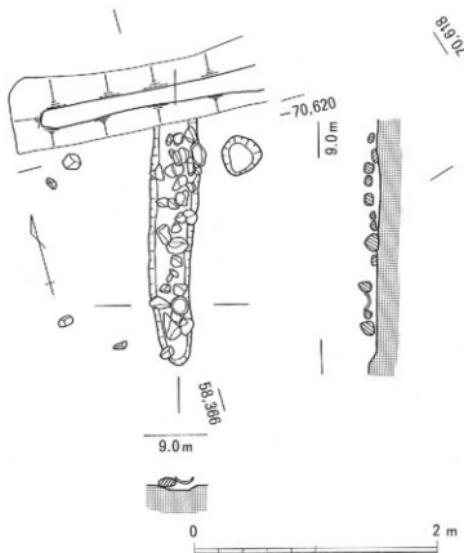
第37図 7区遺構平面図 (1:100)



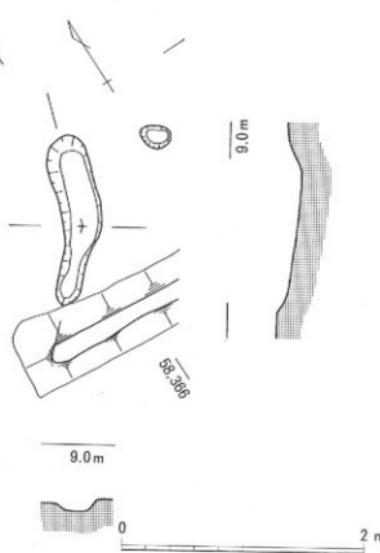
第38図 SD 05 実測図 (1 : 40)



第39図 SA 01 実測図 (1 : 40)



第40図 SK 0 1 実測図 (1 : 40)

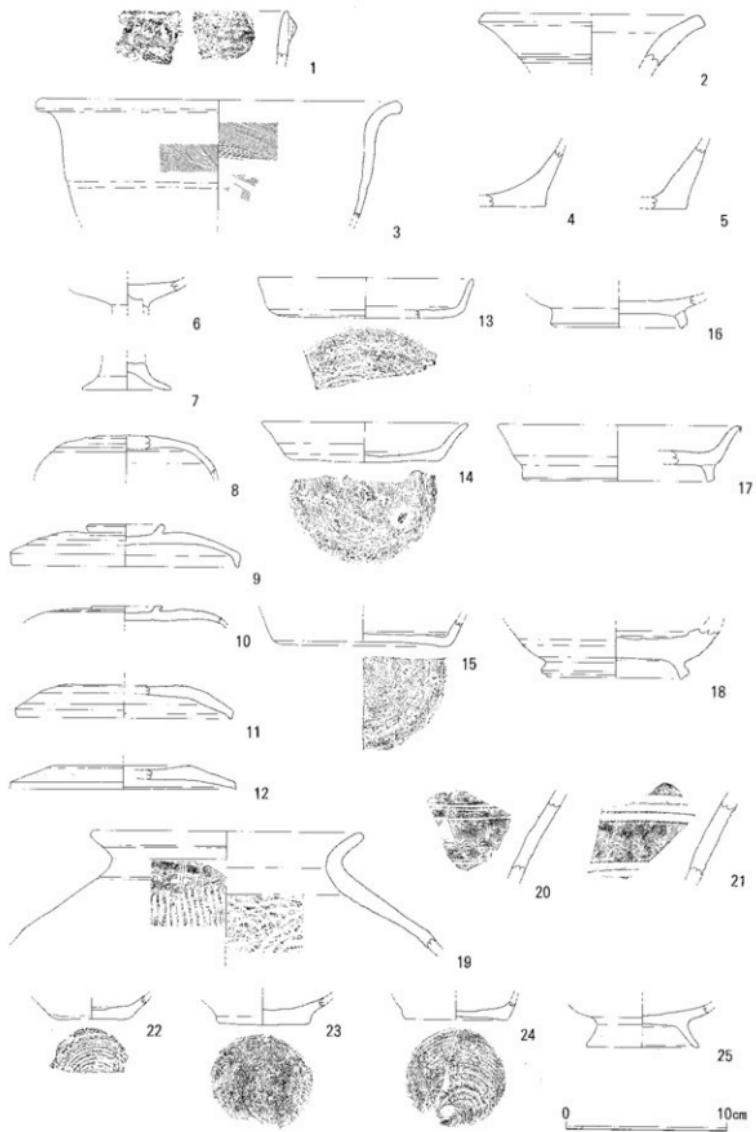


第41図 SK 0 2 実測図 (1 : 40)



1. 明オリ一灰色粘質土。(炭化木を多量に含む)
2. 明緑灰(色)粘土。

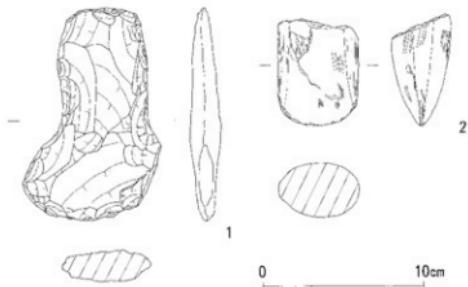
第42図 SK 0 3 実測図 (1 : 40)



第43図 7区出土遺物実測図（1:3）①

である。

第44図1は打製石斧、2は磨製石斧である。いずれも流紋岩製で、1は長さ16cm、重さ540gの大形品である。2は刃部のみの破片で、重さ425gを測る。



第44図 7区出土遺物実測図（1:3）②

8. 8区の調査

調査地は7区の東方75m地点の水田で、標高9.3mを測る。7区で検出されたSD05は、東西方向に延びることがわかっている。この溝が東側でも確認されれば、建物群の南側を区画する溝となるのではないかとして調査を行った。

基本的な層序は、耕作土（I）、灰褐色土（II）、灰色粘質土（III）、茶褐色土（IV）、暗灰色粘質土（V）、灰黒色土（VI）、灰色粘質土（VII）、暗灰色粘質土（VIII）、暗緑色砂礫土（IX）の順に堆積し、遺構面はIX層の上面になる。IX層は水田下1.3m、標高は7.5mを測る。出土した遺物はごくわずかで縄文土器、須恵器、上師質土器がある。

検出された遺構は、溝状遺構3、小ピット数穴である。

(1) 検出遺構（第45図～第47図）

SD06（溝状遺構）

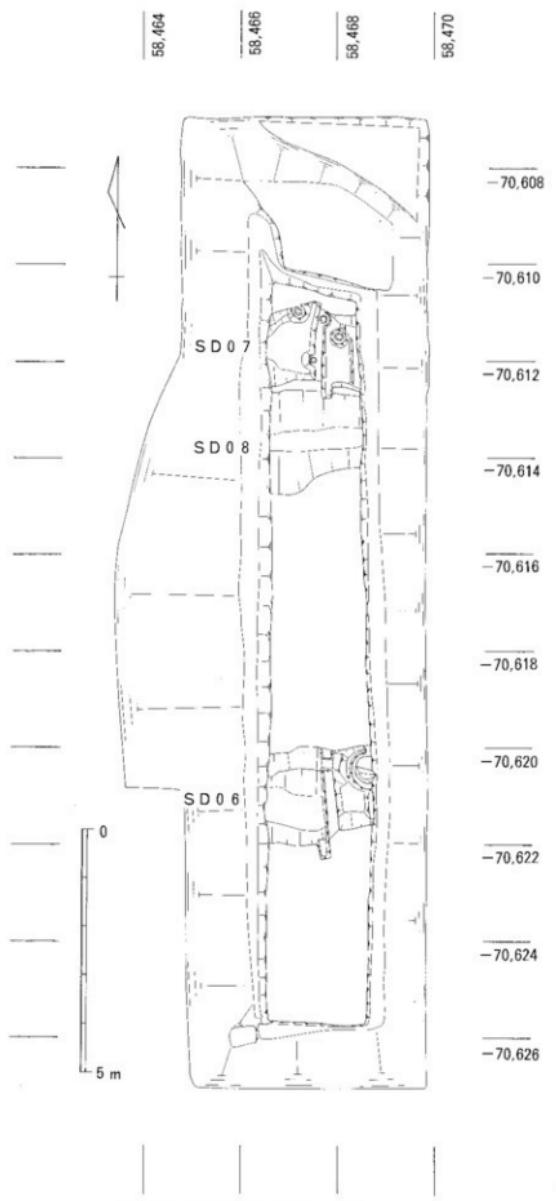
調査区の南寄りで検出された東西に走る溝状遺構である。溝の長さは2.05m、幅は上端2.10m、下端0.7m、深さ45cmを測る。溝底はU字状を呈し、斜面は南側が深く、北側はゆるい傾斜をもつ。溝内の埋土は青灰色砂礫屑が堆積し、遺物は出土していない。溝の主軸方向はN 8°Eとなる。

SD07（溝状遺構）

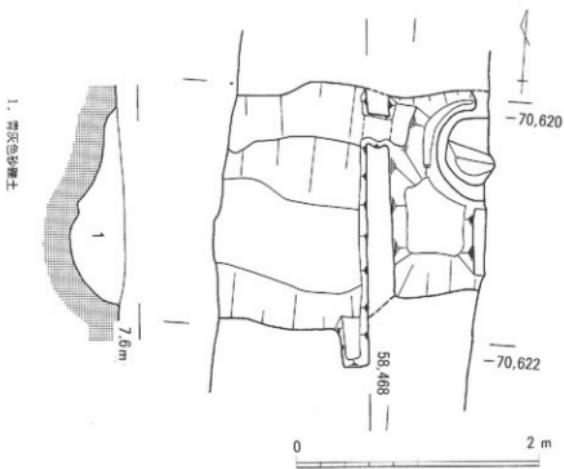
調査区の北端で検出された東西に走る溝状遺構である。溝の長さは1.9m、幅は上端1.5m、下端0.75m、深さ38cmを測り、溝底はやや平らで、南側斜面の急傾斜で北側へ向かってゆるく傾斜する。溝内の埋土はSD06と同様青灰色砂礫屑が堆積し、遺物は出土していない。溝の主軸方向はN 1°Wとなる。SD06との空間距離は7.5mを測る。

SD08（溝状遺構）

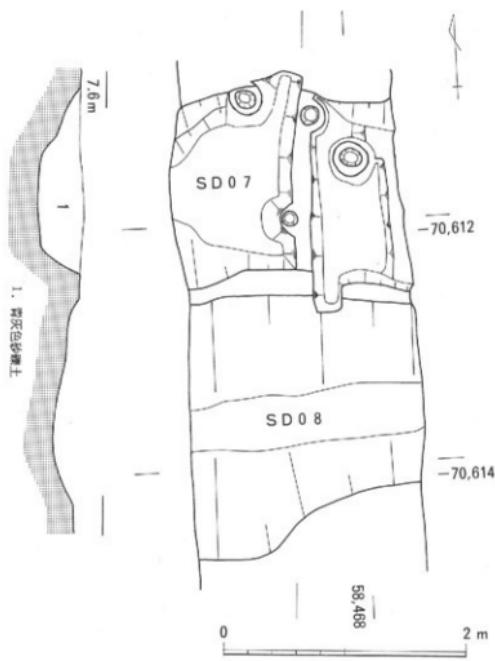
SD07の南側50cmほどで検出された浅い溝状遺構である。溝の長さは1.93m、幅は上端1.8m、下端0.4m、深さ35cmを測る。溝内の埋土は黒色土で、SD06とSD07の埋土とは様相を異にしている。遺物は出土していない。



第45図 8区遺構平面図 (1 : 100)



第46図 SD 06 実測図 (1 : 40)



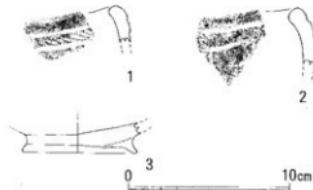
第47図 SD 07 + SD 08 実測図 (1 : 40)

(2) 出土遺物 (第48図～第49図)

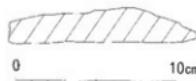
第48図1、2は磨消繩文を施す後期前葉の縄文土器である⁽⁸⁾。1、2とも深鉢で同一個体であると思われる。口縁部下に沈線を5.5mmの幅で2条施し、その中を繩文が充填する。ともに、沈線が次第に右上がりになるところから波状口縁になるであろう。内面は、横位に細かいミガキが施される。安来市島田黒谷I遺跡⁽⁹⁾や湖陵町奥ノ谷遺跡⁽¹⁰⁾に出土例があり福田K2式第1段階に位置づけられている。

3は土師質土器で、高台を有する壺である。

第49図4は打製石斧である。刃部のみの大形品で、刃こぼれが著しい。流紋岩製である。



第48図 8区出土遺物実測図 (1:3) ①



第49図 8区出土遺物実測図 (1:3) ②

註

- (1) 三宅博士氏（安来市教育委員会）のご教示による。
- (2) 光谷拓実氏（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）の鑑定による。
- (3) 島根県教育委員会『石台遺跡』1986年
- (4) 穴道町教育委員会『小松古窯跡群範囲確認調査報告書』1983年
- (5) 横田賛次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について——型式分類と編年を中心として』(『九州歴史資料集4』九州歴史資料館1978年)
- (6) 石材については、伊藤瑞章氏（斐川磁業）の鑑定による。
- (7) ②に同じ。
- (8) 磨消繩文については、野坂俊之氏（湖陵町教育委員会）のご教示を得た。
- (9) 島根県教育委員会『才ノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷I遺跡』1995年
- (10) 湖陵町教育委員会『一般廃棄物処理施設管理道路新設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 奥ノ谷遺跡』1995年

参考文献

- ・穴道正年「島根県の縄文土器の研究——編年を中心として』(『松江考古第3号』松江考古学談話会1980年)
- ・島根県教育委員会『石台遺跡II』1993年
- ・島根県教育委員会『タテチヨウ遺跡発掘調査報告書II』1987年
- ・広江耕史・片岡詩子「島根県における古代末～中世にかけての須恵器について』(『中近世上器の基礎研究IV』日本中世土器研究会1988年)
- ・島根県教育委員会「天満谷遺跡」(『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1987年)

表2 磁石計測表(1)

建物番号	区	磁石番号	径(cm)(短~長)	平面形	根石	備考
SB 0 1	1	S ₁	75~85	半円		標高8.15m
	1	S ₂	90~92	隅丸三角	11以上	8.19
	1	S ₃	70~103	楕円	7以上	8.22
	1	S ₄	77~95	楕円	5以上	8.11
	1	S ₅	—	—	1以上	
	1	S ₆	73~80	方		8.27
	1	S ₇	65~105	楕円	10以上	8.19
	1	S ₈	—	—	2以上	
	1	S ₉	70~135	楕円	6以上	8.30
	1	S ₁₀	68~112	楕円	13以上	8.11
SB 0 2	1	S ₁	99~125	楕円	15以上	8.93
	1	S ₂	109~140	楕円	11以上	8.97
	1	S ₃	100~148	楕円	5以上	8.97
	1	S ₄	90~116	楕円	5以上	8.90
	1	S ₅	83~87	楕円	3以上	8.94
	1	S ₆	90~124	楕円	2以上	9.00
	1	S ₇	—	—	4以上	
	1	S ₈	129~138	円	3以上	9.04
	1	S ₉	113~114	隅丸方	?	8.97
	1	S ₁₀	96~120	楕円	10以上	9.01
	1	S ₁₁	45~76	楕円	9以上	8.96
	1	S ₁₂	61~80	円?	3以上	9.01
	1	S ₁₃	—	—	—	
	1	S ₁₄	—	—	3以上	
	1	S ₁₅	50~69	隅丸三角	4以上	8.92
	1	S ₁₆	—	—	10以上	
	1	S ₁₇	54~64	隅丸三角	3以上	9.02
	1	S ₁₈	—	—	10以上	
	1	S ₉	86~87	隅丸方	13以上	9.07
	1	S ₂₀	64~90	円	8以上	8.99
	1	S ₂₁	79~86	楕円	16以上	9.03
	1	S ₂₂	65~68	楕円	6以上	9.05

表3 碳石計測表(2)

建物番号	区	番号	径(cm)	形	根石	備考
SB 0 5	3	S ₁	55~72	円	?	標高7.67m
	3	S ₂	88~107	円	?	7.74
	3	S ₃	73~77	方	3以上	7.76
	3	S ₄	80~95	円	3以上	7.73
	3	S ₅	—	—	—	—
	3	S ₆	55~60	隅丸三角	?	7.62
	3	S ₇	—	—	4以上	—
	3	S ₈	82~121	椭円	4以上	7.71
	3	S ₉	70~90	隅丸三角	8以上	7.43
	3	S ₁₀	68~107	椭円	4以上	7.64
	3	S ₁₁	95~115	椭円	?	7.62 碳石か
SB 0 6	5	S ₁	53~66	椭円	17以上	8.45
	5	S ₂	72~75	円	—	8.61
	5	S ₃	71~83	円	—	8.61
	5	S ₄	60~74	椭円	9以上	8.50
	5	S ₅	60~65	円	—	8.63
	5	S ₆	60~80	椭円	2以上	8.66
	5	S ₇	90~100	椭円	7以上	8.69
礎石(A)	7		19以上~39	円	—	SB 0 6 8.60
礎石(B)	7		55~65	隅丸方	17以上	SB 0 7 8.63

表4 柱穴計測表

建物番号	区	柱穴番号	掘り方		平面形	柱痕跡	柱根	備考
			長さ(南北×東西) 又は径(cm)	深さ(cm)				
SB 0 3	1	P ₁	146×132	—	方	60	—	—
	1	P ₂	99×110	—	方	60	18	—
	1	P ₃	107×105	—	方	50	—	—
	1	P ₄	108×80以上	49	方?	—	—	—
	1	P ₅	107×51以上	58	方?	55	—	—
	1	P ₆	118×124以上	57	長方	65?	50	—
	1	P ₇	105×68以上	57	方?	50	—	—
	1	P ₈	83以上×54以上	71	方?	50	—	—
	1	P ₉	93×142	—	長方	60	30	—
	1	P ₁₀	130×141	—	不整方	55	25	—
SB 0 4	1	P ₁	—×20以上	66	—	—	—	—
	1	P ₂	147×153	78	—	—	—	—
	1	P ₃	44以上×—	80	—	—	11以上	—
	1	P ₄	116×—	70	—	42	—	—
	1	P ₅	90以上×—	66	—	—	8以上	—
	1	P ₆	—×171	76	—	58	—	—
	1	P ₇	—×20以上	80	—	—	—	—
柱穴(A)	5		146	57	円	37	20	—

表5 出土遺物観察表(1)

種類	固版 番号	固版 番号	出土地点 部位	種類	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
法量 (cm)							
第14回	14	10	I区 SB04-7 _b	須恵	壺底 12.6 内部から周縁にかけて丸みを帯びる 斜面と底に円凸模様、底に斜溝	胎土：1.5mm以下の砂粒を少し含む 焼成：良好、色調：暗紅色	胎土内面に自然釉付着
第36回	24	1 35-1	7区 SD05	上部 高坏	壺底はやや丸味をおびる 状態不明	胎土：2mm以下の砂粒を少し含む 焼成：良好、色調：暗褐色	
第36回	24	2 35-2	7区 SK01	須恵	壺底 12.6 底面 3.50 底面は内面側で斜めに切り、底部内 面にナデ、底と内面に回転ナデ	胎土：4mm以下の砂粒を少し含む 焼成：良好、色調：黄褐色	
第36回	24	3 35-3	7区 SK03	須恵	壺底 内面：円錐内面真痕	胎土：1mm以下の砂粒を少し含む 焼成：良好、色調：暗灰褐色、外 面に自然釉付着	

以上、遺構に伴う遺物

種類	固版 番号	固版 番号	出土地点 部位	種類	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
法量 (cm)							
第15回	15 1 11-1	15 サブトレンチ	I区 サブトレンチ	陶文	深鉢 口径 21.5 水質文と垂、刻目 内面：柔軟	胎土：1～3mm大の白色細砂粒 焼成：良好、色調：褐色	
第15回	15 2 11-2	15 サブトレンチ	I区 サブトレンチ	陶文	深鉢 口径 21.7 内面外縁：ケズリ後ミガキ	胎土：1～3mm大の白色細砂粒 焼成：良好、色調：暗褐色	
第15回	15 3 11-3	15 サブトレンチ	I区 サブトレンチ	陶文	口縁部を底部との持は直面に皿面 外縁：ミガキ 内面外縁：ケズリ後ミガキ	胎土：1～3mm大の白色細砂粒 焼成：良好、色調：暗褐色	
第15回	15 4 11-4	15 サブトレンチ	I区 サブトレンチ	陶文	深鉢 口径 21.5 突起文土器、刻目	胎土：1mm大の白色細砂粒を多 く含む 焼成：不良、色調：灰白	
第15回	15 5 11-5	15 墓地跡	I区 墓地跡	陶文	火照文十唇、刻目	胎土：1～2mm大の白色細砂粒 焼成：良好、色調：褐色	
第15回	15 6 11-6	15 サブトレンチ	I区 サブトレンチ	陶文	突起文土器、刻目	胎土：1～3mm大の白色細砂粒 焼成：中や不良、色調：灰白	
第15回	15 7 11-7	15 墓地跡	I区 墓地跡	須恵	壺底 14.8 口縁部はかえりが残る 内井田：回転ナデ 他の内面：回転ナデ	胎土：1mm、2.5mm以下の砂粒を少 く含む 焼成：良好、色調：暗赤灰色	擬宝珠つまみか
第15回	15 8 11-8	15 3層	I区 3層	須恵	壺底 13.6 内井田：回転ナデ	胎土：薄 焼成：良好、色調：灰色	
第15回	15 9 11-9	1区 黑色土膏 (4層)	須恵	蓋 口径 17.8 口縁部は直面でケズリ後回転ナデ 内井田：回転ナデ 他の内面：回転ナデ	胎土：3mm以下の砂粒を多く含 む 焼成：良好、色調：灰色	擬宝珠つまみか	
第15回	15 10 11-10	15 サブトレンチ	I区 サブトレンチ	須恵	底面外縁：回転系切り 内井田：回転ナデ 他の内面：回転ナデ	胎土：薄 焼成：やや不良、色調：灰色	
第15回	15 11 11-11	15 SB02墓地跡	I区 SB02墓地跡	須恵	壺底 12.6 口縁部に壺底に持つ 内井田：回転ナデ	胎土：薄、5mm以下の砂粒を少 く含む 焼成：良好、色調：青灰色	
第15回	15 12 11-12	15 黒色土膏 (4層)	I区 (4層)	須恵	高台付 底径 9.4 高めの直面と 底面：回転ナデ	胎土：1mm以上の砂粒を少し含 む 焼成：普通、色調：暗灰色	
第15回	15 13 11-13	15 墓地跡	I区 墓地跡	須恵	高台付 底径 10.4 直面と底面 内井田：回転ナデ 他の内面：回転ナデ	胎土：薄、2mm以下の砂粒を少 く含む 焼成：普通、色調：灰色	墨青土器(底 部外面)
第15回	15 14 11-14	15 墓地跡	I区 墓地跡	須恵	壺底 15 上縁部に「遷」との字跡に聞く 内井田：回転ナデ	胎土：3mm以上の砂粒を少し含 む 焼成：良好、色調：暗灰色	
第15回	15 15 11-15	15 SB02墓地跡	I区 SB02墓地跡	須恵	III 口径 17.2 口縁部は底と外反 内井田：回転ナデ	胎土：薄、不白 胎土：内面は 青灰色、外面は黄灰色	
第15回	15 16 11-16	15 黒色土膏 (4層)	I区 (4層)	須恵	壺底付 底径 19.4 太い直面、脚部は厚い。 内井田：回転ナデ 他の内井田：回転ナデ	胎土：1mm以上の砂粒を少し含 む 焼成：やや不良、色調：青灰色	擬用器(底部 外面)
第15回	15 17 11-17	15 SB03墓地跡	I区 SB03墓地跡	須恵	壺底付 底径 25 人型の筋と直面は高い。 内井田：回転ナデ 他の内井田：回転ナデ	胎土：薄、2mm以下の砂粒を少 く含む 焼成：良好、色調：灰色	
第15回	15 18 11-18	15 SB02墓地跡	I区 SB02墓地跡	須恵	壺底付 底径 25.3 外縁外側：ハラケツリ回転ナデ 内井田：回転ナデ 他の内井田：回転ナデ	胎土：薄、2mm以下の砂粒を少 く含む 焼成：良好、色調：暗灰色	
第15回	15 19 11-19	15 黑色土膏 (4層)	I区 (4層)	須恵	壺底付 底径 12.6 直面の下半分：ハラケツリ回転 他の内井田：回転ナデ	胎土：薄、3mm以下の砂粒を含 む 焼成：良好、色調：暗灰色	自然釉うすく 付着
第15回	15 20 11-20	15 SB02墓地跡	I区 SB02墓地跡	須恵	II 壺底 14 壺底は上にまみ出す。外井 内井田：回転ナデ	胎土：薄 胎成：良好、色調：暗灰色	外面に自然釉 付着
第15回	15 21 11-21	15 3層	I区 3層	須恵	壺底は上にまみ出す。外井 内井田：回転ナデ	胎土：薄 焼成：良好、色調：灰色	

表6 出土遺物観察表(2)

編図 番号	國版 番号	出土地點 層	種類	器種	法幅 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第16回 15 22	11-22	1区 (4層)	須恵	壺		上から波文7条以上、沈線2 条。蓋部:回転ナメ。	胎土: 黒 焼成: 良好、色調: 灰色	
第15回 15 23	11-23	サブトレンチ	須恵	壺		上から波文8条以上、沈線3 条。蓋部:回転ナメ。	胎土: 黒 焼成: 良好、色調: 灰色	
第16回 16 1 12-1		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 5 器高 1.5	体幅:外方へ立ち上がる。他の内 部:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好以下の中粒を含む。 色調:灰白色	皿形 I
第16回 16 2 12-2		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 6.6 器高 2	体幅:内側気味に立ち上がる。 他の内 部:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 灰色	皿形 II a
第16回 16 3 12-3		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 7.8 器高 1.7	体幅:内側気味に立ち上がる。 他の内 部:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 灰色	皿形 II a
第16回 16 4 12-4		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 7.8 器高 1.7	体幅:内側気味に立ち上がる。 他の内 部:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 灰色	皿形 II a
第16回 16 5 12-5		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 7.8 器高 2.1	体幅:内側気味に立ち上がる。 他の内 部:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 淡黃褐色	皿形 II a
第16回 16 6 12-6		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 8.4 器高 2.1	体幅:斜方に立ち上がる。 他の内 部:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 普通、色調: 灰黃褐色	皿形 II b
第16回 16 7 12-7		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 7.8 器高 2.0	体幅:斜方に立ち上がる。 他の内 部:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好以下の中粒を含む。 色調:灰白色	皿形 II b
第16回 16 8 12-8		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 7.8 器高 2.45	体幅:内側気味に立ち上がる。 他の内外 部:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 黑褐色	皿形 II c
第16回 16 9 12-9		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 7.8 器高 2.5	体幅:選「ハ」の字形に立ち上 がる。底部外側:剥離不明、他の の内面:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 黄白色	皿形 II c
第16回 16 10 12-10		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 7.6 器高 2.2	体幅:選「ハ」の字形に立ち上 がる。底部外側:回転系切り、他の の内面:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 黄白色	皿形 II c
第16回 16 11 12-11		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 7.8 器高 2.05	体幅:選「ハ」の字形に立ち上 がる。底部外側:剥離不明、他の の内面:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 黄白色	皿形 II c
第16回 16 12 12-12		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 7.8 器高 2.3	体幅:選「ハ」の字形に立ち上 がる。底部外側:白釉系切り、他の の内面:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 黄白色	皿形 II c
第16回 16 13 12-13		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 7.8 器高 2.2	体幅:選「ハ」の字形に立ち上 がる。底部外側:白釉系切り、 他の内面:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 黄白色	皿形 II c
第16回 16 14 12-14		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 8.4 器高 2.3	体幅:選「ハ」の字形に立ち上 がる。底部外側:回転系切り、 他の内面:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 淡黃褐色	皿形 II d
第16回 16 15 12-15		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 8.2 器高 2.75	体幅:選「ハ」の字形に立ち上 がる。底部外側:回転系切り、 他の内面:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 淡黃褐色	皿形 II d
第16回 16 16 12-16		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 7.6 器高 2.1	体幅:選「ハ」の字形に立ち上 がる。底部外側:回転系切り、 他の内面:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 淡黃褐色	皿形 II d
第16回 16 17 12-17		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 8.8 器高 2.5	体幅:選「ハ」の字形に立ち上 がる。底部外側:回転系切り、 他の内面:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 淡黃褐色	皿形 II d
第16回 16 18 12-18		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 8.8 器高 2.1	体幅:選「ハ」の字形に立ち上 がる。底部外側:回転系切り、 他の内面:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 淡黃褐色	皿形 II d
第16回 16 19 12-19		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 9 器高 2.45	体幅:斜上方へ立ち上がる。 他の内外 部:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 淡黃褐色	皿形 III
第16回 16 20 12-20		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 9.2 器高 2.5	体幅:内側気味に立ち上がる。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 内灰白色	皿形 III
第16回 16 21 12-21		1区	土師質	壺	口徑 8.6 器高 2.1	体幅:斜上方へ立ち上がる。 他の内 部:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 淡黃褐色	皿形 III
第16回 16 22 12-22		1区 (4層)	土師質	壺	口徑 11 器高 2.6	体幅:選「ハ」の字形に立ち上 がる。底部外側:回転系切り、 他の内面:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 淡黃褐色	皿形 I
第16回 16 23 12-23		1区	土師質	壺	口徑 11.2 器高 2.7	体幅:選「ハ」の字形に立ち上 がる。底部外側:回転系切り、 他の内面:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 少少 灰白色	皿形 I
第16回 16 24 12-24		1区 (4層)	土師質	壺		体幅:内側気味に立ち上がる。 底部外側:回転系切り、他の内 部:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 淡黃褐色	皿形底部
第16回 16 25 12-25		1区 (4層)	土師質	壺		体幅:内側気味に立ち上がる。 底部外側:回転系切り、他の内 部:回転ナメ。	胎土: 黑 焼成: 良好、色調: 淡黃褐色	皿形底部

表7 出土遺物観察表(3)

種類	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第16回 26	1区 (4箇)	土師質 12.6	柱状は土方に立ち上がる。 横の外側: 回転ナメ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡黄褐色	直形底部
第16回 27	1区 (4箇)	上部質 12.27	体部は内側気味に立ち上がる。	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡黄褐色	直形底部
第17回 1	黒1区 (4箇)	土師質 13.1	土師質 輪 口径 12.4 高さ 0.4	体部は逆「へ」の字状に立ち上がる。 横の外側: 回転ナメ	胎土: 密 (砂粒をほとんど含まない)、 焼成: 良好、色調: 内にぶい褐色、外灰褐色
第17回 2	黒1区 (4箇)	土師質 13.2	土師質 輪 口径 16	体部は逆「へ」の字状に立ち上がる。 横の外側: 回転ナメ	胎土: 密 (砂粒をほとんど含まない)、 焼成: 良好、色調: 灰白色
第17回 3	黒1区 (4箇)	土師質 13.3	土師質 輪 口径 16	体部は逆「へ」の字状に立ち上がる。 横の外側: 回転ナメ	胎土: 密 (砂粒をほとんど含まない)、 焼成: 良好、色調: 灰白色
第17回 4	黒1区 (4箇)	土師質 13.4	土師質 輪 口径 6.7 高さ 4.2	体部は内側気味に立ち上がり、口 縁部は外側、底部は内側で輪 状であり、他の外側: 回転ナメ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 内白褐色
第17回 5	2区 (4箇)	土師質 13.5	土師質 輪 口径 17.8	体部は内側気味に立ち上がり、口 縁部は外側、底部は内側で輪 状であり、他の外側: 回転ナメ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 外灰褐色、 内にぶい褐色、外灰褐色
第17回 6	1区 (4箇)	上部質 13.6	上部質 輪 口径 17.8	体部は逆「へ」の字状に立ち上 がらる。底部外側: 回転ナメ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡灰色
第17回 7	1区 (4箇)	土師質 13.7	土師質 輪 口径 11.6 高さ 4.5	体部は内側気味に立ち上がり、口 縁部は内側、底部は外側で輪 状であり、他の外側: 回転ナメ	胎土: 1mm (砂粒1.2mm以下) 少 量 (少)、焼成: 良好、色調: 内 外にぶい褐色、底部は内側黃色
第17回 8	1区 (4箇)	上部質 13.8	上部質 輪 口径 17.4	体部は内側気味に立ち上がり、口 縁部は外側、内外面: 回転ナメ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 黑褐色、灰 褐色、内にぶい褐色、黒褐色、灰 褐色
第17回 9	黒1区 (4箇)	土師質 13.9	土師質 輪 口径 17.4	体部は逆「へ」の字状に立ち上 がらる。底部外側: 回転ナメ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡灰色
第17回 10	黒1区 (4箇)	土師質 13.10	土師質 輪 口径 17.4	体部は逆「へ」の字状に立ち上 がらる。底部外側: 回転ナメ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 黑褐色、外 灰褐色
第17回 11	1区 (4箇)	上部質 13.11	上部質 輪 口径 17.4	体部は逆「へ」の字状に立ち上 がらる。底部外側: 回転ナメ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 黄白色
第17回 12	黒1区 (4箇)	土師質 13.12	土師質 輪 口径 17.4	体部は内側気味に立ち上がる。 底部外側: 回転ナメ	胎土: 黑 (0.5mm以下の砂粒を 含む)、焼成: 良好、色調: 内 外灰白色
第17回 13	黒1区 (4箇)	上部質 13.13	上部質 脚付皿 口径 8 高さ 2.6	柱状の脚、底部は窓や穴、斜 面切り、他の内外面: 回転ナメ	胎土: 密 (0.5mm以下の砂粒を 含む)、焼成: 良好、色調: 内 外灰褐色
第17回 14	1区 (4箇)	土師質 13.14	土師質 脚付皿 口径 7.6 高さ 2	柱状の脚、底部は窓や穴、斜 面切り、他の内外面: 回転ナメ	胎土: 密 (0.5mm以下の砂粒を 含む)、焼成: 良好、色調: 黄白色
第17回 15	1区 (4箇)	上部質 13.15	上部質 脚付皿 口径 8.1 高さ 2.5	柱状の脚、底部は窓や穴、斜 面切り、他の内外面: 回転ナメ	胎土: 密 (0.5mm以下の砂粒を 含む)、焼成: 良好、色調: 黄白色
第17回 16	1区SB01 (4箇)	土師質 13.16	土師質 脚付皿 口径 8.4 高さ 2.6	柱状の脚、底部は窓や穴、斜 面切り、他の内外面: 回転ナメ	胎土: 密 (0.5mm以下の砂粒を 含む)、焼成: 良好、色調: 黄白色
第17回 17	1区 (4箇)	上部質 13.17	脚付环 底径 4.2	柱状の脚、底部は窓や穴、斜 面切り、他の内外面: 回転ナメ	胎土: 密 (1mm以下の砂粒を保 持する)、焼成: 良好、色調: 淡灰色
第17回 18	1区 (4箇)	土師質 13.18	脚付环 底径 4.05	柱状の脚、底部は窓や穴、斜 面切り、他の内外面: 回転ナメ	胎土: 密 (1mm以下の砂粒を保 持する)、焼成: 良好、色調: 灰白色
第17回 19	1区 (4箇)	上部質 13.19	脚付环 底径 4.8	柱状の脚、底部は窓や穴、斜 面切り、他の内外面: 回転ナメ	胎土: 密 (1mm以下の砂粒を含む)、 焼成: 良好、色調: 淡灰色
第17回 20	1区 (4箇)	土師質 13.20	脚付环 底径 5.35	柱状の脚、底部は窓や穴、斜 面切り、他の内外面: 回転ナメ	胎土: 密 (1mm以下の砂粒を含む)、 焼成: 良好、色調: 淡灰色
第18回 1	黒1区 (4箇)	土師質 14.1	脚付台 口径 8.6	脚部は窓や穴、底部は内側 窓や穴、斜面切り、他の内外面: 回転ナメ	胎土: 密 (1mm以下の砂粒を含む)、 焼成: 良好、色調: 淡灰色
第18回 2	1区 (4箇)	土師質 14.2	脚付台 口径 9.7	脚部は窓や穴、斜面切り、 底部は内側窓や穴、斜面切り、 他の内外面: 回転ナメ	胎土: 密 (1mm以下の砂粒を含む)、 焼成: 良好、色調: 淡灰色
第18回 3	黒1区 (4箇)	土師質 14.3	脚付台 口径 10.2 高さ 3.2	脚部は窓や穴、斜面切り、 底部は内側窓や穴、斜面切り、 他の内外面: 回転ナメ	胎土: 密 (1mm以下の砂粒を含む)、 焼成: 良好、色調: 灰白色
第18回 4	1区 (4箇)	土師質 14.4	脚付台 口径 11 高さ 3.1	脚部は窓や穴、斜面切り、 底部は内側窓や穴、斜面切り、 他の内外面: 回転ナメ	胎土: 密 (1mm以下の砂粒を含む)、 焼成: 良好、色調: 灰白色
第18回 5	1区 (4箇)	土師質 14.5	脚付环 口径 7.9	脚部は窓や穴、斜面切り、 底部は内側窓や穴、斜面切り、 他の内外面: 回転ナメ	胎土: 密 (0.5mm以下の砂粒を含 む)、焼成: 良好、色調: 橙色、 内灰黄色、外灰白色

表 8 出土遺物観察表(4)

発掘場所	回収番号	出土地点番号	種類	基盤	法寸 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第18区 6	18 14-6	1区 13箇	土師質 球	高台付 球	口径 7.8 底径 4.8 厚さ 2.9	胎土は低く「」の字状、環部は内側に立ち上がる。	胎土：重（3mm以下の砂粒を少含む）、焼成：普通、色調：青白土	高台付き环形Ⅲa
第18区 7	18 14-7	1区 （4箇）	上部質 球	高台付 球	口径 8.2 底径 5.4 厚さ 3.5	高台は「」の字状、環部は内側に立ち上がる。	胎土：重（1mm以下の砂粒を多含む）、焼成：良好、色調：内灰黄色、外淡黄色	高台付き环形Ⅲa
第18区 8	18 14-8	1区 （4箇）	土師質 球	高台付 球	口径 8.0 底径 5.6 厚さ 2.5	胎土は低く「」の字状、環部は内側に立ち上がる。	胎土：重（1mm以下の砂粒を多含む）、焼成：普通、色調：内灰黄色、外淡黄色	高台付き环形Ⅲa
第18区 9	18 14-9	1区 （4箇）	土師質 球	高台付 球	口径 8.7 底径 6.8 厚さ 3.7	環部は内側で立ち上がる。内外面：凹輪ナメ	胎土：重（2mm以下の砂粒を僅かに含む）、焼成：良好、色調：灰白色	高台付き环形Ⅲb
第18区 10	18 14-10	1区 （4箇）	土師質 球	高台付 球	口径 10.2 底径 8.8 厚さ 3.7	高台は「」の字状、環部はやや斜めで上方へ向く。	胎土：重（1mm以下の砂粒を僅かに含む）、焼成：良好	高台付き环形Ⅲb
第18区 11	18 14-11	SH92出土 （4箇）	上部質 球	高台付 球	口径 11.6 底径 9.0 厚さ 4.0	内外面：内側で立ち上がる。	胎土：重（0.5mm以下の砂粒を少含む）、焼成：普通、色調：灰白色	高台付き环形Ⅲ
第18区 12	18 14-12	1区 （4箇）	土師質 球	高台付 球	口径 15.4 底径 12.0 厚さ 7.0	環部は斜上方へ立ち上がる。	胎土：重（2mm以下の砂粒を含む）、焼成：良好、色調：灰白色	高台付き环形Ⅳ
第18区 13	18 14-13	1区 （4箇）	上部質 球	高台付 球	口径 16.0 底径 12.0 厚さ 8.0	環部は斜上方へ立ち上がる。内外面：凹輪ナメ	胎土：重（1mm以下の砂粒を僅かに含む）、焼成：良好、色調：褐色	高台付き环形Ⅳ
第18区 14	18 14-14	1区 （4箇）	土師質 球	高台付 球	口径 11.2 底径 8.8 厚さ 7.0	高台は「」の字状、環部は深く斜めで立ち上がる。	胎土：重（0.5mm以下の砂粒を少含む）、焼成：良好、色調：灰白色	高台付き椭形Ⅰ
第18区 15	18 14-15	1区 （4箇）	上部質 球	高台付 球	口径 13.0 底径 10.0 厚さ 8.0	环部は内側で立ち上がり、口縁部は外側に突出する。	胎土：重（2mm以下の砂粒を含む）、焼成：良好、色調：灰白色	高台付き椭形Ⅱ
第18区 16	18 14-16	1区 （4箇）	土師質 球	高台付 球	口径 13.0 底径 10.0 厚さ 8.0	环部は内側で立ち上がる。	胎土：重（2mm以下の砂粒を含む）、焼成：良好、色调：浅灰褐色	高台付き椭形Ⅱ
第18区 17	18 14-17	1区 （4箇）	上部質 球	高台付 球	口径 16.0 底径 12.0 厚さ 8.0	「」の字状に開く高台	胎土：重（1mm以下の砂粒を含む）、焼成：良好、色调：浅灰褐色	高台付き底部
第18区 18	18 14-18	1区 （4箇）	土師質 球	高台付 球	口径 16.0 底径 12.0 厚さ 8.0	「」の字状に開く高台	胎土：重（1mm以下の砂粒を少含む）、焼成：普通、色调：灰黄色	高台付き底部
第18区 19	19 14-19	1区 （4箇）	白磁 碗	口縁	口径 18.0 底径 6.7	玉様状口縁	胎土：重、灰白色粘土、焼成：良好、色调：薄黄緑色	
第18区 20	19 14-20	1区 （4箇）	白磁 碗	口縁	玉様状口縁	胎土：重、白粘土、焼成：良好、色调：乳白色		
第18区 21	19 14-21	1区 （4箇）	白磁 碗	口縁	玉様状口縁	胎土：重、白粘土、焼成：良好、色调：乳白色		
第18区 22	19 14-22	1区 （4箇）	白磁 碗	底径	7.9	脇状の低い高台、唇部は厚い見込みに波がつく。	胎土：重、灰白色粘土、黒い糊、焼成：良好、色调：乳白色	
第18区 23	19 14-23	1区 （4箇）	白磁 碗	底径	6.9	脇状の低い高台、器肉は薄い。	胎土：重、灰白色粘土、黒い糊、焼成：良好、色调：薄黄緑色	
第18区 24	19 14-24	1区 （4箇）	白磁 碗	底径	11.2 2.8	部体は内側で立ち上がるが、外縁部は斜めで立ち上がる。	胎土：重（2mm以下の砂粒を含む）、焼成：良好、色调：薄黄緑色	内窓がみられる る器皿へと繋がる
第18区 25	19 14-25	サブトレンチ 1区	青磁 皿	底径	4.65 4.4	部体は下位で凹曲、外縁部は無釉。	胎土：重、灰白色粘土、薄褐色	内窓へと繋がる る器皿へと繋がる
第18区 26	19 14-26	サブトレンチ 1区	磁器 皿	底径	4	胎土は低くやや外へふんばる。	胎土：重、灰白色粘土、薄青色	
第21区 1	20 17-1	2区 （4箇）	陶文 鉢	口縁	直径 11.2 2.8 厚さ 2.8	内面：刻目、内面：ナメ	胎土：1～2mmの大いの白色、細砂、焼成：良好、色调：暗褐色	
第21区 2	20 17-2	2区 （4箇）	陶文 鉢	口縁	直径 11.2 2.8 厚さ 2.8	内面：刻目、内面：ナメ	胎土：1～2mmの大いの白色、細砂、焼成：良好、色调：暗褐色	
第21区 3	20 17-3	2区 （4箇）	陶文 鉢	口縁	直径 11.2 2.8 厚さ 2.8	内面：刻目、内面：ナメ	胎土：1～2mmの大いの白色、細砂、焼成：良好、色调：暗褐色	
第21区 4	20 17-4	2区 （4箇）	磁器 皿	底径	4	胎土つまろ、井戸部外縁：ヘラケテ、内縁部：凹輪ナメ	胎土：重、灰白色粘土、薄青色	
第21区 5	20 17-5	2区 （4箇）	土師質 鉢	底径	4.65 4.4	底部の外縁：凹輪ナメ	胎土：重、灰白色粘土、内縁部：凹輪ナメ	
第21区 6	20 17-6	2区 （4箇）	土師質 鉢	底径	4	胎土つまろ、体部にかけて外反する、底部外縁：凹輪ナメ	胎土：重、灰白色粘土、内縁部：凹輪ナメ	圓形か

表9 出土遺物観察表(5)

辨証 器名 番号	図版 番号	出土地點 名	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第25回 1	21 21-1	3区 墓地層の下層	発生	甕	口径 19.4	口縁部は「く」の字状に短幅。 底部は上円、下部外周部はハケメ。	胎土：1mm以下の砂粒を少し含む。 焼成：良灯、色調：淡黄色	
第25回 2	21 21-2	3区 墓地層の下層	発生	底盤	底径 5.8	上げ盤のやさい底部 底部外周部はハケメ。 他の内外面：ナチュラル。	胎土：1.5mm以下の砂粒を多く含む。 焼成：良灯、色調：淡黄色	
第25回 3	21 21-3	3区 礫石西側の 墳丘上面	須恵	蓋		輪抜きまろい 大井井外周部：ハラケズリ 他の内外面：凹輪ナチュラル。	胎土：2mm以上の白色砂粒を多 く含む。 焼成：良灯、色調：暗灰色	
第25回 4	21 21-4	3区 9層	須恵	蓋台付 甕	底径 10	蓋台は低い。底部外周面：同蓋系 切り後ナチュラル、凹輪ナチュラル。	胎土：泥 焼成：泥や不良 色調：淡灰色	
第25回 5	21 21-5	3区 須恵	甕			底部外周面：同蓋系切り 他の内外面：凹輪ナチュラル。	胎土：1.5mm以下の砂粒を含む。 焼成：良灯、色調：灰白色	
第25回 6	21 21-6	3区 礫石西側の 墳丘上面	須恵	甕		外周部上から下まで「く」の字状に窪 内側は上から下まで「く」の字状に窪 深い底部に凸出部	胎土：3mm以下の白色砂粒を少 く含む。 焼成：良好、色調：暗灰色	
第25回 7	21 21-7	3区 炭化木包含 土質質	土師質	环か	口径 13	体部は厚。「く」の字状に窪く。 外周部：凹輪ナチュラル	胎土：泥 焼成：良灯、色調：灰白色	
第25回 8	21 21-8	3区 礫石西側の 墳丘上面	土師質	甕か	口径 10.6	体部は内曲輪状に立ち上がる。 外周部：凹輪ナチュラル	胎土：泥 焼成：良灯、色調：淡黄色	
第25回 9	21 21-9	3区 礫石西側の 墳丘上面	土師質	甕か	底径 5.4	低い唇状部の底部体部は内曲輪状 内側は上から下まで「く」の字状に窪 他の内外面：凹輪ナチュラル	胎土：1.5mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好、色調：淡黄色	
第25回 10	21 21-10	3区 炭化木包含 土質質	土師質	甕か		体部は深。「く」の字状に窪く。 内側は上から下まで「く」の字状に窪 他の内外面：凹輪ナチュラル	胎土：0.5mm以下の砂粒を少 く含む。 焼成：良好、色調：灰白色	
第25回 11	21 21-11	3区 礫石西側の 墳丘上面	土師質	环か		体部はやや立ち上がり立ち上がる。 外周部は丸みを帯びた。 底部の輪郭は若干取扱	胎土：泥 焼成：良灯、色調：淡黄色	
第25回 12	21 21-12	3区 礫石西側の 墳丘上面	土師質	腰付 甕か	底径 7.4	腰部はあくび状の唇状部。 他の内外面：凹輪ナチュラル	胎土：2mm以下の白色砂粒を多 く含む。 焼成：良好、色調：淡黄色	
第25回 13	21 21-13	3区 礫石西側の 墳丘上面	土師質	蓋台付 甕か	底径 7	「く」の字状の腰部。 内側は上から下まで「く」の字状に窪 他の内外面：凹輪ナチュラル	胎土：0.5mm以下の砂粒を少 く含む。 焼成：良灯、色調：灰白色	
第26回 1	22 22-1	4区 砂質土	織文	深鉢	口径 29.6	口縁はゆるく外反。 外周部：強ナチュラル	胎土：1.5~2mmの大白色細砂粒 焼成：良灯、色調：暗褐色	
第26回 2	22 22-2	4区 砂質土	織文	深鉢		口縁はわずかに外反、外面に沈 凹部：ナチュラル	胎土：1~2mmの大白色細砂粒 焼成：良灯、色調：褐色	
第26回 3	22 22-3	4区 砂質土	甕	甕	口径 21.3	口縁は強く外反、輪郭に割目、 外周部：ハケメ、内面：ナチュラル	胎土：0.5mm以下の砂粒を含む。 焼成：良灯、色調：淡褐色	
第26回 4	22 22-4	4区 砂質土	甕	甕		口縁はゆるく外反、輪郭下半部分 内面：ナチュラル、他の内外面：ナチュラル	胎土：3mm以下の砂粒を含む。 焼成：良灯、色調：暗褐色	
第26回 5	22 22-5	4区 砂質土	織文	底盤	底径 8.5	底部は平底。 内外周部：ナチュラル	胎土：1~2mmの大白色細砂粒 焼成：良灯、色調：暗褐色	
第26回 6	22 22-6	4区 青灰土下層	甕	底盤	底径 7	底部は半球形。 外周部：ナチュラル	胎土：2mmの大砂粒を含む。 焼成：良灯、色調：淡褐色	
第30回 1	22 26-1	5区 2~7層	発生	甕	口径 16	複合口縁部は縦縫 内面：ナチュラル	胎土：泥 焼成：泥や不良、色調：淡褐色 備考：蓋のため調 整不可	
第30回 2	22 26-2	5区 2~7層	須恵	蓋台付 甕か	底径 11.7	蓋台は低く、外方に傾り出す。 底部内面：凹輪ナチュラル、他の内外面：凹輪ナチュラル	胎土：泥、1.5mmの大砂粒を少 く含む。 焼成：良灯、色調：灰色	
第30回 3	22 26-3	5区 2~7層	須恵	甕		底部が斜めに傾いており、内面を凹 内側は上から下まで「く」の字状に窪 他の内外面：凹輪ナチュラル	胎土：2mm以下の大砂粒を多く含む。 焼成：良灯、色調：暗褐色 内面は灰褐色、断面はセピア色	
第30回 4	22 26-4	5区 2~7層	須恵	甕		底部が斜めに傾いており、内面を凹 内側は上から下まで「く」の字状に窪 他の内外面：凹輪ナチュラル	胎土：2mmの大砂粒を含む。 焼成：良灯、色調：暗褐色	
第30回 5	22 26-5	5区 2~7層	土師質	蓋台付 甕か	底径 5	底部が斜めに傾いており、内面を凹 内側は上から下まで「く」の字状に窪 他の内外面：凹輪ナチュラル	胎土：泥、2mm以下の砂粒を少 く含む。 焼成：良灯、色調：暗褐色	
第34回 1	23 30-1	6区 10~11層	甕	甕	口径 26	口縁部は肥厚し、刻目を施す。 内外周部：ナチュラル	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良灯、色調：暗褐色 内面は淡褐色	
第34回 2	23 30-2	6区 10~11層	甕	甕	口径 25	口縁部はハケメ、内面：ナチュラル 内面：ナチュラル	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良灯、色調：淡黄色	
第34回 3	23 30-3	6区 10~11層	甕	甕	口径 20.8	口縁部は「く」の字状に内凹する。 内面：ナチュラル	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良灯、色調：淡褐色	

表10 出土遺物観察表(6)

施設 番号	認定 番号	山土地点 名	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第34回	23 1 30-4	6区 10・11層	弥生	壺	口径22.6	口部は「く」の字状に削曲、腹部は上下に弧曲、口縁4条口縁部内面:ナラ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡黄色	
第34回	23 5 30-5	6区 13層上段	弥生	壺	口径23.2	口部は「く」の字状に削曲、腹部は上下に弧曲、口縁4条口縁部内面:ナラ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡黄色	
第34回	23 6 30-6	6区 13層上端	弥生	壺	口径22.2	口部は「く」の字状に削曲、腹部は上下に弧曲、口縁4条口縁部内面:ナラ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡黄色	
第34回	23 7 30-7	6区 10・11層	弥生	壺	口径7.6	口部は「く」の字状に削曲、腹部は上下に弧曲、口縁4条口縁部内面:ナラ	胎土: 3.5mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 内面は淡茶色、外面は黒灰色	
第34回	23 8 30-8	6区 10・11層	弥生	壺	平底 7.6	口部は「く」の字状に削曲、腹部は上下に弧曲、口縁4条口縁部内面:ナラ	胎土: 2mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 内面は淡茶色、外面は淡灰色	
第34回	23 9 30-9	6区 10・11層	弥生	坛	5.6	口部は「く」の字状に削曲、腹部は上下に弧曲、口縁4条口縁部内面:ハケメ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡灰色	
第34回	23 10 30-10	6区 10・11層	弥生	底深	7	平底 外面: ハラミガキ 内面: ハケメ	胎土: 3mm以上の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 内面は淡茶色、外面は淡灰色	
第34回	23 11 30-11	6区 10・11層	弥生	坛	6.4	口部 調整不明	胎土: 2.5mm以下の砂粒を含む。 焼成: やや不良、色調: 赤褐色	
第34回	23 12 30-12	6区 10・11層	弥生	底深	6	平底 内面: ハラミガキか 内面: ハケメ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 内面は淡茶色、外面は淡灰色	
第34回	23 13 30-13	6区 10・11層	弥生	底深	5	口部 内面: ハラミガキ 内面: ハケメ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: やや不良、色調: 赤褐色	
第34回	23 14 30-14	6区 10・11層	弥生	底深	5.8	口部 外面: ハラミガキか 内面: ハラミガキか	胎土: 2mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 内面は淡茶色、外面は淡灰色	
第35回	24 1 31-1	6区 7層	弥生	壺	口径19	口部は「く」の字状に削曲、腹部は上下に弧曲、口縁4条口縁部内面:ナラ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡茶色	
第35回	24 2 31-2	6区 10・11層	弥生	壺	口径12.6	口部は「く」の字状に削曲、腹部は上下に弧曲、口縁4条口縁部内面:ナラ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡茶色	
第35回	24 3 31-3	6区 7層	弥生	壺	口径16.6	口部は「く」の字状に削曲、腹部は上下に弧曲、口縁4条口縁部内面:ナラ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡茶色	
第35回	24 4 31-4	6区 10・11層	弥生	壺	口径17.5	口部は「く」の字状に削曲、腹部は上下に弧曲、口縁4条口縁部内面:ナラ	胎土: 3mm以上の砂粒を含む。 焼成: やや不良、色調: 淡茶色	
第35回	24 5 31-5	6区 10・11層	弥生	壺	口径16.2	口部は「く」の字状に削曲、腹部は上下に弧曲、口縁4条口縁部内面:ナラ	胎土: 3mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡茶色	
第35回	24 6 31-6	6区 7層	弥生	底深	7.3	口部は「く」の字状に削曲、腹部は上下に弧曲、口縁4条口縁部内面:ハケメ	胎土: 3mm以下の砂粒を含む。 焼成: やや不良、色調: 淡黄色	
第35回	24 7 31-7	6区 10・11層	弥生	底深	10	口部 外面: ハケメ	胎土: 3mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡茶色	
第35回	24 8 31-8	6区 7層	弥生			外面: 全面ハケメ後縫状の刺穴 内面: ハケメ	胎土: 有 焼成: 良好、色調: 淡茶色	
第35回	24 9 31-9	6区 10・11層	弥生			外面: 刺文6段 内面: ハケメ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡茶色	
第35回	24 10 31-10	6区 13層上端	弥生			外面: ハケメ、刺突文(斜行状)	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡黄色	
第35回	24 11 31-11	6区 10・11層	弥生			外面: 口子状の刺突文4段	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 黄褐色	
第35回	24 12 31-12	6区 2段(耕作土)	須恵	壺		楕状つまり天井部外面: ハラ 内面: ハラハラナラナラ	胎土: 1mm以下の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 灰色	
第35回	24 13 31-13	6区 7層	須恵	壺		内外面: 回転ナラ	胎土: 有 焼成: 良好、色調: 灰色	
第43回	25 1 39-1	7区 サブトレレンチ 2	陶文	深鉢	口径14.4	口部は深「ハ」の字状に削曲、腹部はやや肥厚、口縁4条口縁部内面:ナラ	胎土: 2mm以上の砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡茶色	
第43回	25 2 39-2	7区 (南北北)	弥生	壺	口径24.6	口部は強く外曲、外曲: ハケ 内縁部の内側: ハラ、口縁部内面: ハケメ	胎土: 2mm以上の白色細砂粒を含む。 焼成: 良好、色調: 淡茶色	
第43回	25 3 39-3	7区 サブトレレンチ 1	弥生	壺			胎土: 有 焼成: 良好、色調: 淡茶色	

表11 出土遺物観察表(7)

擇図 番号	回収 番号	山土地点 層	種類	器種	法量 (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第43回 4	26 39-4	7区 青色陶の上	甕生	壺	平底 調整不明		胎土：2mm以下の砂粒を多く含む。 焼成：良好、色調：外面は黒茶色、内面は淡茶色	
第43回 5	25 39-5	7区 青色陶の上	甕生		平底 調整不明		胎土：2mm以下の砂粒を多く含む。 焼成：良好、色調：暗褐色	
第43回 6	25 39-6	7区 青色陶の上	土師	壺坏		調整不明	胎土：2mm以下の砂粒を少し含む。 焼成：良好、色調：黄灰色	
第43回 7	25 39-7	7区 青色陶の上	土師	壺脚坏	底径 6	調整不明	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好、色調：淡黄色	
第43回 8	25 39-8	南北 レンジ	須恵	壺		丸みのある天井部と口縁部との間に 凹線、天井部内面：ハラケズリ後回転 ナマ、他の内外面：回転ナマ	胎土：1mm以下の砂粒を多く含む。 焼成：良好、色調：灰色	黒色粒子含む
第43回 9	25 39-9	東西 レンジ	須恵	壺	口径 15.2 底径 2.8	斜底つまり、口縁部には垂下天井部 天井部内面：ナマ、他の内外面：回 転ナマ	胎土：3mm以下の砂粒を少し含む。 焼成：良好、色調：灰色	
第43回 10	25 39-10	東西 レンジ	須恵	壺		弧状つまり、口縁部には垂下天井部 天井部内面：ナマ、他の内外面：回 転ナマ	胎土：2mm以下の砂粒を少し含む。 焼成：良好、色調：灰白色	
第43回 11	25 39-11	東西 レンジ	須恵	壺	口径 14.4	口縁部底部は直下 天井部不規則：ハラケズリ後回転 ナマ、他の内外面：回転ナマ	胎土：2mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好、色調：暗灰色	
第43回 12	25 39-12	東西 レンジ	須恵	壺	口径 14.0	口縁部底部は直下 天井部不規則：ハラケズリ後回転 ナマ、他の内外面：回転ナマ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好、色調：灰白色	
第43回 13	25 39-13	東西 レンジの上	須恵	壺	口径 14.4 底径 2.7	口縁部は斜下外傾、底部外面： 向拵切刃、他の内外面：回転 ナマ	胎土：2mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好、色調：暗灰色	
第43回 14	25 39-14	東西 レンジの上	須恵	壺	口径 13.8 底径 2.7	口縁部は斜外傾、底部外面： 向拵切刃、他の内外面：回転ナマ	胎土：2mm以下の砂粒を少し含む。 焼成：良好、色調：灰白色	
第43回 15	25 39-15	東西 レンジ	須恵	壺		上げ底孔、底部外面：回転治 り外面、回転ナマ	胎土：1.5mm以下の砂粒を少し含む。 焼成：良好、色調：灰色	
第43回 16	25 39-16	東西 レンジ	須恵	壺台付 跡が	底径 9.7	壺台は低くやや外傾、底部外面： 向拵切刃、他の内外面：回転ナマ	胎土：1mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好、色調：暗灰色	
第43回 17	25 39-17	東西 レンジ	須恵	壺台付	口径 16.3 底径 3.7	壺台は丸く、壺台は直め 内外面：白ナマ	胎土：2mm以下の砂粒を少し含む。 焼成：良好、色調：暗灰色	
第43回 18	25 39-18	東西 レンジ	須恵	壺	底径 10	豊肥字形底をもつて立てる。壺台は直 向拵切刃、底部外面：回転ナマ、 内外面：回転ナマ	胎土：1mm以上の砂粒を含む。 焼成：良好、色調：灰色	
第43回 19	25 39-19	東西 レンジ	須恵	壺	口径 18.2	口縁部は下の子孫筋部、底部外 面：向拵切刃、内外面：回転ナマ	胎土：2mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好、色調：暗灰色	内外面に自然剥離層 の「へらつき」
第43回 20	25 39-20	東西 レンジの上	須恵	壺		外腹：上から模様、波状文 内腹：回転ナマ	胎土：直 燒成：良好、色調：外面は暗灰色、 内向は灰色	
第43回 21	25 39-21	東西 レンジ	須恵	壺		外腹：上から模様、波状文 内腹：回転ナマ	胎土：直 燒成：良好、色調：灰色	
第43回 22	25 39-22	東西 レンジ	土師質	皿		底盤外面：回転治切り 他の内外面：回転ナマ	胎土：直 燒成：良好、色調：黄褐色	
第43回 23	25 39-23	東西 レンジ	土師質	皿	底径 6.1	高台外輪の底部 底盤外輪：回転治切り 他の内外面：回転ナマ	胎土：直 燒成：良好、色調：淡赤色	
第43回 24	25 39-24	南北 レンジ	土師質	皿		底盤は上げ底 底盤外輪：回転治切り 他の内外面：回転ナマ	胎土：1mm以上の砂粒を含む。 焼成：良好、色調：褐色	
第43回 25	25 39-25	東西 レンジ	土師質	皿	底径 7.4	細長い立ちがた／＼の字状に開 底盤外輪：回転治切り 他の内外面：回転ナマ	胎土：1mm以下の砂粒を少し含む。 焼成：良好、色調：黄褐色	
第46回 1	26 44-1	東西 レンジ削土中	縦文	深鉢		豊肥口量、外腹に花鉢 2条 内腹：直角底、内面：ミガキ	胎土：1.5mm以下の砂粒を多く含む。 焼成：良好、色調：灰褐色	
第46回 2	26 44-2	東西 レンジ削土中	縦文	深鉢		豊肥口量、外腹に花鉢 2条 内腹：直角底、内面：ミガキ	胎土：1.5mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好、色調：灰褐色	
第46回 3	26 44-3	8区 層	土師質	壺台付	底径 7.3	壺台は低く、「ハ」の字状。 底盤内面：向拵ナマ	胎土：1mm以下の砂粒を少し含む。 焼成：直 胎土：直 燒成：良好、色調：外面は淡黃色、 内面は黒色	

以上、造構に伴わない遺物

表12 石器一覧表

	採集番号	図版番号	出土点位置	種類	材質	保存状態	法量(cm)	重さ(g)	備考
1	第19図 1	19 15-1	1区 サブトレ盆地 層及び下層	打製石斧	流紋岩	完形品	長:15.8 幅:11.9	厚:2	重:400
2	第19図 2	19 15-2	1区 トレンチ 整地層下層	打製石斧	流紋岩	完形品	長:14.9 幅:9	厚:2	重:366
3	第19図 3	19 15-3	1区 南北トレンチ	打製石斧	流紋岩	少欠損	長:(4.9) 幅:7.7	厚:0.85	重:40.7 小形
4	第19図 4	19 15-4	1区 南北トレンチ	磨石	玄武岩	少欠損	長:(11.1) 幅:7.8	厚:6	重:891
5	第19図 5	19 15-5	1区 3層	砥石	流紋岩	破片	長:(7) 幅:5.8	厚:2.5	重:142 研ぎ面4
6	第19図 6	19 15-6	1区 南北トレンチ 4層下層	砥石	流紋岩 (微粒)	完形品	長:5 幅:2.65	厚:1.35	重:30.6 研ぎ面4
7	第22図 1	20 18-1	2区 黒色土	打製石斧	流紋岩	少欠損	長:(6.8) 幅:8.4	厚:2.5	重:158
8	第22図 2	20 18-2	2区 黒色土	打製石斧	流紋岩	破片	長:(6.7) 幅:(6.6)	厚:2.2	重:112
9	第22図 3	20 18-3	2区 黒色土	打製石斧	流紋岩	少欠損	長:(4.2) 幅:6	厚:1.1	重:37.3 小形
10	第22図 4	20 18-4	2区 黒色土	磨製石斧	流紋岩	完形品	長:11 幅:4.7	厚:3.2	重:274
11	第22図 5	20 18-5	2区 黒色粘土層	敲石	流紋岩	少欠損	長:(6.5) 幅:5.9	厚:5.9	重:281
12	第44図 1	26 40-1	7区 黒色土	打製石斧	流紋岩	完形品	長:16 幅:10.6	厚:2.5	重:540
13	第44図 2	26 40-2	7区 黒色土	磨製石斧	流紋岩	少欠損	長:(8.6) 幅:6.7	厚:4.5	重:425
14	第49図 1	26 45-1	8区 8層	打製石斧	流紋岩	少欠損	長:(11.2) 幅:14	厚:2.3	重:381

IV 自然科学・物理学的調査

1. 後谷V遺跡の炭化米特性と稻作起源

和佐野 喜久生

本遺跡は島根県東部の斐川町大字出西地内に所在し、仏経山を中心とした南部の丘陵地帯と斐伊川流域北部の簸川平野に接する小さな谷合の入り口の標高10mに位置する。遺跡は奈良時代から平安時代に稲作を貯蔵した4棟の倉庫跡で、倉庫跡南側のU字溝から須恵器と共に大量の炭化米が出土した。

古代の稲粒に関する調査・報告は、大正12年（1923）の中山平次郎による福岡県八女郡長峯村岩崎遺跡川上の炭化穀の記述に始まるが、計測は大小の2粒が安田貞雄によって行われた。その後、古代稲の形態調査は九州大学の関係者及び佐藤敏也によって行われたが、内容は当該遺跡の稲粒調査の結果を報告し、結論にはジャボニカの稲であることを述べるに終始した。中世の稲粒（米と糊）については、盛永俊太郎（1957）が「日本の稲」に狹・長粒型稲のいくつかの資料を紹介している。

本報告の著者の1人である和佐野（1993、1995）は、北部九州、韓国及び中国の古代稲を接写写真によって精密調査し、粒特性が遺跡間で異なること、及び北部九州の玄界灘沿岸域と筑後川流域の地域間で特徴的な差異がみられることを報告し、日本古代稲の多元起源論を主張した。和佐野（1995）は、日本に稲作が伝わった古代には、異なる国・地方から持ち込まれた起源を異にするいくつかの稲品種が存在し、それらの起源・ルーツは中国大陆に求められるとした。それは、北部九州の玄界灘沿岸域の古代遺跡及び韓国・南西沿岸の松菊里遺跡の短粒と類似した稲が長江下流域の崧澤遺跡（B.C.4000年）及び錢山漾遺跡（B.C.3300年）にみられること、及び筑後川流域の中長粒のそれは江蘇省北部の焦庄遺跡のものによく類似していることによったものである。さらに、松菊里遺跡及び縄文晩期の菜畑遺跡の稲はいずれも、中国大陆から直接海路によって当地域にほぼ同時代に伝播したであろうと推論した。

本報告は、以上のような和佐野（1990、1991、1993、1995）による報告資料・考え方に基づいて、日本最古の稲作遺跡である菜畑遺跡のものを中心に、北部九州及び韓国の古代稲と本遺跡の稲資料を比較し、本遺跡の古代稲の特性及びその稲作起源について解析と考察を行ったものである。

(1) 材 料 及 び 方 法

本報告に供試された炭化米資料（1つの単位集団としてまとめたものを資料と略称する）は、斐川町教育委員会によって1991年から1995年にわたって発掘されたものである。資料の計測は、約100粒を任意抽出し、スケール付きの板におよそ2ミリ深の碁盤目状の条溝を掘り、その交点に並べた米粒の平面（長・幅）及び側面（厚さ）写真を接写撮影し、約4倍大の印画像によって行った。米粒の形

* 佐賀大学農学部

態的特性の項目は、従来からの方法に従って、粒長・粒幅及び粒厚の測定値と、さらに計算によって求めた長／幅比、長・幅積及び長・幅・厚積のそれぞれを粒形、粒人及び粒重の指數値として用いた。

稲粒の接写写真（第50図-1）は、遺構資料の全体像を反映するように、正方形に近いものから大小・長短粒などを選んで、上段右肩から14粒を順次に配列して示した。

(2) 結 果 及 び 考 察

本遺跡の稻粒特性の特徴を理解し、さらにその稻作起源を考察するために、まず比較の対象として、和佐野（1993、1995）による北部九州、韓国及び中国の古代稻に関する報告から、代表的遺跡の粒形質の平均値と標準偏差及び粒特性の分類・記述法（表13、14、15、16）を抜粋し、その概略と解釈の要約を以下に示した。比較の基準遺跡としては、北部九州の14遺跡から6遺跡の7資料（縄文晩期から弥生中期）及び韓国の松菊里遺跡（紀元前5世紀）の8資料（表15、16）を選出した。

① 北部九州及び韓国の古代稻の粒特性と分類法

- 1) 古代稻の粒特性は、稲粒の長・幅・厚・長／幅比それぞれの変異幅を4-6階級に分けて指数化した（表13）。粒形質変異の指数化は、東アジアの古代稻（和佐野、1995）の粒形質について、それぞれの平均値を含む階級値を指數5とし、階級幅を0.6として小方向に3、1、大方向に7、9、10とした。粒形質の指數それぞれに対する階級値は表13に示した通りであるが、指數値の内容の記述表現は、指數5には形質名に中を付し、その両側の指數7、3は長・短、広・狭、厚・薄及び細・円のような熟語的表現に統一した。
- 2) 粒幅及び粒長指數を組み合わせたものを粒型とし、全体をインディカ・タイプとジャボニカ・タイプの2群に分類した（表14）。なお、このような分類（和佐野、1995）は、加藤（1930）による粒型を類別の重要な1形質としたジャボニカ（日本型）・インディカ（インド型）の分類法、及び松尾（1951）によるA型（ジャボニカ）及びC型（インディカ）への分類基準（長／幅比の2.07を境界とした）に準じて、それぞれの分類型に相当するタイプ（類似型）としての2群とした。すなわち、粒型分類でおよそ長／幅比の2を越える粒型のもの、1・1型及び3・1型を除くすべての極狭粒と狭粒、及び中幅粒と広粒の粒長指數が粒幅指數を1ランク以上越える粒型（5・7型、5・9型、7・9型など）ものをインディカ・タイプとし、それ以外のものをジャボニカ・タイプとした。幅広・大粒の陸稲型のものについては、適切な資料がなかったことから、特に分類型は設けなかった。
- 3) 北部九州の古代稻は、粒長が3.9-4.1mmの短粒群と4.5-4.7mmの中長粒群の2群に分かれ、短粒群は玄海灘に面した九州北部沿岸域に限られ、中長粒群は筑後川流域を中心として北部沿岸最西端、北東内陸部及び周防灘沿岸部に広く分布した。
- 4) 同時代の近接した遺跡の資料間でも、粒特性値が顕著に、あるいは統計的に有意に異なるものがみられたことから、北部九州の古代（縄文晩期から弥生時代）には異なるいくつかの稻品種が存在していたと考えた。

- 5) 古代稻が地域で異なる品種群に分かれること、及び遺跡間で米粒特性が明かに異なるもののが存在することは、日本への稻の渡来史を語るものでもある。その理由は、古代の異なる地域に特徴的な異品種が存在していたことは、外部からの品種の伝来・持ち込み（導入育種と言われる）以外には考えられないからである。例えば、短粒品種からその粒長の変異幅を越えて、長粒品種を純系選択（遺伝的に異なる個体・品種の混合集団から特定のものを選び出して品種を育成する）することは不可能である。
- 6) 特徴的に異なる2つの品種群の分布域が、九州北部沿岸域と筑後川流域を中心とした地域に分かれたことは、それぞれの地域に異なる民族によって独自の稻作文化が持参されたことにも連なる。すなわち、縄文晩期から弥生時代にかけて九州北部の複数の地域に、外部の異なる国・地方から何回かの稻と稻作文化の伝来があり、それぞれが異なる地域独自の稻作文化（玄界灘稻作文化圈、有明海稻作文化圏など）を形成しながら日本の稻作地域を拡大していったと考えられる。このことから、九州北部沿岸に上陸した稻作が九州を南下して九州全域に、東伝して本州全土に広まつたとする日本の古代稻一元論には矛盾があり、日本古代稻多元論を主張した。
- 7) 粒形質の遺跡資料内での変異の大きさ・分布形態の違いは、品種の遺伝的固定度（遺伝的分離・異質性・混種の有無・大小を示す）を表すものであり、そのことによって当時の稻作の状況・栽培レベルが推測できる。すなわち、粒形質の変異幅が小さく粒揃いが良いことは、品品種に対する正しい認識があり、進歩した栽培技術と適切な種子の維持・管理が行われていたことを示すものである。ただし、資料の稻粒が1穂からのものではなく、多くのものから任意に抽出されていることが条件になる。
- 8) 粒形質としては粒長・粒幅・粒厚の3つの基本的形質を対象としたが、これらの3形質のうち、形態形成に長期間を要する粒厚が外部環境の影響を最も受けやすくなることから、粒厚平均値の大小によって当時の地域環境や栽培条件などの違いが推定できるとした。しかし、ジャボニカ（日本型）とインディカ（インド型）では、前者が粒厚が厚いという品種的（遺伝的）な違いは含まれる。
- 9) 粒特性の類似性から品種の異同を論ずることについては、粒特性が顕著に違うものを異品種と判断することには問題はないが、同じような粒特性を有するものを同一品種であると断定することはできない。しかし、類似した粒特性をもつものが同じ品種である（あるいは共通祖先をもつ）確率は存在し、少なくともその確率は、粒特性の異なる品種の場合よりもはるかに高いことは当然である。
- 10) 粒型分類については、菜畑遺跡のものを一例として次に示す。
- 菜畑遺跡（縄文晩期）：粒幅は狭粒（15%）を含む中幅粒（80%）で、粒長は短粒（57%）を主として、極短粒（22%）と中長粒（22%）が含まれる。粒型は、5・3型（47%）を主として、他に5・5型（19%）と5・1型（14%）などを含むジャボニカ・タイプ93%の中幅の短粒種である。
- ② 後谷V遺跡の古代稻の粒特性

本遺跡の炭化米資料（V-1, 2, 5, 7, 10）の粒特性（表17, 18）は、上述の松菊里遺跡及び北部九州の6遺跡・7資料の粒特性（表15, 16）との比較を行った。なお、例えば菜畑縄文型（縄文時代）の粒型特徴を示すものは菜畑縄文型などと呼ぶことにした。

本遺跡の粒形質の平均値は、全体的には菜畑縄文型と立岩型の中間的特性を示したが、V-2とV-10は菜畑縄文型に、V-1とV-5は立岩型にそれぞれ類似した。しかし、V-7はかなり狭粒であり、両粒型とはやや異なるものであった。

- 1) 菜畑縄文型は、中幅・短粒の5・3型（47%）を中心に中幅・極短の5・1型（14%）と中幅・中長粒の5・5型（19%）を含み、さらに狭粒15%と広粒6%がみられる。ジャボニカ・タイプ93%の中幅・短粒種で、多型的粒型変異を示す。この粒型にはV-2とV-10が類似したが、両者はいずれも菜畑縄文型に比べて粒型変異が大きくより多様性を示す。粒型分布をみると、V-2とV-10には菜畑遺跡にはみられなかった中幅・長粒の5・7型（5-6%）が含まれ、狭・短粒の3・3型（10-11%）が多く、また、インディカ・タイプの粒型（18-20%）をもかなり含まれる。このような多型的粒型変異から、V-2とV-10は、短粒品種に立岩型に類似した中長粒品種（米粒写真V2, 及びV10の①, ②, ③, ④, ⑤）が混入したような混合品種と考えられる。
- 2) 立岩型は、ほとんどが中幅・中長粒の5・5型（62%）と中幅・短粒の5・3型（34%）より成る粒揃いの良いものである。この粒型にはV-1とV-5が類似するが、両者はいずれも5・3型と5・5型を中心とした多型的粒型変異を示す。この両資料は、前資料のV-2及びV-10に比べて中長粒以上の長粒（34%と48%）がより多く含まれ、前資料と同様に混合品種と考えられるが、短粒品種に中長粒品種がより多く混入したものであろう。米粒写真（第50図-2）では、それぞれの上段に配列したものがほぼ中長粒型に属するものである。
- 5) 菜畑縄文型と立岩型の中間的な大きさで狭・短粒を多く含むV-7は、両品種の混合集団から島根県の山陰型気候に適応したものが選択されて、新しい地方品種に分化した可能性が高いが、あるいは、全く北部九州とは別系統の起源をもつものかも知れない。今後の周辺域の古代穀の調査が必要であろう。
- 6) 粒長／幅比は1.74-1.81でやや大きく、インディカ・タイプの粒型を20%近く含むやや狭粒型の傾向を示した。粒厚は1.64-1.78mmで、立岩遺跡のものと同程度の薄粒であった。
- 7) 粒型変異が大きく粒厚がやや薄粒であったことから、この地方の中世の稻の栽培条件・技術はまだ十分に改良されたものではなかったと考えられる。
- 8) 本遺跡の5資料の粒特性が、全体的傾向としては、より大きな多型的粒型変異を示し、短粒の菜畑遺跡のものと遠賀川上流に所在する立岩遺跡の狭粒性の中長粒種との中間的なものであったことは、本遺跡の稲作起源を示唆するものと考えられる。すなわち、日本の稲作が北部九州に始まったとするならば、本遺跡が所在する島根県斐川町一帯には、玄海灘に面する九州北岸から響灘を経て日本海を沿岸沿いに海路によって、または沿岸沿いの陸路によって古代稲作が伝わったことは十分に考えられる。

また、立岩遺跡が玄海灘と智瀬の間に河口を開く遠賀川の上流に所在し、さらに立岩遺跡の古代稻に類似するものが、峠を1つ越えた鳥栖市の安永田遺跡と八女市の岩崎遺跡にみられるることは、古代の稻作起源と地域間交流を考える上で甚だ興味あることである。

もちろん、本遺跡が所在する斐川町が日本海に北流する斐伊川流域の篠川平野北部に位置することも、上記のような稻作起源には重要な要素になるものであろう。

9) 以上のように、本地域への古代稻作の最初の伝播は九州北部沿岸域からの日本海沿いの東伝であった可能性が高いが、九州からの伝播・普及の過程のなかで、時代とともに产地の異なる品種が持ち込まれて混合して地方特有の混合品種になったものと、人為的選択と品種の地域的適応によって新たな地方品種が誕生したものとが混在していたと考えられる。

(炭化米資料の分析にあたっては、金策・基氏と六道年弘氏に大変お世話になった。)

(3) 要 約

- 1) 奈良時代から平安時代の後谷V遺跡（島根県斐川町）から出土した炭化米の5資料(V-1, 2, 5, 7, 10)について、その粒形質の接写写真による精密調査を行い、北部九州及び韓国 の7遺跡・8資料の粒特性を基準として、本遺跡の稻粒特性を比較し、本遺跡の稻の系譜と稻作起源についての考察を行った。
- 2) 本遺跡の炭化米の5資料は、唐津市の葉畠遺跡のものと遠賀川上流の立岩遺跡のものの中間的な粒特性を有し、より大きな多型的粒型変異を示した。このことから、本遺跡の稻作は両遺跡から伝播したが、稻品種は両遺跡の古代稻品種が混合した可能性が十分に考えられるとした。さらに、稻の伝播ルートとして、海岸沿いの海路と陸路の可能性について論じた。

参 考 文 献

1. 稲作史研究会 1954. 出土古代米. 盛永俊太郎監修. 農林協会.
2. Kato,S. 1930. On the affinity of the cultivated varieties of the rice plants, *Oryza sativa* L. J.Dep.Agr., Kyushu Imp.Univ. 2: 241-276.
3. 松尾孝則 1952. 栽培稻に関する種生息態的研究. 農技研報 D3: 1-111.
4. 盛永俊太郎 1957. 日本の稻. 養賢堂. 東京.
5. 中山平次郎 1923. 烧米を出せる窓穴址. 考古学雑誌 11 (1).
6. 佐藤敬也 1971. 日本の古代米. 雄山閣. 考古学選書1. 東京. 346pp.
7. 和佐野喜久生 1990. 江南行. 日本稻のルーツを求めて. 稻・その源流への道. 29-33. 東アジア文化交流史研究会.
8. 和佐野喜久生 1992. 稲粒からみた日本稻作の歴史. 考古ジャーナル 337.: 12-18.
9. 和佐野喜久生 1992. 鴨都波遺跡の炭化稻穀粒. 鴨都波12次発報・奈良県御所市教育委員会 70-78.
10. 和佐野喜久生 1993. 九州北部古代遺跡の炭化米の粒特性に関する考古・遺伝学的研究. 遺伝学的研究. 遺伝学雑誌 43: 589-602.
11. 和佐野喜久生 1995. 稲作の江南起源説. 講座・文明と環境 第3巻 農耕と文明. 朝倉書店. 東京. 143-167.
12. 和佐野喜久生 1995. 東アジアの古代稻と稻作起源. 東アジアの稻作起源と古代稻作文化. 文部省科学研究費による国際学術研究・報告・論文集(和佐野喜久生・研究代表・編集). 1-52, 331pp.
13. 安田貞雄 1927. 日本古米の米. 農業及園芸 2: 981-982.

表13 稲粒(米、穀)特性の指標、指標別階級値及び特性の表現法(和佐野、1995)

米粒特性	特性指標(階級値)					
	1	3	5	7	9	10
粒長(mm)	(3.5)	(4.1)	(4.7)	(5.3)	(5.9)	(6.5)
	極短粒	短粒	中長粒	長粒	極長粒	極大長粒
粒幅(mm)	(1.3)	(1.9)	(2.5)	(3.1)	(3.7)	—
	極狭粒	狹粒	中幅粒	広粒	極広粒	—
粒厚(mm)	(0.7)	(1.3)	(1.9)	(2.5)	(3.1)	—
	極薄粒	薄粒	中厚粒	厚粒	極厚粒	—
長/幅比	—	(1.1)	(1.7)	(2.3)	(2.9)	—
	円粒	中形粒	細粒	極細粒	—	—
穀粒特性	1	3	5	7	9	10
粒長(mm)	(5.3)	(5.9)	(6.5)	(7.1)	(7.7)	(8.3)
	極短粒	短粒	中長粒	長粒	極長粒	極大長粒
粒幅(mm)	(1.9)	(2.5)	(3.1)	(3.7)	(4.3)	—
	極狭粒	狹粒	中幅粒	広粒	極広粒	—
粒厚(mm)	(1.3)	(1.9)	(2.5)	(3.1)	(3.7)	—
	極薄粒	薄粒	中厚粒	厚粒	極厚粒	—
長/幅比	—	(1.1)	(1.7)	(2.3)	(2.9)	—
	円粒	中形粒	細粒	極細粒	—	—

* : 4.4mm ≤ 中長粒 (4.7mm) < 5.0mm, 2.2mm ≤ 中幅粒 (2.5mm) < 2.8mm
 1.6mm ≤ 中厚粒 (1.9mm) < 2.2mm, 1.4mm ≤ 中形粒 (1.7mm) < 2.0mm

表14 稲粒(米、穀)の粒長・粒幅指標による粒型分類(和佐野、1995)

	粒長指數						粒幅表現
	1	3	5	7	9	10	
粒幅指數	1 3	1・1型 3・1型 J*	1・3型 3・3型	—	—	—	極狭粒 狭粒
	5 7 9	5・1型 J 7・1型 J —	5・3型 J 7・3型 J —	3・5型 5・5型 J 7・5型 J	3・7型 5・7型 7・7型 J	3・9型 5・9型 7・9型	
粒長表現	極短粒	短粒	中長粒	長粒	極長粒	極大長粒	—

* J : 従来の分類法による長/幅比・2.0以下のジャボニカ・タイプにはほぼ相当する。

** - : 本報告の資料中にはみられなかった。

表15 北部九州及び韓國の比較・対照遺跡の炭化米粒特性(和佐野、1995)

遺跡名	松菊里	英畑	英畑	板付	瑞穂	立岩	川の上	古野ヶ里
時代	B.C. 5	縄文晩期	弥生前期	弥生前期	弥生前期	弥生中期	弥生中期	弥生中期
所在地	忠清南道	唐津市	唐津市	福岡市	福岡市	福岡市	飯塚市	佐賀県
長(mm)	4.02	4.11	3.93	4.19	4.17	4.46	4.58	4.60
S.D.*	0.37	0.35	0.28	0.24	0.24	0.21	0.27	0.19
幅(mm)	2.34	2.45	2.38	2.64	2.77	2.49	2.68	2.83
S.D.	0.27	0.23	0.20	0.18	0.19	0.14	0.17	0.13
厚(mm)	1.59	1.93	1.95	1.80	1.86	1.74	2.01	1.98
S.D.	0.23	0.22	0.24	0.13	0.15	0.12	0.15	0.13
長/幅比	1.73	1.69	1.66	1.59	1.51	1.80	1.71	1.63
S.D.	0.12	0.17	0.12	0.11	0.11	0.13	0.14	0.10
長幅積	9.5	10.1	9.4	11.1	11.6	11.1	12.3	13.0
S.D.	1.71	1.5	1.29	1.14	1.20	0.80	1.12	0.83
長幅厚積	15.5	19.6	18.5	19.9	21.6	19.3	24.6	25.8
S.D.	4.08	4.24	4.25	2.82	3.33	2.16	3.30	2.60
調査粒数	122	155	38	120	100	100	100	180

* S.D. : 土標準偏差

表16 北部九州及び韓国との比較・対照遺跡の炭化米粒の粒型分布表(和佐野、1995)

		松菊里 (122粒)					計 (%)		瑞穂 (100粒)					計 (%)	
		1	3	5	7	9			1	3	5	7	9		
粒幅指 数	1	3							3						
	3	14	6						20	1					
	5		6	60	13				79	4	45	8			
	7									35	7				
	9														
	計 (%)	23	66	13					102	5	80	15			
		菜畑糞文 (155粒)							立岩 (99粒)						
	1														
	3	8	5	2					15	1					
粒幅指 数	5	14	47	19					80	34	62				
	7		5	1					6	1	1				
	9														
	計 (%)	22	57	22					101		36	63			
		菜畑弥生 (38粒)							川の上 (100粒)						
	1														
	3	13	3						16						
	5	18	53	11					82	21	54	3			
	7		3						3	2	21				
計 (%)	9														
	31	59	11						101	23	75	3			
		板付 (120粒)							吉野ヶ里 (180粒)						
	1														
	3														
	5	5	58	15					78	6	33	1			
	7		13	8					21	7	54				
	9														
	計 (%)	5	71	23					99	13	87	1			

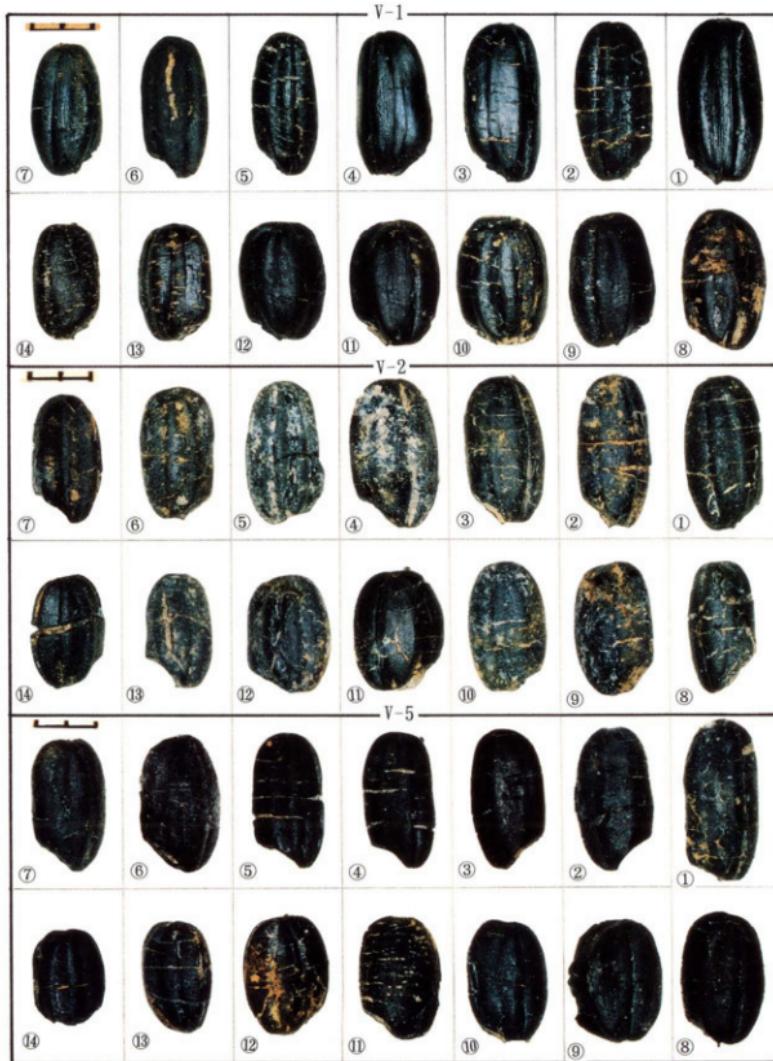
表17 後谷V遺跡の炭化米粒特性表

充掘 時 代	V-1	V-2	V-5	V-7	V-10
	奈良平安	奈良平安	奈良平安	奈良平安	奈良平安
No.	1	2	3	4	5
長 (mm)	4.30	4.23	4.40	4.27	4.18
S.D.*	0.439	0.379	0.378	0.383	0.402
幅 (mm)	2.47	2.43	2.47	2.37	2.41
S.D.	0.228	0.239	0.230	0.178	0.217
厚 (mm)	1.74	1.71	1.78	1.64	1.70
S.D.	0.167	0.165	0.168	0.126	0.171
長/幅比	1.75	1.76	1.80	1.81	1.74
S.D.	0.234	0.233	0.248	0.177	0.197
長幅積	10.61	10.26	10.87	10.11	10.10
S.D.	1.45	1.35	1.31	1.33	1.47
長幅厚積	18.66	17.65	19.48	16.69	17.24
S.D.	3.66	3.51	3.57	2.94	3.60
調査粒数	100	90	102	106	114

*S.D. : ± 標準偏差

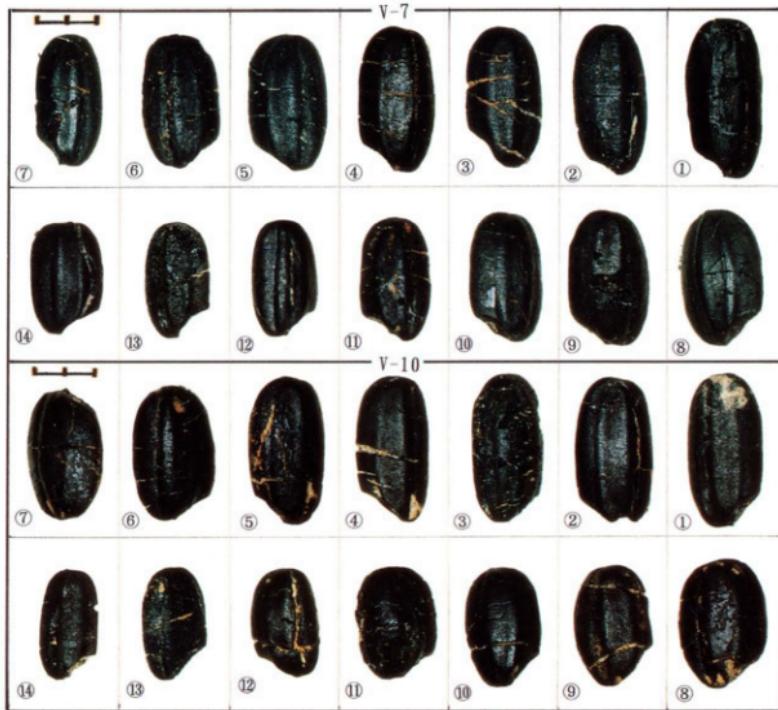
表18 後谷V遺跡の炭化米の粒型分布表

	V-1 (100粒)					計 (%)	V-7 (106粒)					計 (%)
	1	3	5	7	9		1	3	5	7	9	
粒 幅 指 数 9	1	5	2	3		10	2	16	4			22
	3	6	45	25	5	81	6	39	27	5		77
	5	1	7	1		9	1	1				2
	7											
	9											
計 (%)	12	54	29	5		100	8	56	32	5		101
	V-2 (90粒)						V-10 (114粒)					
粒 幅 指 数 9	1	3	10	2		15	5	11	4			20
	3	9	51	12	6	78	7	50	15	5		77
	5	6	1			7	4					4
	7											
	9											
計 (%)	12	67	15	6		100	12	65	19	5		101
	V-5 (102粒)											
粒 幅 指 数 9	1											
	3		4	5		9						
	5	5	39	34	7	85						
	7		4	2		6						
	9											
計 (%)	5	47	41	7		100						



第50図-1. 遺構V-1, 2, 5の炭化米粒写真

縮尺1目盛：1ミリ



第50図-2. 遺構V-7, 10の炭化米粒写真

2. 後谷V遺跡出土炭化米の¹⁴C年代測定結果について

柴田せつ子・川野瑛子

(1) 測定試料

① 後谷V遺跡 炭化米

(2) 測定原理及び測定方法

試料の年代はメタノール・液シン法により測定した。使用機種はバッカード社製2260XL型を用いた。

(3) 試料調整

試料は、TN-塩酸処理を行い、管状電気炉を用い窒素気流中で600°C、6時間処理した炭化物を、反応に供した。炭化物試料からメタノールの合成は燃焼によりCO₂とし、このCO₂をLiAlH₄と反応させメタノールを合成した。

(4) 年代測定結果

試料名	当方コード	年代値 B. P.	測定時間(分)
後谷V遺跡	OR-106	1330±40	4000
炭化米			

A₀としてはNISTシュウ酸(SRM4990C)の実測値から算出した値(13.404±0.036dpm/gC)を用いた。

また、年代値における誤差は液シン測定におけるものみとした(誤差は1シグマで表示)。

(5) 曆年代(較正年代)

Libbyによって確立された¹⁴C年代測定法は、近年詳細にみると宇宙線の強度変化による¹⁴C生成量の変動や生物体内に取り込む炭素の同位体分別などによりその前提条件が完全には満たされていないことが報告されている。アメリカ、ドイツ、アイルランド等において、年輪およびサンゴを10~20年単位で精度よく測定することによって、現在から約2万年前に遡って過去の大気中の¹⁴C濃度が明らかにされている。最近、これらの測定データを用いて、¹⁴C年代から曆年代を求める較正曲線計算ソフトが開発された。(CALIB rev 3.03, Stuiver, M. and Reimer, P. J., 1993, Radiocarbon, 35, p.215-230)。

* 大阪府立大学先端科学研究所アイソトープ総合研究センター

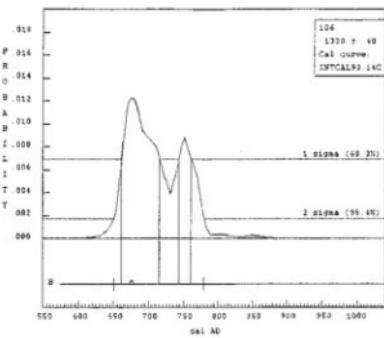
また、¹⁴C年代値には必ず測定誤差が伴い、その相対誤差1%は80年となる。誤差は、通常1標準誤差(1シグマ)で表示、繰り返し測定を行った場合測定値が誤差の範囲に入るものが全測定の68%であることを意味する。2標準誤差(2シグマ)をとる場合は誤差の範囲は2倍になるが95%がその範囲に入る。最後に前述のCALIB rev. 3.03の校正曲線を用いて¹⁴C年代から曆年代(範囲と確率)を算出した。

表19および図51、図52に測定結果を示す。

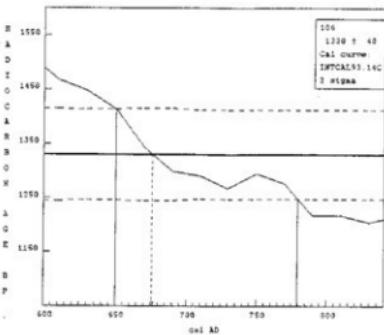
表19

% area enclosed	Calibration file (s): INTCAL93.14C	
	cal AD age ranges	relative area under probability distribution
68.3 (1シグマ)	cal AD 661-715 743-761	.79 .21
95.4 (2シグマ)	cal AD 650-780	1.00

第51図



第52図



3. 後谷V遺跡発掘調査にかかる電気探査

浜 崎 晃

(1) はじめに

平成4年から後谷V遺跡発掘調査に先立ち、地盤の堆積状況、礫石、住居跡等の概略を事前に把握することを目的とした高密度電気探査を行った。

その結果得られたデーターを遺跡発掘の参考資料とした。

これまで行った後谷V遺跡に関する高密度電気探査結果を以下にまとめる。

(2) 高密度電気探査

電気探査とは地盤を構成している土、地下水、岩石の電気的抵抗の差異に着目して人工または自然に発生した電解を地表で測定し、そのデーターから地下構造、特に断層・破碎帯及び地下水脈を推定する探査方法である。

一般的に使用され、今回も使用したのは人工的に地盤に電気を流し、比抵抗を測定する比抵抗法である。

地盤の比抵抗を測定するには2本の電位電極と更に2本の電流電極を使う。これらの電極の配置からいろいろな測定方法が考え出され、中でも代表的なものにWenner法があり一般的によく使用されている方法である。

その電極配置及び測定方法を第53図に示す。

また、電流電極C₁、C₂間に流れる電流をI、電位電極P₁、P₂間の電位をVとするとその時の大地抵抗は次式により求まる。

$$\rho_s = 2 \pi a \frac{V}{I} \quad (a: \text{電極間隔})$$

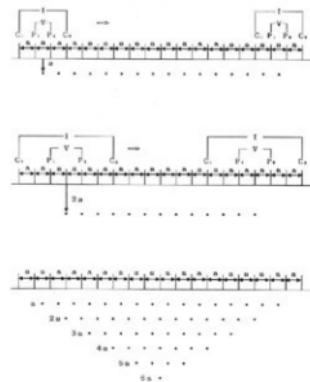
この測定によって得られた見掛け比抵抗値によって比抵抗図及び比抵抗区分図を作成し、地下内部構造を推定する。

(3) 調査結果と解釈

第54図 調査地平面図に示すように4地区で高密度電気探査を行った。

各区毎に代表的な比抵抗図を示し、結果の解釈をまとめた。

* 株日本海技術コンサルタント



第53図 測定結果の表示



第54図 調査地平面図

・ A区

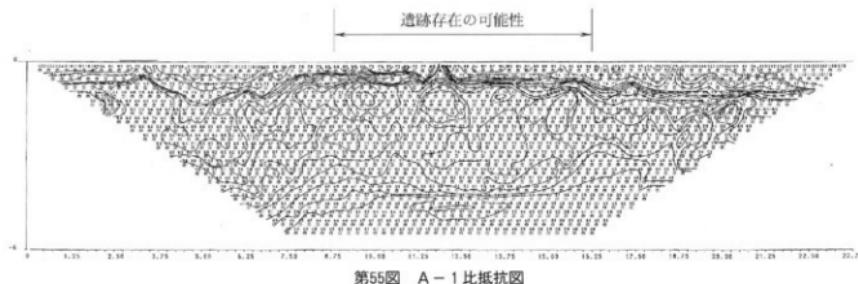
当区においては道路を挟み南北方向に2本の電気探査を行った。

これら2本の電気探査結果から遺跡存在の可能性がある反応が見られたのは図中に示すA-1測線である。

A-1測線について比抵抗図を示す(第55図)。

比抵抗図に示すように測線中央付近に見掛け比抵抗値が $50\Omega\cdot m$ 以下となっており、比抵抗等值線がリング状になっている。

通常、礎石等周りの地盤より比抵抗値が高い場合、リング状の比抵抗値の高まりが見られるが今回は逆に低くなっている。しかし、周りの地盤とは比抵抗値の違いが見られることから何らかの遺跡が存在している可能性がある。



第55図 A-1比抵抗図

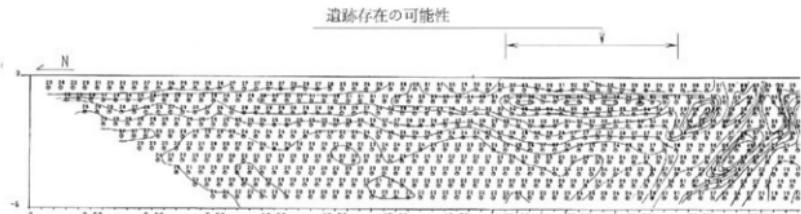
・ B区

当区においては調査地平面図に示すように南北方向に1本の電気探査を行った。

この測線について比抵抗図を示す(第56図)。

図中に示すように見掛け比抵抗値の高まり($35\Omega\cdot m$ 以上)がリング状に分布しており、周りの地盤との違いが見られる。

この事から、図に示す位置での遺跡存在の可能性があげられる。



第56図 B-1比抵抗図

• C区

当区においては南北方向に4本、東西方向に2本の電気探査を行った。

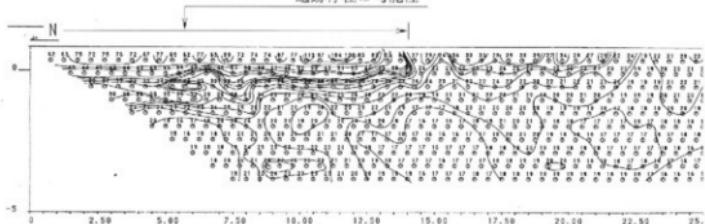
これらの中で代表的な測線について比抵抗図を示す（第57図）。

比抵抗図に示すように起点（N方向）側から約15m付近までの表層部の比抵抗値が高く、凹状の形状を示している。この範囲外では全体的に比抵抗値が $20\Omega \cdot m$ 前後の一樣な地盤であると考えられる。

この事から遺跡存在の可能性がある位置としては起点側から約15m付近までの地盤内であると考えられる。しかし、現地においてはこの比抵抗値が高くなっている位置は窓となっている事から表層部の比抵抗値が高くなることが考えられるため、比抵抗図に示すような比抵抗の高まりはその影響である可能性もある。

何れにしても遺跡存在の可能性があるとしてこの地点をあげる。

遺跡存在の可能性



第57図 C-3 比抵抗図

• D区

当区においては調査地平面図に示すように南北方向に4本の電気探査を行った。

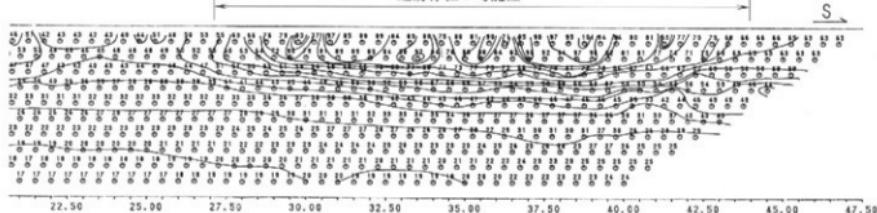
これらの中で代表的な測線について比抵抗図を示す（第58図）。

比抵抗図に示すように一見きれいな層状を示しているが起点側（N方向）より27m付近で比抵抗等値線が密になり、周りに比較して比抵抗値が高くなっている。

この事はその付近の地盤の状況が周囲とは異なる事を示している。

ここでこの地区の南側で行われていた発掘現場を見るとあまり大きくなり礎石が数多く発掘されており、その状況が一種の砂疊層と考えることができる。

遺跡存在の可能性



第58図 D-1 比抵抗図

この場合リング状の高比抵抗域が現れずに比抵抗等値線が密になる変化が見られると考えられる。

したがって、比抵抗図に見られる変化は遺跡存在の可能性があると考えられる。

(4) ま と め

以上のように各地区の代表的な測線について比抵抗図を示しその結果を簡単にまとめた。

当初、この電気探査の目的としては礎石の存在箇所の特定であった。しかし、電気探査を行った結果、礎石の存在箇所の特定は非常に困難であることがわかった。

電気探査ある程度把握する事ができるのは地下的堆積構造であり、比抵抗等値線の変化から遺跡存在の可能性がある地層、範囲を推定する事ができると考える。

したがって、発掘調査に入る前に電気探査を行い、遺跡存在のある範囲をある程度推定し、そのデーターを基に発掘調査ができると考える。

特に調査地のように地表の大部分が水田となっており地下の状態が全く推定できない場合には遺跡発掘の事前資料となるのではないだろうか。

V 出雲国風土記の正倉

関 和 彦

1. はじめに

斐川町後谷V遺跡は、1991年度の県道本次直江停車場線改良事業の事前調査で確認され、翌年以降の本格的調査で、その姿を現した。確認された大形倉庫群は、立地の上からも、周囲の歴史的環境からみても、当該地域における重要な遺構と考えられた。当遺跡の所在地は、前々から出雲郡家の推定地とされていた場所であり、発見された大形倉庫群は出雲郡家付設の正倉として認定されるに至った⁽¹⁾。

当遺跡の所在地は、『出雲国風土記』によれば、出雲郡出雲郷に属すことが明らかであり、その『出雲国風土記』には数少ない奈良時代の正倉を語る記事が集積しており、考古学・文献古代史の両面から考察が可能な遺跡である。それ故、古代の地域社会における郡レベルでの律令行政の浸透、その具体的あり方を考察する上で貴重な事実を提供すると思われる。

この小論は、文献史学の立場から、『出雲国風土記』の正倉記事を検討し、発掘で明らかになった出雲郡家正倉像に幾つかの補足的な知見を提供することを目指し、ひいては奈良時代の正倉のあり方について一言することを目的とする。

2. 『出雲国風土記』の正倉記事

本論が検討対象とする『出雲国風土記』にみえる正倉記事を示そう⁽²⁾。

〔意宇郡条〕

①山國郷 郡家の東南のかた卅二里二百卅歩なり。布都努志命の國巡りましし時、此處に來まして詔りたまひしく、「是の土は、止まなくに見まく欲し」と詔りたまひき。故、山國といふ。即ち正倉あり。

②舍人郷 郡家の正東廿六里なり。志貴鳩宮御宇天皇の御世、倉舍人君等が祖、日置臣志毗、大舍人供へ奉りき。即ち是は志毗が居める所なり。故、舍人といふ。即ち正倉あり。

③山代郷 郡家の西北のかた三里一百廿歩なり。所造天下大神、大穴持命の御子、山代日子命坐す。故、山代といふ。即ち正倉あり。

* 共立女子第二中・高等学校

④拜志郷 郡家の正西廿一里二百一十歩なり。所造天下大神命、越の八口を半けむとして幸しし時、此處の樹林茂り盛りき。その時、詔りたまひしく、「吾が御心の波夜志」と詔りたまひき。故、林といふ。(神龜二年、字を拜志と改む。) 即ち正倉あり。

⑤賀茂神戸 郡家の東南のかた卅四里なり。所造天大神命の御子、阿邇須枳高日子命、葛城賀茂社に坐す。此の神の神戸なり。故、鴉といふ。(神龜二年、字を賀茂と改む。) 即ち正倉あり。

〔鳩根郡条〕

⑥手染郷 郡家の正東一十里二百六十歩なり。所造天下大神命、詔りたまひしく、「此の國は、丁寧に造れる國なり」と詔りたまひて、故、丁寧と負せ給まひき。しかるに、今の人猶誤りて手染郷と謂へるのみ。即ち正倉あり。

〔出雲郡条〕

⑦漆沼郷 郡家の正東五里二百七十歩なり。神魂命の御子、天津枳比佐可美高日子命の御名を、又、齒枕志都沼植といひき。此の神、郷の中に坐す。故、志力沼といふ。(神龜二年、字を漆沼と改む。) 即ち正倉あり。

⑧美談郷 郡家の正北九里二百畠歩なり。所造天下大神命の御子、和加布都努志命、天地の初めて判れし後、天の御領田の長仕へ奉りましき。即ち、彼の神、郷の中に坐す。故、一太三といふ。(神龜二年、字を美談と改む。) 即ち正倉あり。

〔飯石郡条〕

⑨三屋郷 郡家の東北のかた廿四里なり。所造天下大神の御門、即ち此處にあり。故、三刀矢といふ。(神龜二年、字を三屋と改む。) 即ち正倉あり。

⑩須佐郷 郡家の正西一十九里なり。神須佐能袁命、詔りたまひしく、「此の國は小さき國なれども、國處なり。故、我が御名は石木には著けじ」と詔りたまひて、即ち、己が命の御魂を鎮め置き給ひき。然して即ち、人須佐田・小須佐山を定め給ひき。故、須佐といふ。即ち正倉あり。

⑪來嶋郷 郡家の正南卅六里なり。伎自麻都美命、坐す。故、支自眞といふ。(神龜二年、字を來嶋と改む。) 即ち正倉あり。

〔仁多郡条〕

⑫三澤郷 郡家の西南のかた廿五里なり。大神大穴持命の御子、阿邇須枳高日子命、御須髪八握に生ふるまで、夜晝哭きまして、み辭通はざりき。その時、御祖の命、御子を船に乗せて、八十鶴を

率て巡りてうらがし給へども、猶哭き止みまさざりき。大神、夢に願ぎ給ひしく、「御子の哭く山を告らせ」と夢に願ぎませば、その夜、御子み辭通ふと夢見ましき。則ち、寤めて問ひ給へば、その時「御澤」と申したまひき。その時、「何處を然いふ」と問ひ給へば、即て御祖の前を立ち去り出でまして、右川を度り、坂の上に至り留まり、「是處」と申したまひき。その時、其の澤の水活れ出でて、御身沐浴みましき。故、國造、神古事奏しに朝廷に參向ふ時、其の水活れ出でて、用ゐ初むるなり。此に依りて、今も産める姫は、彼の村の稻を食はず、若し食ふ者あらば、生るる子已に云はざるなり。故、二澤といふ。即ち正倉あり。

⑩横田郷 郡家の東南のかた廿一里なり。古者の傳へていへらく、「郷の中に田あり。四段ばかりなり。形卵か長し。遂に山に依りて、故、横田といふ。即ち正倉あり。

⑪飯石郡の塙なる漆仁川邊に通るは、廿八里なり。即ち、川邊に藥湯あり。一たび浴すれば、則ち身體程平らぎ、再び灌げば、則ち萬の病消除ゆ。男も女も、老いたるも少きも、夜晝息まず、駒驛なり往来ひて、駿を得ずといふことなし。故、俗人號けて藥湯といふ。即ち正倉あり。

[大原郡条]

⑫屋代郷 郡家の正北一十里一百一十六里なり。所造天人神の塙立てて射たまひし處なり。故、矢代といふ。(神龜三年、字を屋代と改む。) 即ち正倉あり。

この15に及ぶ正倉記事は幾つかの問題を提起している。その点に関しては、すでに加藤義成氏が「律令出雲の正倉」において3点指摘している^⑯。

- 1 出雲国では郡家の近くに正倉を置いた例があるだろうか。
- 2 出雲国以外でも郷庁の近くに正倉を置いた例があるであろうか。
- 3 出雲国の正倉設置には特別な事情があったのであろうか。

『出雲國風土記』の正倉記事を通覧していくと、正倉は確かに郷に設置され、郡家にはその記述はみえない。加藤氏の1の疑問が起こる所以である。今回の後谷V遺跡は、『出雲國風土記』が語らない出雲郡家付設の正倉の存在を示す貴重な事例である。

『出雲國風土記』は秋鹿・櫛縫・神門郡の正倉について言及しない。しかし、それは「即、その三郡に正倉がなかったことを意味しない」ということが、後谷V遺跡で証明されたのである。秋鹿・櫛縫郡はとともに「郷からなる「下郡（戸令定郡条・四里以上を下郡と為す）」であり、後谷V遺跡の出雲郡正倉のように郡家に正倉が付設され、事足りていたのであろう。当然、神門郡の場合も8郷余の「中郡（戸令定郡条・八里以上を中郡と為す）」であり、神門郡家に正倉が付設されていたものと考えられる。

3. 『陸奥国風土記』逸文の正倉

古代出雲の正倉を考える上で、後谷V遺跡とともに重要なのが松江市山代町の団原遺跡である。それは史料③の山代郷の正倉跡とされている。『出雲国風土記』によれば、山代郷の「郷家」は意宇郡家の「西北のかた三里一百廿步」、すなわち西北1.8キロの地点であり、団原遺跡は、その「郷家」の近くに位置し、郷家近接設置の正倉の具体例として注目されている。

郷に置かれた正倉を理解する上で重要な史料は、延暦14（795）年7月15日の太政官符である⁽⁴⁾。

諸国、郡の倉を建てるに元一倉を置く。百姓の居、郡を去る際遠にして、山川を跋渉し、納貢に劳り。倉舎を以て比近に加ふべし。堺宇相接し、一倉失火せば、百倉共に焼け、其の弊言念ず。公私に損あり。すべからく郷毎に一院を置くべし。以て百姓済われ、兼ねて火祥を絶つ。

これによれば正倉は郡家に唯一置かれ、その為、貢納の「百姓」に劳が多く、また火災の類焼での损失も多かったことがうかがえる。そこで太政官は、公私2点から郷毎に正倉を作れという布告を出すのである。

しかし、郷に置かれた正倉は明らかに『出雲国風土記』に確認できるのであり、事情により、同様の施策はすでにされていたのであろう。それは出雲国に限定されるものではなく、全国的な現象であったと思われる。

ここで注目されるのが『陸奥国風土記』逸文の八槻郷の記事である。この逸文は福島県東白河郡棚倉町八槻の都々古別神社別当大善院に伝わるものであり、奈良時代の古『風土記』と考えられるものである⁽⁵⁾。

陸奥國風土記に曰はく、八槻と名づくる所以は、巻向日代宮御宇天皇の時、日本武尊、東夷を征伐ちて、此の地に到りまし、八日の鳴鏑を以て、賊を射て斃したまひき。其の矢の落下ちし處を矢着と云ふ。即ち正倉あり。（神龜三年、字を八槻と改む。）古老的の傳へて云へらく（以下、略）。

以下、古老伝承がつづくが、注目したいのは「即ち正倉あり。（神龜三年、字を八槻と改む。）」の部分である。神龜3年の郷名改名は『出雲国風土記』総記の「其の郷の名の字は、神龜3年の民部省の口宣を被りて、改めぬ」に対応する表記である。加藤義成氏は『出雲国風土記』の神龜3年民部省の口宣に言及し、「こんな口宣が伝達されたことも他書に全く見えない」とするが⁽⁶⁾、『陸奥國風土記』逸文は、その存在を示す貴重な史料と評価できよう。

またその神龜3年の郷名改名と同時に本論が課題とする「即ち正倉あり」の記述がみえる点も『出雲国風土記』に対応し、興味深いところである。

『陸奥國風土記』の成立年代は不明であるが、秋本古郎氏は、八槻郷が磐城「国」内であること

をおさえ「磐城国は養老二年に初めて置かれたが延喜式・和名抄では陸奥国に属している。本条は養老以前磐城国分置以前か、再び陸奥国との合併後か明らかでない」とする⁽⁷⁾。

神亀3(726)年の郷名改名記事の存在は、当然のこととして養老2(718)年以前『陸奥国風土記』成立説は消えることになろう。磐城国の陸奥国再統合が神亀元年頃とする見解によるならば、その成立は、『出雲国風土記』の成立時期前後に求めることができよう。両『風土記』の記述の類似性がそれを暗示していると考える。

八槻郷は律令制下においては陸奥国白河郡に属していた。その白河郡家址は西白河郡泉崎村の関和久遺跡とされており、郡家址の南側には3棟の正倉の存在を示す溝に囲まれた建物の柱穴が確認されている。白河郡家付設の正倉院である⁽⁸⁾。延暦14年の先の太政官符によれば、白河郡には郡の正倉院が「一元」として存在していたはずであるが、それとは別に白河郡八槻郷に正倉が設置されていたのである。

後谷V遺跡の出雲郡家付設の正倉と史料⑦の漆沼郷・⑧の美談郷の正倉の関係を、そこにみることができよう。陸奥・山云と東西に離れた2地域で確認されるこの現象を2地域の特殊性と規定することは出来ないのである。郡家以外に正倉が置かれたのは、その数は別として、『出雲国風土記』にみるように一般的であった、と考えられる。

4. 正倉記事の検討——「即ち」考——

郷所在の正倉は、山代郷正倉の例などから「郷家」の近くに設けられていると考えられている⁽⁹⁾。しかし、史料⑨の正倉は、飯石郡堺の漆川邊の薬湯付近にあったとする。1例とはいえ、貴重な知見である。その点をふまると、他の13例の正倉がすべて郷家の近くであったという根拠は何もないといえよう。

ここで「正倉は郷家付設」という認識を植えつける言葉、「即ち」に注目してみたい。『出雲国風土記』の正倉はすべて、地名起源伝承の後に「即ち正倉あり」という形式でその存在が語られている。では「即ち」とはどういう意味で使用されているのであろうか。

われわれは、「即ち」を一般的には、前の文章で述べたことを、別の文章で言い直す時に使ったり、前にあげたものと、続けてあげるもののが一致する場合などに使う用語として多用している。

ここで試みに『出雲国風土記』樅縫郡樅縫郷条の記事を見てみたい。

樅縫郷 即ち郡家に属けり。(名を説くこと、郡の如し。) 即ち、北の海の濱の業利磯に窟あり。

この後出の「即ち」は前文と直接関係ないところで使用されていることがわかるであろう。『時代別国語辞典(上代編)』は「すなはち」に、〔即座に、直ぐに〕・〔そこで〕・〔さて〕の3用法があることを事例をもって示す⁽¹⁰⁾。樅縫郷の後出の「即ち」は〔さて〕に相当する「ところで」に近い用法といえるであろう。意宇郡条の安来郷伝承の「故、安来といふ。即ち、北の海に昆壳崎あ

り」も同様の事例である。『時代別國語辞典』はこの安来の事例を挙げ、「話題を転じて次の文を引き起しす、接続詞的」な用法とする。

「櫛縫郷 即ち郡家に屬けり」の「即ち」の用法は、『時代別國語辞典』にはない事例であり、「それは」の意で用いられているのであろう。

正倉史料15例を概観すると、前文と「即ち正倉あり」が結びつきそうなのは、田地に言及する⑧の美談郷、⑩の須佐郷、⑪の横田郷に限定され、他の事例は「付記」の域を出ないようである。

「即ち正倉あり」を「分な検討をせず」、「即ち」を空開気的な理解にとどめ、郷家に付設する形で正倉があったとするのは⑫の事例をもってしても問題を含むであろう。郷名起源伝承を受けて、「即ち正倉あり」とするのは直ちに正倉が郷家に付設しているということを示しているのではなく、その郷域に存在しているという意と理解すべきと考える。

ここで参考になるのが、延暦14年の先の太政官符の「百姓の居、郡を去る僻遠にして、山川を跋渉し、納貢に劳あり。倉舎を以て比近に加ふべし」である。百姓の「納貢」の困難さをふまえての政策であるならば、その正倉の設置場所は交通の便のよいところということになろう。

⑬の飯石郡堺の漆山川邊の仁多郡の藥湯は、現在の木次町湯村の山雲湯村温泉であり、「駿驛なり往来ひ」交通の要地であったことが判明する。⑭の事例、そして「即ち」の用法を考慮するならば、郷家付設のケースの存在も認めつつも、基本は交通路にあったと考えるべきではなかろうか。ここに正倉を考察する一つの觀点が見いだせたのである。

5. 交通路と正倉 —— 個別的研究 —

正倉と交通路の関係を想定してみた。「百姓の「納貢」の困難」を念頭に、正倉の所在地をみると、3例を除いて郷家から「十里以上」離れていることがわかる。3例のうち美談郷も「九里二百疊歩」の距離にある。

飯石郡では⑮三澤郷、⑯須佐郷、⑰來嶋郷に正倉が置かれていた。飯石郡内には河川に沿って波多径、須佐径、志都美径が整備されていた。須佐郷、波多郷は須佐径・波多径に沿い、飯石郡家の所在する多瀬郷とは山を隔てた地域空間を構成している。道を中心と正倉を位置づけるならば、備後国への道沿いの來嶋郷・多瀬郷は飯石郡家付設の正倉、また飯石郷・熊谷郷・三屋郷は一岸郷内の正倉、須佐郷、波多郷は須佐郷の正倉と割り振りがなされていたのではなかろうか。

仁多郡には⑲三澤郷、⑳横田郷、㉑飯石郡堺の漆山川邊藥湯の三正倉がみえる。問題は㉒の漆山川邊藥湯の所在郷であるが、岡部春平の『出雲神社考（天保4年序・弘安3年跋）』は明確に三澤郷内とする¹⁰。加藤義成氏作成の『出雲國風上記』地図でも三澤郷内に位置づけている¹¹。

その比定に間違がないとするならば、三澤郷には2つの正倉があったことになろう。三澤郷の領域は広大（『和名抄』では三澤・阿位・漆仁郷の三郷に分立、郷甲の「里」が人口の増加により「郷」となったのか）であり、三澤郷家は郷家からの距離を勘案すると阿位付近と考えられる。

仁多郡家から備後国恵宗郡への比市山をとおる道沿いには、㉓三澤郷の正倉が、伯耆国日野郡へ

の阿志毗縁山をとおる道沿いには⑬横田郷の正倉が、郡家所在郷の三處郷には郡家付設正倉が想定される。また、飯石郷への漆仁川沿い道には薬湯の正倉があり、道沿いの布施郷、そして三澤郷の一部（里）の正倉として使われていた可能性が強い。

大原郡の場合は⑯屋代郷の正倉が認められる。大原郡家は当初、屋裏郷に所在していたが、『出雲國風土記』編纂段階では郡の西端の斐伊郷に移っている。屋代郷は山雲郡の多義村への道沿いにあったと考えられ、屋代郷の正倉は屋代郷とその隣郷の神原郷が使用していたと思われる。郡家から最も遠い海潮郡は、阿川郷・佐世郷・来次郷・斐伊郷とともに斐伊郷所在の大原郡家付設正倉が割り与えられていたのであろう。もと郡家が屋裏郷に所在していた段階では隣郷であったのが、郡家の移動により勞を多く背負う形になったのである。飯石・仁多がそれぞれ3つの正倉を抱えているのを考慮すると、郡家移転の時期が『山雲國風土記』編纂時期に近く、正倉対策が僚っていなかったからとも考えられる。

本論の山発点である山雲郡の場合は、⑦漆沼郷、⑧美談郷の正倉がみえる。ここでは山雲郡家から東への山陰道沿いに⑦漆沼郷の正倉が、郡家から北への樅縫郡への道沿いに⑧美談郷の正倉が設置されたと考えられる。漆沼郷の正倉は漆沼郷・健部郷、美談郷の正倉には美談郷・宇賀郷・伊努郷・杵築郷、山雲郡家付設正倉は出雲郷・神戸里が対応すると考えられる。

島根郡には⑩手染郷の正倉がみえる。島根郡は東西に長く、郡家から一番離れた美保郷は実に「二十七里」の距離を測る。手染郷の正倉は美保郷への道沿いに設置され、手染郷・美保郷・片江郷・千羽駅家の正倉であり、郡家正倉は郡家所在郷と考えられる山口郷、そして加賀郷・法吉郷・生馬郷・朝鈴郷・余戸里に対応すると考えて間違いないであろう。

6. 意宇郡・神門郡の正倉

秋鹿郡・樅縫郡には正倉はみえないが、両郡とも4郷からなる下郡であり、その郡域の狭さから百姓の「納貢」の勞は考慮されず、郡家所在正倉で処理されたのであろう。

問題は意宇郡・神門郡の正倉である。意宇郡には5つの正倉が確認できる。意宇郡をとおる基幹道路は山陰道であり、国府・意宇郡家の位置は両隣の伯耆国・出雲郡から測るにはほぼ中間の絶好地を占めていることがわかる。意宇郡家から西の出雲郡界までの意宇郡諸郷は南北の領域が狭く、大草郷・忌部神戸・拝志郷・宍道郷・宍道駅家と直線状に並んでおり、「納貢」の勞を吸収する正倉は、多くを必要とせず中間の拝志郷に1つ置かれたものと考えられる。

問題は意宇郡家である。何故なら、意宇郡家の正確な位置は史料上不明だからである。確かに各郷への距離は意宇郡家を中心報告はされているが、起点の意宇郡家については何ら語ることがないからである。それは編纂主体の山雲国造が居を構えている場所であり、山雲世界の中心だったことに他ならない。しかし、意宇郡家の所在地は次の文で垣間見られるのである。

黒田驛 郡家と同じき處なり。郡家の西北の方二里に黒田村あり。土の體、色黒し。故、黒田と

いふ。舊、此處に是の驛あり。即ち號けて黒田驛といひき。今は郡家の東に屬けり。今も猶、舊の黒田の號を追へるのみ。

意宇郡家は『出雲國風土記』による限り、「郡家と同じき處なり」なりをふまえれば、行政区分では黒田駅に属していたことになろう。では意宇郡大領出雲臣廣嶋の家族の戸籍は黒田駅に登録されていたのであろうか。そこで注目したいのは、黒田駅の移動である。元は黒田駅は「郡家の西北の方二里」の地にあった。しかし、『出雲國風土記』編纂段階では「郡家と同じき處」に移動したという。注目すべきは、「郡家と同じき處」という表現は「同所」という意味ではないという点である。それは「今は郡家の東に屬けり」の一文をおさえれば、意宇郡家の東側に隣接して置かれていたことが理解できよう。

この黒田駅の移動は重要である。何故なら意宇郡家の「西北二里」にあった黒田駅が意宇郡家を頭越しに、意宇郡家の東に移されたということを意味しているからである。これは単なる駅家という施設の移動ではなく、駅戸を含む黒田駅という行政地域空間の移動と考えるべきではなかろうか。黒田駅の東への移動の結果、意宇郡家から最も近い郷家は黒田駅の「西北一里」（意宇郡家からは西北三里一百二十歩）にあった山代郷となったのである。

大胆な仮説となるが『出雲國風土記』編纂段階の意宇郡家の所在郷は山代郷と考えたい。すなわち意宇郡家は山代郷の東端に位置し、その東に黒田駅が所在していたのではなかろうか。

『出雲國風土記』によれば郡家所在郷には1例として正倉の記事はみえない。しかし、郡家には正倉の記事が欠けていても、山雲郡家の例から正倉があったと理解すべきとしてきた。ところが意宇郡家の所在郷が山代郷とした場合、山代郷の正倉記事は郡家所在郷の唯一の正倉記事となろう。意宇郡家は出雲国府と同所ということから、郡家付設の正倉を離して設けたと考えたい。その地が团原遺跡である。

意宇郡には桙志郷・山代郷の正倉以外に①山國郷、②舍人郷、⑤賀茂神戸の正倉が確認されるが、3正倉とも意宇郡家の東方に位置している。意宇郡家から伯耆国への山陰道沿いには余戸甲、野城駅家、舍人郷が続く。その舍人郷の正倉に対応するのが舍人郷・安来郷・飯梨郷であろう。山陰道の舍人郷の先が山國郷であり、その正倉を櫛縫郷・屋代郷・丹理郷が使用したと考えられる。

賀茂神戸の正倉は特別な事情があったようである。『出雲國風土記』によれば、出雲国には賀茂神戸、忌部神戸、出雲神戸、そして秋鹿郡・橋綱郡・山雲郡・神門郡に各1つの神戸がみえる。その中に正倉が置かれたのは賀茂神戸1つのみである。この事実は何を語っているのであろうか。

忌部神戸、出雲神戸はともに出雲国一国に限定される神々（神社）に係わる神戸であるのに対して、賀茂神戸は大和国の葛城の賀茂社の神戸であり、「独立採算」的な存在であったのではなかろうか。加藤義成氏は「この神戸里にだけ特に官倉があったのは、遠い人和の賀茂社への貢米を貯えておいて、適宜所要の品物と代えなどして送った」とし、天平6年出雲計会帳の「賀茂神に進上る税」に注目するが、卓見である^[15]。その特殊性が、他の正倉設置の諸郷（三里）よりも規模が小さい賀茂神戸（二里）に正倉を置かしめたのである。

不思議なのは神門郡である。神門郡は8郷・余戸・駅家2・神戸で構成されており、出雲国内では意宇郡に次いで大きな郡となる。その神門郡には想定される郡家付設正倉以外に『出雲国風土記』からは正倉は確認できないのである。

その事実を受け止める時、いくつかの解釈が可能である。まずは正倉記事の欠落という事態を想定することも可能であるが、根拠もない、そのような解釈は方法的には「逃げ」であり、今後の研究の進展を視野に入れた場合、取るべき方法ではない。

神戸里・余戸里・朝山郷以外は山陰道に沿っており、かつ比較的平坦であり、古志郷所在の郡家付設正倉で事足りた可能性も強い。まずは史料が語るよう神門郡には郡家付設正倉以外に正倉はなかったと理解すべきであろう。その点をおさえれば、神門郡の郡家付設正倉は他郡のそれに比し、規模が大きかったのは確実である。その確認は今後の考古学の成果によるしか方法はないであろう。

文献史学から、唯一指摘できる事実は、神門郡の郡司が出雲国造と並ぶ有力在地首長である神門臣であった点である。出雲国の正倉設置には特に基準がなく、各郡が地域の実情をふまえ施策を講じていることをふまえれば、神門臣氏の正倉政策のあらわれともいえよう。

7. おわりに

以上、『出雲国風土記』の正倉記事を交通の観点から検討してきた。『出雲国風土記』の正倉の文献史学からの本格的研究は加藤義成氏の研究以外に皆見の限り見られない。その加藤氏の研究も『出雲国風土記』の正倉記事の細部に立ち入ったものではなかった。本論は交通という一つの観点で、雑駁に論じたものであり、恣意的解釈も含め、多くの問題を含んでいると思う。しかし、停滞している『出雲国風土記』の正倉の研究にささやかな刺激を与えることはできたと考える。最後に本論を通して得られた『出雲国風土記』にみられる「郷の正倉」の性格について一言し、まとめとしたい。『出雲国風土記』の正倉を、郷に所在したことをもって「郷倉」とする見解もあるが⁽¹⁴⁾、そのような観点では、出雲国が国・郡・郷制下にある限り、何処に作ろうが「郷倉」となるのは当然である。検討してきたところから言えば、「郡の正倉」を地域の実情に合わせ、分置したものと理解すべきである。

延暦14(795)年7月15日の太政官符は、各地域世界の実情に合わせ展開されていた郡家正倉の分散化現象をふまえ、全国レベルでより徹底化した「一郷一院」策として採用しようとした布告であったのである。(本稿を執筆するにあたり、斐川町教育委員会六道年弘氏にお世話になった。)

註

- (1) 『山雲国出雲郡家正倉跡(後谷V遺跡発掘調査概報)』鳥根県斐川町教育委員会、1993年。『出雲国出雲郡家正倉跡II(後谷V遺跡第2次発掘調査概報)』鳥根県斐川町教育委員会、1994年。中山敏史「古代の役所のしくみと役割——斐川町後谷V遺跡の調査をめぐって——」(『うやつべ』第3号、斐川歴史を語る会、1994年)。池田満雄・穴道乍弘「郡衙と正倉跡」(山本清編『風土記の考古学・3・出雲国風土記の卷』同成社、1995年)。

- (2) 『風土記』は日本古典文学大系『風土記』(岩波書店、1977年)を使用する。尚、固有名詞の表記については助詞を削除した。
- (3) 加藤義成『古代山雲の正倉』(『史跡出雲國山代郷正倉跡』島根県教育委員会、1981年)。
- (4) 『類聚三才格』国史大系によるが書き下しは筆者。
- (5) 鈴木啓『陸奥國風土記』逸文の世界』(『図説 福島県の歴史』河出書房新社、1989年)。
- (6) 加藤義成『出雲國風土記参究』(原書房、1962年)。
- (7) 秋本吉郎 註(2)と同じ。
- (8) 『古代官衛の終末をめぐる諸問題』第3回東日本埋蔵文化財研究会、1994年。山中敏史・佐藤興治『古代の役所』(岩波書店、1985年)。
- (9) 「郷家」に関しては拙著『日本古代社会生活史の研究』(校倉書房、1994年)を参照。
- (10) 『時代別国語大辞典(上代編)』
- (11) 岡部春平『出雲神社考』(千家和比古氏に閲覧の機会をいただいた。郷別に事象をまとめる注目すべき編纂方法を展開する)。
- (12) 加藤義成 註(6)と同じ。参考図として加藤作成地図を付す。
- (13) 加藤義成 註(6)と同じ。
- (14) 阿部義平『官衛』(ニューサイエンス社、1989年)を参照。



VI ま と め

1. 遺物の検討

本遺跡からは縄文土器、弥生土器、古式土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器、打製石斧、砥石など多時期にわたって多くの遺物が出土した。その中で、県内でも平野部では出土例が限られる縄文後期前葉、晩期の土器や打製石斧、また杭列造構とともにまとまって出土した中期末の弥生土器は、縄文・弥生時代の生活の様子を考える上で極めて重要な資料である。しかし、これらは造構が伴わず数量的に少ないため十分に比較検討することが困難である。従って、今後周辺の調査例とも併せ改めて検討していく必要があると思われる。

ここでは、建物造構の時期を決定づける時期の須恵器・土師器・土師質土器を取り上げて若干の検討を試みてみたい。また、文字資料として重要な墨書き土器については、平石 充氏に検討をお願いした。

(1) 造構に伴う遺物

造構に明らかに伴った遺物は、以下の4点がある。

- 1区 SB 04 P₅出土の須恵器壺（第14図）
- 7区 SD 05 出土の土師器高壺（第36図1）
- 7区 SK 01 出土の須恵器壺（第36図2）
- 7区 SK 03 出土の須恵器壺片（第36図3）

このうち、SB 04 のP₅から出土した須恵器は、底部に高台が付き、丸味のある胴部をもつもので長頸壺になる可能性がある。壺には珍しく胴下半部の内外面にタタキ痕跡が認められる。ほかに第30図3に示す壺も同様のタタキ痕跡がある。このような例は松江市出雲国庁跡⁽¹⁾や同市丁の坪遺跡⁽²⁾の長頸壺にみられ、7世紀末～8世紀前半の時期とされている。造構外の遺物で7世紀末のものがあまりないことからSB 04は8世紀前半頃の時期とみてよいものと思われる。

SK 01 から出土した須恵器の壺は、形態・技法的特徴から国庁第4形式⁽³⁾、即ち、8世紀代に位置づけてよいものと思われる。また、SD 05 から出土した土師器は古墳時代のもので、橢形の壺部をもつ高壺である。

(2) 造構に伴わない遺物

a. 須恵器について

造構は伴わない須恵器はおもに1区と7区から多く出土している。第16図7と第43図8はともに古墳時代のものとみられる。奈良時代以降の須恵器では、第16図8・9、第43図9・11の蓋、第16図11～16、第43図13～17の環皿類が柳浦編年第4式⁽⁴⁾と考えられ、8世紀後葉～9世紀後葉に位置づけられる。但し、第15図11の壺、第43図12の蓋はやや新しく位置づけられよう。

第15図20の壺は、穴道町小松古窯跡群⁽⁵⁾から類似の口縁部をもつ壺蓋類がみられ奈良時代後半から平安時代初めの時期とされている。

このように造構外の須恵器については奈良時代後半～平安時代の時期に集中していることから礎石建物に何らかの関連性があるものと考えられる。

b. 上師質土器について

土師質土器についてはその大半が礎石を覆っている層より上層から出土していること、その出土量が多いことにより、建物の廃絶時期に関わる可能性があるものと思われる。

土師質土器の分類については1区出土のもののみ既に記しているが、もう一度まとめてみる。

・高台の付かないもの

皿形土器 I類、IIa類・b類・c類・d類、III類、IV類

环形土器 I類、II類

椭形土器 I類、II類、III類

・脚付きのもの

皿形土器 a類、b類

环形土器 a類、b類

・高台付きのもの

皿形土器 I類、II類

环形土器 I類、IIa類・b類、III類、IV類

椭形土器 I類、II類

以上、I類～IV類は口径の大きさより分類し、さらにa類～d類は形態的特徴から細分化した。この中で、高台の付かないものの环形土器と椭形土器は数量が少い上に、口径・形態にバラエティーがあり、今後再検討する必要があろう。

これら土師質土器の年代的位置づけは、高台の付かないものの皿形土器の形態的特徴が類似し、脚付きが出現することから分類・編年が検討されている松江市石台遺跡⁽⁶⁾や町内の西石橋古墳群中の西土墳墓⁽⁷⁾に類例を求めることができよう。それによると、西土墳墓では12世紀～13世紀という時期が与えられているので、1区出土の土師質土器は平安時代末から鎌倉時代初期のものとみることができる。

註

(1) 松江市教育委員会『山雲国府跡発掘調査概報』1970年

(2) 松江市教育委員会『丁の坪遺跡・片山遺跡』1981年

(3) (1)と同じ

(4) 柳浦俊一「出雲における歴史時代須恵器の編年試論」(『松江考古3号』松江考古学談話会1980年)

(5) 穴道町教育委員会『小松古窯跡群範囲確認調査報告書』1983年

(6) 島根県教育委員会『石台遺跡』1986年

(7) 川原和人・桑原真治『島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓』(『古文化談叢第18集』九州文化研究会1987年)

(3) 墨書き土器について

釈文

□口倉

礎石建物SB02周辺出土の須恵器高台付壺の底部外面に墨書きがみられた。須恵器の詳細については本文に譲るが、年代は8世紀後半～9世紀初頭と考えられる。

墨書きは三文字で、すでに「^瓦口倉」との釈文が示されている⁽¹⁾。しかし、「瓦倉」と読むことについては、すでに、一般に正税帳や寺院の資財帳などでは倉の呼称は屋根の葺き方ではなく壁の構造によっていること⁽²⁾、後谷V遺跡では瓦が出土せず「瓦倉」は想定できないことから疑問が示されている⁽³⁾。この墨書きを正倉における倉の呼称と見た場合、二文字目は「瓦」のほか、通常の正倉であることを指す「凡」とも推定できるが、釈文は確定できない⁽⁴⁾。

釈読できる「倉」は、『令集解』職員令主税寮条の「倉廩」の注釈に「謂穀倉曰倉」とみえ、主として稻穀を収納するクラを指し、蔵・庫（器材などを収容するクラ）と区別される。ただし、この区分は必ずしも厳密ではない⁽⁵⁾。さらに、建築としての倉そのもののみでなく、郡家の中の施設名・組織名としても「倉」の文字が使われることもある。すなわち『令集解』儀制令五行条古記には、郡の施設として郡院・厨院と並んで倉院を見る事ができ、長元3（1030）作中成立の『上野国交替実録帳』にも正倉の施設名として正倉院がみえ、郡家の正倉施設総体が倉院・正倉院とも呼ばれることがうかがえる。このような施設名・組織名としての「倉」が使われる例には、造金堂所解案（『大日本古文書』16-281頁）の池辺御倉も挙げることができる。この池辺御倉の実態は明らかではないが⁽⁶⁾、葛木大夫（戸主）所・坤宮宮などと併記されることから、何らかの組織名と考えられる。

「倉」に関わる墨書き土器は、平城京をはじめとして全国で見られる（表20）。千葉県宮台遺跡では「倉」の墨書き土器を出した住居跡から「大福戸」という吉祥句とも取れる文字の書かれた墨書き土器も出土しており、「倉」一字の墨書き土器には、集落遺跡で多く見られる一文字書きの墨書き⁽⁷⁾の範疇に入る可能性のあるものもある。また平城宮第128次調査で出土した一連の「蔵」のみえる墨書き土器は「藏人所」に関わるものと見なしてよい⁽⁸⁾。これらの「倉」関連の墨書き土器は、ただちに正倉を示すものでない。茨城県源氏平遺跡出土の「十垣倉」の墨書き土器は、天平10年の「駿河国正税帳」に土倉がみえることから、建築としての倉の名称を表記した可能性がある⁽⁹⁾。また、この土器には漆紙文書が付着しており、この「土垣倉」と書かれた土器の最終的な使用を考えるうえで興味深い。



第59図 墨書き土器

以上、「□□倉」墨書き器をめぐって検討を加えてきたが、その性格は断定できない。墨書きについては正倉内の倉呼称、倉を含む施設・組織名の墨書きを記載した可能性を想定しつつ、類例の増加を待ってあらためて検討する必要があろう。

平石 光（島根県埋蔵文化財調査センター）

註

- (1) 安川町教育委員会『出雲国山雲郡家正倉跡』1993年
- (2) 松田恵司「古代稻倉をめぐる諸問題」(『文化財論叢』同朋社 1983年)
- (3) 池田満雄・宍道伸弘「都衛と正倉跡」(『風土記の考古学③』同成社 1995年)、山中敏史「正倉の構造と機能」(『古代地方官衙遺跡の研究』 墓書房 1994年)
- (4) 山中敏史前掲4、『復元天平諸國正税帳』(林歎朗・鈴木靖民編 現代思潮社 1985年)注釈
- (5) 村尾次郎「正倉の構造と規格」(『律令財政史の研究』 吉川弘文館 1951年)
- (6) 渡邊光弘「二条大路木簡の内容」(『平城京長屋王邸宅と木簡』 古川弘文館 1991年)は、二条大路木簡にみえる池辺御廻との関連の可能性を指摘する。
- (7) 平川 南「墨書き器とその字形」(『国立歴史民族博物館研究報告』35 1991年)、高島弘志「古代東国村落と文字」(『古代東国の民衆と社会』 名著出版 1994年)
- (8) 奈良時代の藏人については直木孝次郎「奈良時代の藏人」(『奈良時代史の諸問題』 墓書房 1968年)
- (9) 鶴氏平遺跡では倉跡跡は検出されていない(表20文献⑨)。

表20 「倉」関係墨書き器の出土遺跡

出土遺跡	現文	種類	器 形	墨書き部位	出土遺構	年 代	備 考	文献
島根県・後谷V 遺跡	□□倉	須恵器	高台付环	底部外面			出雲郡家正倉跡	
奈良県・平城宮 第32次調査	倉	土師器	环	底部外面	井戸		平城宮	①
奈良県・平城宮 第102次調査	倉	土師器	壺	体部外面	溝		平城宮	②
奈良県・平城宮 第128次調査	倉	土師器	环または皿	底部外面	溝		平城宮	②
奈良県・平城宮 第128次調査	藏人	須恵器	环	底部外面	上坑		平城宮	②
奈良県・平城宮 第128次調査	藏人所	須恵器	环	底部外面	土坑		平城宮 計2点	②
静岡県・舟久保 遺跡	倉	土師器	环	体部外面 逆位	堅穴住居跡	奈良時代 後期		③
神奈川県・四宮 下郷遺跡	倉	土師器	环	底部外面	堅穴住居跡	10世紀前半	相模国府廻廻跡	④
千葉県・小座ふ きき遺跡	大倉口	土師器	环	体部外面 横位	堅穴住居跡	9世紀中	内黒土器	⑤
千葉県・宮台遺 跡	倉	土師器	环	底部外面	堅穴住居跡	8世紀後半		⑥
千葉県・山田水 道跡	佐倉	土師器	环	底部外面	遺構外		計5点	⑦
茨城県・源氏平 遺跡	土垣倉	土師器	高台付环	底部外面	堅穴住居跡	9世紀	漆紙付着	⑧
茨城県・鹿の子 C遺跡	倉カ	須恵器	高台付环	底部外面	堅穴住居跡		国衛工房	⑨
岡山県・津寺遺 跡	倉	土師器	环	底部外面	十器だまり	9世紀		⑩

①『平城宮出土墨書き土器集成 I』 奈良国立文化財研究所 1983年

②『平城宮出土墨書き土器集成 II』 奈良国立文化財研究所 1989年

③『波豆考古』4号

④『四宮下郷』平塚市教育委員会 1984年

⑤『波豆考古』4号

⑥『千葉県大網白里町 宮台遺跡』 島山武都郡市文化財センター 1989年

⑦『山田水道跡』 山田遺跡調査会 1977年

⑧『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』 茨城県 1994年

⑨『茨城県関係古代金石文資料集成 墓書き・鉛書一』 茨城県立歴史館 1985年

⑩『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90 山陽自動車道建設に伴う発掘調査』 岡山県古代吉備文化財センター 1994年

2. 遺構の検討

4次にわたる調査によって検出された遺構は総柱構造の掘立柱建物2棟と礎石建物3棟、側柱のみの礎石建物1棟、柵列1条、溝状造構6条、土坑3穴であった。その他に建物の基礎石になるとみられる礎石(B)と建物の柱になるとみられる柱穴(A)も検出された。このうち土層の堆積状況と切り合いで新古関係を示すと下記のとおりである。

(古)	(新)
SB 0 3	SB 0 1・SD 0 1
SB 0 4	SB 0 2・SD 0 2
柱穴(A)	→ SB 0 6

このことを踏まえて、各遺構を検討してみたい。

まず、建物の重複関係が良くわかる1区について触れてみる。1区は唯一総柱構造の掘立柱建物が検出されたところである。SB 0 3は建物の規模が完全にわかるもので、4×3間の南北に長い高床倉庫である。SB 0 4は断面のみの確認であったが、柱間寸法、柱穴の形状、配置等からSB 0 3と良く似した規模、即ち4×3間程度の高床倉庫になるものと思われる。また、検出面も同様で主軸方向もほぼ同一の直列配置を示すことから、両倉は同時期の建物とみてよいようである。これらの建物の時期はSB 0 4のP₅から出土した須恵器壺から8世紀前半代の時期を考えることができる。ここではこの時期の建物群をI期とする。

1区では掘立柱建物が廃止されたあと、ほぼ同じ位置で礎石建物に建て直されている。SB 0 2は遺存状況が良く、5×3間の南北棟で床面積63.5m²を測る大型の高床倉庫である。SB 0 1も北側は道路下に延び全容は不明だが、おそらく南北は4間程度の倉ではないかとみられる。両倉とも主軸方向をN 1° Eにむけ、東辺礎石列をそろえるなど計画的に配置されている。これらの時期は、礎石周辺から出土した須恵器から8世紀後半～9世紀代とみることができる。この時期の建物群をII期とする。

これらの建物群はI期、II期とも元々は稻穀を大量に貯蔵した高床倉庫ではあったが、何らかの事情でI期建物群は奈良時代前半代に焼失し、その後その場所で建て替えられたII期建物群は奈良時代後期から平安時代前期に焼失し、その後は再建されなかったものと考えられる。本遺跡のように掘立柱建物から礎石建物への移行は正倉の高質化を意味し、稲の長期間保管や防虫害にも適しているといわれている⁽¹⁾。全国的にも奈良時代後期以降に行われていたようで、福島県関和久遺跡(陸奥国白河郡衙)⁽²⁾、鳥取県大高野遺跡(伯耆国八橋郡衙)⁽³⁾などでも知られている。

建物が焼失したことについては、SB 0 2の礎石に焼失した痕跡が認められることに裏付けられる。但し、掘立柱建物の柱根が焼けた痕跡は確認できなかったので、SB 0 3、SB 0 4が焼失したかどうかは、知ることはできない。なお、SB 0 4の掘り方内にも炭化米、炭化物を含むことから、遺構では確認できていないが、SB 0 4が建てられた以前にも火災にあって焼失した倉が建っていた可能性がある。このようにみてくると、1区では同じ場所で少なくとも3回(3時期)にわ

たって倉庫が建ち続けていたことが

想像される。

溝状遺構との関連についてみると、SD 01はSB 01の南側に並行して走るもの西と東は、ともにやや方向を変え幅広くなるところから、SB 01の排水を兼ねたやや大きな

溝とみられる。SD 02はSB 02の雨落ち溝と考えられる。ともに溝内から大量の炭化米が出土したことから、SB 01は南側に、SB 02は西側に建物が倒壊した可能性が強いといえよう。

次に、3区では側柱のみに礎石をもつ建物(SB 05)が検出され、今のところ4以上×3間の南北棟と推定している。しかし、北側の梁行の礎石が1個も確認されていない(動いている可能性もある)ことから、桁行は5間以上になる可能性も十分にある。ただし、大阪市前期難波宮西方官衙倉庫群⁽⁴⁾にみられるように4×3間の建物が南北に建つ双び倉になる可能性も否定できない。

SB 05の時期は主軸方向がN 4°Wを測り1区でみられた延物方向とはほぼ同じであることや、出土遺物も8世紀後半から9世紀代であることから、SB 01やSB 02と同時期の奈良時代後期から平安時代前期とみておきたい。

建物の構造については、おそらく列石の上に根太を置き、その上に板材を貼った低い床張り構造の建物ではなかったかと想像されるが、類例を待って改めて検討してみたい。いずれにしても礎石周辺から炭化米が大量に出土することから、稲穀を貯蔵した倉庫が焼失したものと考えられる。建物の西側で検出されたSD 04は雨落ち溝と考えられる。

一方、5区と7区の両方で礎石が検出されたSB 06は、4×3間の唯一東西棟であることがわかった。1区と3区で検出された礎石建物はいずれも南北棟であるのに対して、SB 06は東西に主軸をとる建物であった。建物の規模、主軸方向からみると、SB 01、SB 02と同時期とみてよいように思われる。また、7区で検出された礎石(B)はSB 07の南西隅の礎石とみられ、SB 06同様東西棟と思われるが可能性にとどめておく。このように建物の主軸方向が変わって検出された場合、千葉県日秀西遺跡(下総国柏馬郡街)⁽⁵⁾や神奈川県長者原遺跡(武藏国都筑郡街)⁽⁶⁾などの例からみて、SB 06はII期建物群の南西隅付近の建物ということがいえそうである。

7区では溝状遺構SD 05が検出された。浅い溝で、小礎まじりの埋土中から古墳時代の土師器高环片が出土した。土層断面、検出面からみると礎石建物の時期には、溝はすでに存在していたと思われるが、残念ながら積極的に同時期の遺構としては捉えることは難しい。

8区でも東西方向にSD 06とSD 07が検出され、遺物は出土していないがSD 05と同じような小礎まじりの埋土で類似した性格の溝であると思われる。SD 06とSD 07との空間距離は7.5mを測り、SD 05を東方に延長すると、ちょうど兩溝の間を通ることになる。このように小規模な溝については、松江市出雲国府跡⁽⁷⁾や同市下黒田遺跡⁽⁸⁾からも確認され、区画用小溝とよばれている。大高野遺跡で確認されている区画溝は2重と3重の部分があるが、この場合は溝幅や

表21 建物遺構の時期

	延 物 名	時 期
I 期	SB 03・SB 04	8世紀前半
	SB 01・SB 02	8世紀後半～
II 期	SB 05・SB 06	9世紀代
	(SB 07)	

表22 建物遺構計測表

測量区 番号	建物 番号	規 格 (面積)	建物 長軸 方向 (N)	柱 行			梁 行			主軸 方位 (度)	床面積 (m ²)	備 考
				側柱(m) (R)	柱間(α) (R)	全長(m) (R)	柱間(α) (R)					
1	SB01	2以上×3	南北	19.3 (1.95) (6.5) (6.5)	6.24 (21)	20.8 (20.8) (7) (7)	20.8 (20.8) (7) (7)		N-1°-E	53.5	礫石、縦柱、炭化米	
1	SB02	5以上×3	南北	11.98 (4.0) (8.0) (8.0) (8.0) (8.0)	5.34 (18)	17.8 (17.8) (6.0) (6.0) (6.0)	17.8 (17.8) (6.0) (6.0) (6.0)		N 1° E	63.5	礫石、縦柱、炭化米	
1	SB03	4×3	南北	7.72 (26)	3.93 (19.5) (6.5) (6.5) (6.5)	8.79 (19.5)	19.3 (19.3) (6.5) (6.5) (6.5)	19.3 (19.3) (6.5) (6.5) (6.5)	N-1.5°-E	44.7	推立、縦柱	
1	SB04	3以上×3	南北	19.3 (1.93) (6.5) (6.5) (6.5)	5.79 (19.5)	19.3 (19.3) (6.5) (6.5) (6.5)	19.3 (19.3) (6.5) (6.5) (6.5)		?		推立、縦柱、側方に炭化米	
3	SB05	4以下×3	南北	11.88 (4.0) (10) (10) (10) (10)	5.94 (30)	20.6 (20.6) (7) (7)	20.6 (20.6) (7) (7)		N-4°-W	70.6	礫石、南間に3列の石を配列 炭化米	
5+7	SB06	4×3	東西	8.33 (26)	5.79 (19.5)	19.3 (19.3) (6.5) (6.5) (6.5)	19.3 (19.3) (6.5) (6.5) (6.5)		N-45°-E	48.2	礫石、縦柱、炭化米	
7	SB07	不規									礫石1箇のみ	

* ()は都記、1尺は27.9cmとした。

深さがもっと大規模であるため、本遺跡とは様相を異にする。

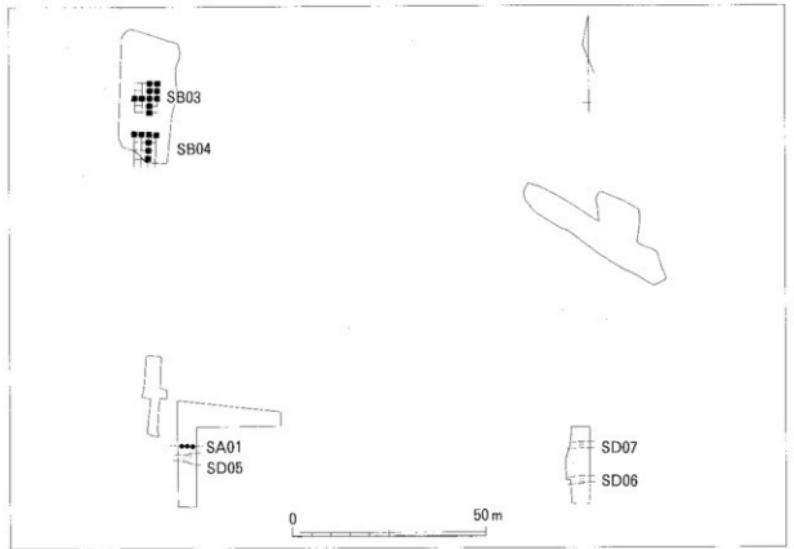
SD 05 の北側で検出された SA 01 は小溝の内側を走る柵列ではないかと思われる。出雲國府跡では、宮の後地区で SD 010 の北側に1.5mの間隔で SA 003 が検出されているように本遺跡の場合も柵列と小溝1～2条で、倉庫群の南側を区画していたと考えられないだろうか。

3. 後谷V遺跡の性格と今後の課題

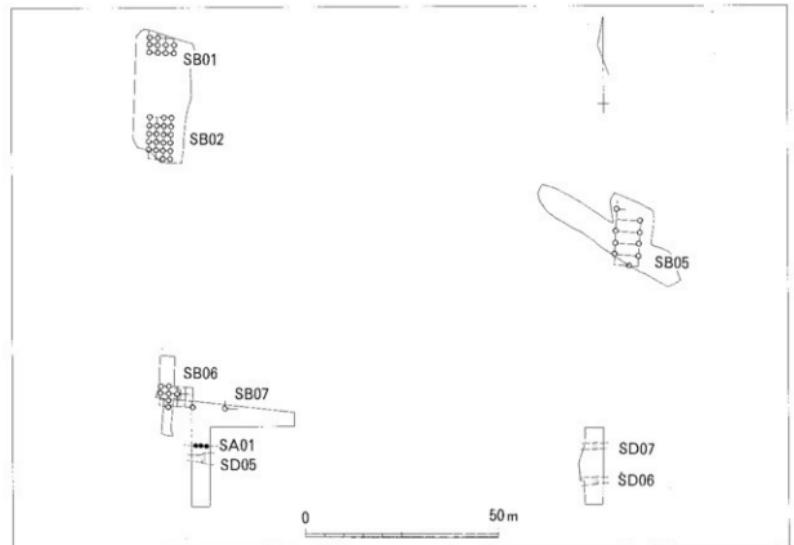
I期とした建物群は SB 03 、 SB 04 で総柱掘立柱建物の高床倉庫であった。また、II期とした建物群は SB 01 、 SB 02 、 SB 06 が総柱礎石建物の高床倉庫、 SB 05 が側柱のみの礎石建物（低床倉庫）であった。さらに SB 01 、 SB 02 、 SB 04 が建物に伴う溝状遺構、 SD 05 、 SD 06 、 SD 07 が区画用小溝（可能性にとどめておく）として確認することができた。

表22に示すように建物のようすがよくわかる建物の規模と床面積をみると、 SB 02 が 5 × 3 間、 SB 06 が 4 × 3 間、 SB 05 が 4 以上 × 3 間の規模になり、床面積は SB 03 が 44.7 m² 、 SB 02 が 63.5 m² 、 SB 06 が 48.2 m² を測る。ところで松村恵司氏⁽⁹⁾ は官衙遺跡の正倉の規模について 4 × 3 間の倉が正倉の中核をなし、集落遺跡の倉とは隔絶した規模をもつとされ、また、山中敏史氏⁽¹⁰⁾ は正倉の平面規模について集落の倉は 25 m² 未満の小型であるのに対して、正倉には 25 ～ 60 m² の中型、 60 ～ 100 m² の大型の倉が多いとされている。先に示した本遺跡の場合は正にこれらの基準によく符合しており、郡家（郡衙）の正倉とするにふさわしい規模であるといえよう。

建物の配置についてみると、まず I 期において SB 03 と SB 04 が 4.7 m の距離をおいて南北に並置に配され、 II 期においても SB 01 と SB 02 が 15 m の距離をおいてやはり南北に並置に配され、しかも各期において東辺礎石筋をそろえるという、極めて計画的に直列配置が踏襲されていたことがわかる。このことは、『上野国交替実録帳』⁽¹¹⁾ の新田郡条において「正倉東第二十倉宅宇 中第一土倉宅宇 東第一土倉宅宇 北第二土倉宅宇 西第一土倉宅宇 西第二土倉宅宇 後略」とみられる記述からも裏付けられるように倉の管理が長期間いきとどき、維持管理が厳格であった。



第60図 I期建物群の配置



第61図 II期建物群の配置

ことの現われであろう。

建物群の全体の範囲についてはⅡ期建物群がよくわかる（第61図）。東西の範囲はSB01とSB02の建物の中心距離（南北ライン）からSB05の建物の中心距離（南北ライン）までは、120m（40.4尺）を測り、東西に何らかの区画施設が伴っていたとすれば、西側の地形を考慮に入れる少し大胆な想定ではあるが150m（50.5尺）近くになるのではないかと思われる。一方、南北の範囲はSB01の北側道路下からSB06の南側の小溝までは120m近くの範囲が想定される。『実録帳』の那波郡条で「正倉院」という言葉が出てくるように正倉は一院を形成していたと考えられる。八橋郡衙の正倉院といわれる大高野遺跡が東西120m、南北105m、山代郷の正倉といわれる松江市山代郷正倉跡⁽¹⁾が一町四方の範囲が推定されていることを考慮すると、本遺跡の場合は東西150m、南北120mの範囲内に倉、屋、管理棟などの諸施設が建てられていたものと考えができるであろう。但し、実際には明確になっていない区画施設を確認することが今後の課題であろう。

ところで、正倉と収納物について少し触れてみる。まず1区で検出されたような高床倉庫はそれ自体が米穀の役割があり、穀稻を大量にバラ積みの状態で収納されたものと考えられている⁽²⁾。山代郷正倉跡や福島県郡山台遺跡（陸奥国安達郡衙）⁽³⁾では、床底部における密積を防ぐための底敷穀稻を使用したと考えられる長粒稻が検出されているが、本遺跡ではそのところを確認するには至らなかった。次に3区のSB05については長期間貯蔵のきく高床倉庫に対して、低床であることから、貯蔵機能は高床より劣る反面、建築は簡易で、作業しやすい施設⁽⁴⁾であることがいえよう。その機能、性格についてはたとえば、脱穀作業後の穀物を仕分けのために一時に集められ保管された施設⁽⁵⁾、農民に貸し与えるための穀稻（出举稻）を収納した屋⁽⁶⁾、本倉から出された物品が直接受給者に渡る中間において一時収納される場所⁽⁷⁾などが考えられるが何より造構の裏付けが必要であるため類例の増加を待って今後の検討課題としたい。

以上述べてきたように、本遺跡は各地の郡家の正倉に匹敵する規模の倉庫群であることが明らかとなった。『出雲国風上記』の出雲郡条に「出雲郷即郡家^{説名}」⁽⁸⁾との記述があるように本遺跡が所在する出雲郷内に出雲郡家が置かれていたのである。本遺跡の倉庫群は正にこの郡家の一施設となる正倉にあたるものと考えたい。そして、この近辺に郡家の政治的中心となる郡庁や館、厨家などの諸施設も存在するものと推測される。

文献記述にあらわれない律令出雲の実態にどこまで迫れるのか、今後の計画的・継続的な調査で明らかになることを期待したい。

註

- (1) 山中敏史「遺跡からみた郡衙の構造」『日本古代の都城と国家』 増書房 1984年、『古代地方官衙遺跡の研究』 増書房 1994年)、富山 博「正倉建築の構造と変遷」『日本建築学会論文報告集』 第216号 日本建築学会 1974年)
- (2) 山中敏史・佐藤興治「古代日本を発掘する－5 古代の役所」岩波書店 1985年
- (3) 大賀靖浩「大高野遺跡」(第21回山陰考古学研究集会発表資料 島根考古学公 1993年)
- (4) 山中敏史「古代の倉庫群の特徴と性格」(『クラと古代土器』ミネルヴァ書房 1991年)

- (5) 勧千葉県埋蔵文化財センター『我孫子市日秀西遺跡の調査概要』1979年
- (6) (2)と同じ
- (7) 松江市教育委員会『山雲国斤跡発掘調査概要』1970年
- (8) 松江市教育委員会『下黒田遺跡発掘調査報告書』1987年
- (9) 松村恵司「古代糧倉をめぐる諸問題」(『文化財論叢』同朋舎 1983年)
 - ⑩ (1)と同じ
- (11) 「上野国交替穴銀帳」(『平安遺文』4609号 1761年)
- (12) 烏根県教育委員会『史跡山雲国山代郷正倉跡』1981年
- (13) 富山 博「律令国家における正倉建築の機能」(『日本建築論文報告集』第214号 日本建築学会 1973年)
 - ⑭ (1)と同じ
- (15) 山中敏史「古代の役所のしくみと役割」(『うやつべ』第3号 斐川歴史を語る会 1994年)
- (16) 池田満雄・宍道年弘「郡衙と正倉跡」(『風土記の考古学③』同成社 1995年)
 - ⑯ (9)と同じ
- (18) 秋本吉郎校注『風土記』岩波書店 1997年

図版